



北島遺跡Ⅱ・石原古墳群第4号墳・諏訪木遺跡Ⅵ・瀬戸山古墳群第29号墳

―市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ―

二〇二一

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第41集

北 島 遺 跡 Ⅱ 石原古墳群第4号墳 諏 訪 木 遺 跡 Ⅵ 瀬戸山古墳群第29号墳

―市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ―

2 0 2 1

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第41集

きた じま い せき
北 島 遺 跡 II

いし はら こ ふん ぐん だい ごう ふん
石 原 古 墳 群 第 4 号 墳

す わ の き い せき
諏 訪 木 遺 跡 VI

せ と や ま こ ふん ぐん だい ごう ふん
瀬 戸 山 古 墳 群 第 29 号 墳

— 市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ —

2 0 2 1

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富んでいる上、我が国及び関東を代表する2大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種の開発が行われ、遺跡を保護・保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を採っています。

本書は、平成25年度に実施された北島遺跡、平成26年度に実施された石原古墳群第4号墳及び諏訪木遺跡、平成27年度に実施された瀬戸山古墳群第29号墳の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

熊谷市教育委員会
教育長 野原 晃

例 言

1 本書は、市内遺跡Ⅶ「北島遺跡Ⅱ、石原古墳群第4号墳、諏訪木遺跡Ⅵ、瀬戸山古墳群第29号墳」の発掘調査報告書である。

北島遺跡 埼玉県熊谷市上川上字前567番144・145 (埼玉県遺跡番号59-050)

埼玉県熊谷市上川上字前567番46・126 (埼玉県遺跡番号59-050)

石原古墳群第4号墳 埼玉県熊谷市石原字羽黒1146番2・3所在 (埼玉県遺跡番号59-025-4)

諏訪木遺跡 埼玉県熊谷市上之字陣鋤2768番3の一部所在 (埼玉県遺跡番号59-016)

瀬戸山古墳群第29号墳 埼玉県熊谷市楊井字瀬戸山6番2所在 (埼玉県遺跡番号59-027-34)

2 本調査は、北島遺跡・石原古墳群第4号墳・諏訪木遺跡が個人住宅建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査であり、瀬戸山古墳群第29号墳がその他工事（個人による農地改良）に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。いずれも市内遺跡発掘調査等事業国庫補助金、県費補助金の交付を受け、熊谷市教育委員会が実施した。

3 本事業の組織は、各調査の「発掘調査の概要」のとおりである。

4 発掘調査期間は、北島遺跡が平成26年1月4日～1月20日、石原古墳群第4号墳が平成26年5月30日～6月26日、諏訪木遺跡が平成26年7月3日～8月23日、瀬戸山古墳群第29号墳が平成28年3月1日～3月25日である。

整理・報告書作成期間は、令和2年4月1日～令和3年3月26日である。

5 発掘調査は、北島遺跡を熊谷市教育委員会蔵持俊輔（調査当時）が、石原古墳群第4号墳・諏訪木遺跡を吉野 健が、瀬戸山古墳群第29号墳を松田 哲がそれぞれ担当した。

また、整理・報告書作成は、各々の発掘調査を担当した者が分担して行ったが、第Ⅱ章については当時調査担当であった蔵持が概ね行い、吉野が補助した。なお、第Ⅰ章及び全体の編集については吉野が担当した。

6 本書の執筆は、整理・報告書作成を担当した吉野が第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章を、松田が第Ⅴ章を分担して行った。また、第Ⅱ章については蔵持が執筆した原稿を吉野が加除修正を行った。なお、体裁や語句については、編集を担当した吉野が全体を通して極力統一を図った。

7 写真撮影は、発掘調査及び遺物を各々の担当者が行った。なお、北島遺跡の遺物については吉野が行った。

8 各発掘調査における基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。また、諏訪木遺跡の出土遺物実測にあたっては、その一部を株式会社シン技術コンサルに委託した。

9 出土遺物は、熊谷市教育委員会で保管している。

10 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略）。

石川日出志 菅谷浩之 島村範久 森田安彦 埼玉県教育局市町村支援部文化資源課
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

11 石器の石材鑑定にあたり、山下照夫氏からご教示を賜った。記して謝意を表します。

凡 例

- 本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。
S A…掘立柱列 S B…掘立柱建物跡 S D…溝跡 S E…井戸跡 S I…竪穴建物跡
S K…土坑 S Z…古墳 S X…性格不明遺構・火葬跡 P…ピット
- 土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。
S…川原石 P…土器 H…埴輪
- 遺構挿図の縮尺は、原則として1/60であるが、それ以外のものは個別に示した。
- 遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。
- 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。また、第V章を除き、原則として同一図版の標高は統一し、Aポイントに表記した。
- 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。
弥生土器・土偶形容器・土師器・須恵器・土師質土器・埴輪・陶器・石器・木製品…1/4
縄文土器・弥生土器（破片・底部）…1/3
ミニチュア土器・土錘・土製耳飾り・鉄製品・鉄鏃・耳環・銭貨…1/2
- 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示し、遺物観察表にできる限り残存率で示した。また、表現方法は、以下のとおりである。
須恵器のうち還元焰焼成の断面は黒塗り、酸化焰焼成の断面は白抜き、これ以外の土師器等土器の断面は白抜きで表現し、灰釉陶器の断面表現は該当図版に示した。また、灰釉陶器の釉薬、赤彩、黒斑の表現については、その都度該当図版に示した。
底部調整 回転ヘラ削り \ 回転糸切り ÷
- 遺物拓影は、原則として、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。
- 遺物観察表の凡例は、次のとおりである。
法量の単位は、cm、gである。また、推定値は丸括弧付けで、残存値は山括弧付けで示した。
胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。
A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫
焼成は、次のように区分した。
A…良好 B…普通 C…不良
- 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。
- 土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行）に照らし最も近似した色相を示した。

目 次

序	IV 諏訪木遺跡の調査	49
例 言	1 発掘調査の概要	49
凡 例	2 遺跡の概要	52
目 次	3 遺構と遺物	54
I 遺跡の立地と環境	4 調査のまとめ	89
II 北島遺跡の調査	V 瀬戸山古墳群第29号墳の調査	93
1 発掘調査の概要	1 発掘調査の概要	93
2 遺跡の概要	2 遺跡の概要	95
3 遺構と遺物	3 遺構と遺物	101
4 調査のまとめ	4 調査のまとめ	114
III 石原古墳群第4号墳の調査		
1 発掘調査の概要		31
2 遺跡の概要		35
3 遺構と遺物		37
4 調査のまとめ		44

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 北島遺跡調査地点位置図	16
第4図 北島遺跡調査区全測図	18
第5図 北島遺跡第1号掘立柱建物跡	20
第6図 北島遺跡第2号掘立柱建物跡	21
第7図 北島遺跡第1号掘立柱列	21
第8図 北島遺跡第1～3号土坑	22
第9図 北島遺跡第1～11号ピット	23
第10図 北島遺跡第1～3号溝跡	25
第11図 北島遺跡第2号溝跡出土遺物	26
第12図 北島遺跡第1号井戸跡	26
第13図 北島遺跡第1号性格不明遺構	26
第14図 北島遺跡遺構外出土遺物	27
第15図 石原古墳群第4号墳調査地点位置図	33
第16図 石原古墳群第4号墳調査区全測図	34

第17図	石原古墳群第4号墳	36
第18図	石原古墳群第4号墳周溝出土遺物	37
第19図	石原古墳群第4号墳第1～6号土坑	39
第20図	石原古墳群第4号墳第6号土坑出土遺物	40
第21図	石原古墳群第4号墳第1～5号ピット	41
第22図	石原古墳群第4号墳遺構外出土遺物	43
第23図	諏訪木遺跡調査地点位置図	51
第24図	諏訪木遺跡調査区全測図	53
第25図	諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡	55
第26図	諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(1)	56
第27図	諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(2)	57
第28図	諏訪木遺跡第2・3号竪穴建物跡	59
第29図	諏訪木遺跡第2号竪穴建物跡出土遺物	60
第30図	諏訪木遺跡第3号竪穴建物跡出土遺物	60
第31図	諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡	62
第32図	諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡出土遺物	62
第33図	諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡	64
第34図	諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡土層説明	65
第35図	諏訪木遺跡第1号掘立柱建物跡出土遺物	66
第36図	諏訪木遺跡第2号掘立柱建物跡出土遺物	66
第37図	諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡出土遺物	67
第38図	諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡	68
第39図	諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡出土遺物	69
第40図	諏訪木遺跡第1～3・5～7・9・10号土坑、第14～17・24・26～28号ピット、第1号溝跡	72
第41図	諏訪木遺跡第4・8号土坑、第2～13・18～23・25号ピット	73
第42図	諏訪木遺跡第4～6・8・9号土坑出土遺物	74
第43図	諏訪木遺跡第15・16・18号ピット出土遺物	77
第44図	諏訪木遺跡第1号溝跡出土遺物	78
第45図	諏訪木遺跡第1号井戸跡、第1号火葬跡	79
第46図	諏訪木遺跡第1号井戸跡出土遺物	80
第47図	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層	82
第48図	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土器(1)	84
第49図	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土器(2)	85
第50図	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土製品	85
第51図	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土石器	87
第52図	諏訪木遺跡遺構外出土遺物	88

第53図	瀬戸山古墳群分布状況、瀬戸山古墳群第29号墳調査地点位置図	96
第54図	瀬戸山古墳群第29号墳調査区全測図	101
第55図	瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(1)	102
第56図	瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(2)	103
第57図	瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(3)	104
第58図	瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(4)	105
第59図	瀬戸山古墳群第29号墳石室全測図	106
第60図	瀬戸山古墳群第29号墳石室鉄鏃出土状況	107
第61図	瀬戸山古墳群第29号墳出土鉄・銅製品（鉄鏃・耳環）	109
第62図	瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）(1)	110
第63図	瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）(2)	111

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	北島遺跡遺構番号新旧対照表	15
第3表	北島遺跡ピット一覧表	24
第4表	石原古墳群第4号墳周溝出土遺物観察表	38
第5表	石原古墳群第4号墳第6号土坑出土遺物観察表	40
第6表	石原古墳群第4号墳遺構外出土遺物観察表	43
第7表	諏訪木遺跡遺構番号新旧対照表	50
第8表	諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表	57
第9表	諏訪木遺跡第2号竪穴建物跡出土遺物観察表	60
第10表	諏訪木遺跡第3号竪穴建物跡出土遺物観察表	61
第11表	諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡出土遺物観察表	62
第12表	諏訪木遺跡第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	66
第13表	諏訪木遺跡第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	66
第14表	諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	67
第15表	諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表	70
第16表	諏訪木遺跡第4～6・8・9号土坑出土遺物観察表	74
第17表	諏訪木遺跡ピット一覧表	77
第18表	諏訪木遺跡第15・16・18号ピット出土遺物観察表	78
第19表	諏訪木遺跡第1号溝跡出土遺物観察表	78
第20表	諏訪木遺跡第1号井戸跡出土遺物観察表	81
第21表	諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土石器観察表	86
第22表	諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表	88

第23表	瀬戸山古墳群一覧表	97
第24表	瀬戸山古墳群第29号墳出土鉄・銅製品観察表	109
第25表	瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）観察表	112

図版目次

図版 1	北島遺跡 調査区・A区全景（東から） 北島遺跡 調査区・B区全景（北から、合成写真）
図版 2	北島遺跡 第1・2号掘立柱建物跡（南東から） 北島遺跡 第1号掘立柱列（北東から）
図版 3	北島遺跡 第1号土坑（南から） 北島遺跡 第2・3号土坑（北東から） 北島遺跡 第1号溝跡、第1～4号ピット（南から）
図版 4	北島遺跡 第2号溝跡、第7～11号ピット（北西から） 北島遺跡 第3号溝跡、第5号ピット（北から） 北島遺跡 第1号井戸跡（東から）
図版 5	北島遺跡 第1号性格不明遺構（北西から） 北島遺跡 第2号溝跡 第11図1、遺構外 第14図1
図版 6	石原古墳群第4号墳 調査区全景（北から） 石原古墳群第4号墳 古墳全景（手前に周溝、東から）
図版 7	石原古墳群第4号墳 周溝（東から） 石原古墳群第4号墳 周溝（北から） 石原古墳群第4号墳 周溝埴輪出土状況（B・C-2グリッド内）
図版 8	石原古墳群第4号墳 第1号土坑、第1号ピット（南から） 石原古墳群第4号墳 第2号土坑（北から） 石原古墳群第4号墳 第3号土坑、第3号ピット（南から）
図版 9	石原古墳群第4号墳 第4号土坑（南東から） 石原古墳群第4号墳 第5号土坑（北西から） 石原古墳群第4号墳 第6号土坑（北西から）
図版10	石原古墳群第4号墳 周溝 第18図1～5 石原古墳群第4号墳 第6号土坑 第20図1・2 石原古墳群第4号墳 遺構外 第22図1～6
図版11	諏訪木遺跡 調査区全景（南から） 諏訪木遺跡 調査区全景（東から）
図版12	諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡（北から） 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡弥生土器壺・土偶形容器出土状況（南から）

- 図版13 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡土偶形容器出土状況1 (南から)
 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡土偶形容器出土状況2 (南・北・西・東から)
- 図版14 諏訪木遺跡 第2・3号竪穴建物跡 (北から)
 諏訪木遺跡 第4号竪穴建物跡 (東から)
- 図版15 諏訪木遺跡 第1・2号掘立柱建物跡 (南から)
 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 (東から)
- 図版16 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡柱穴P3検出状況
 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡柱穴P3板状木製品出土状況
 諏訪木遺跡 第9号土坑弥生土器台付甕出土状況
- 図版17 諏訪木遺跡 第14号ピット礫・緑泥石片岩出土状況
 諏訪木遺跡 第1号溝跡 (中央に第7号土坑、南から)
 諏訪木遺跡 第1号井戸跡、第1号火葬跡 (西から)
- 図版18 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡 第26図1
- 図版19 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡 第26図2、第27図12
 諏訪木遺跡 第4号竪穴建物跡 第32図1
 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 第39図10
- 図版20 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 第39図11
 諏訪木遺跡 遺構外 第52図3・4・8
 諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡 第26図3、第27図4～11
 諏訪木遺跡 第2号竪穴建物跡 第29図1・2、第3号竪穴建物跡 第30図1～11
- 図版21 諏訪木遺跡 第4号竪穴建物跡 第32図2・4
 諏訪木遺跡 第1号掘立柱建物跡 第35図1～5、第2号掘立柱建物跡 第36図1～3、第1・2号掘立柱建物跡 第37図1～3
 諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 第39図2～8・12・13
- 図版22 諏訪木遺跡 第4号土坑 第42図4-1～3、第5号土坑 第42図5-1、第6号土坑 第42図6-1、
 第8号土坑 第42図8-1、第9号土坑 第42図9-1・2
 諏訪木遺跡 第15号ピット 第43図15-1・2、第16号ピット 第43図16-1、第18号ピット 第43図18-1
 諏訪木遺跡 第1号溝跡 第44図1～4
- 図版23 諏訪木遺跡 第1号井戸跡 第46図1～12
 諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第48図1～12
- 図版24 諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第48図13～34
- 図版25 諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第49図35～38、土製耳飾り 第50図1
 諏訪木遺跡 土器 遺構外 第52図1～12
 諏訪木遺跡 土製品・木製品 遺構外 第52図13・15
- 図版26 諏訪木遺跡 木製品 第3号掘立柱建物跡 第39図1
 諏訪木遺跡 鉄製品 第4号竪穴建物跡 第32図3、第2号掘立柱建物跡 第36図4、第1号井戸跡 鉄滓、遺構外 第52図14

- 諏訪木遺跡 石器 第1号竪穴建物跡 第27図13、第3号竪穴建物跡 第30図12、
 第4号土坑 第42図4-4、第3号掘立柱建物跡 第39図9、
 第1号溝跡 第44図5
 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図1～3
- 図版27 諏訪木遺跡 石器 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図4～12
- 図版28 瀬戸山古墳群第29号墳 調査区表土除去状況（南から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 調査区全景（南から）
- 図版29 瀬戸山古墳群第29号墳 石室全景（南から）
- 図版30 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（南・北から）
- 図版31 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（西・東から）
- 図版32 瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部（南から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室 棺床面礫除去後1（南から）
- 図版33 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室 棺床面礫除去後2（南から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部 床面礫除去後（南から）
- 図版34 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室奥壁内側石積状況（南から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁内側石積状況（西から）
- 図版35 瀬戸山古墳群第29号墳 羨道部西側壁内側石積状況（東から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室奥壁付近内側石積状況（西から）
- 図版36 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁内側石積状況（西から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部付近内側石積状況（西から）
- 図版37 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁外側石積状況1（東から）
 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁外側石積状況2（東から）
- 図版38 瀬戸山古墳群第29号墳 玄室棺床面鉄鏝出土状況1・2
- 図版39 瀬戸山古墳群第29号墳 墳丘西側土層断面
 瀬戸山古墳群第29号墳 墳丘東側土層断面
- 図版40 瀬戸山古墳群第29号墳 S P B B' 土層断面1～5
 瀬戸山古墳群第29号墳 S P C C' 土層断面1～5
- 図版41 瀬戸山古墳群第29号墳 S P D D' ～ H H' 西側・東側土層断面
- 図版42 瀬戸山古墳群第29号墳 奥壁内側加工痕1・2
 瀬戸山古墳群第29号墳 東側壁内側加工痕1～4
 瀬戸山古墳群第29号墳 作業風景1～4
- 図版43 瀬戸山古墳群第29号墳 鉄鏝 第61図1～14
 瀬戸山古墳群第29号墳 耳環 第61図15～17
 瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図32・34～38
- 図版44 瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図18～31・39～47
- 図版45 瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図48～53、第63図54～63
 瀬戸山古墳群第29号墳 石室攪乱箇所出土馬骨

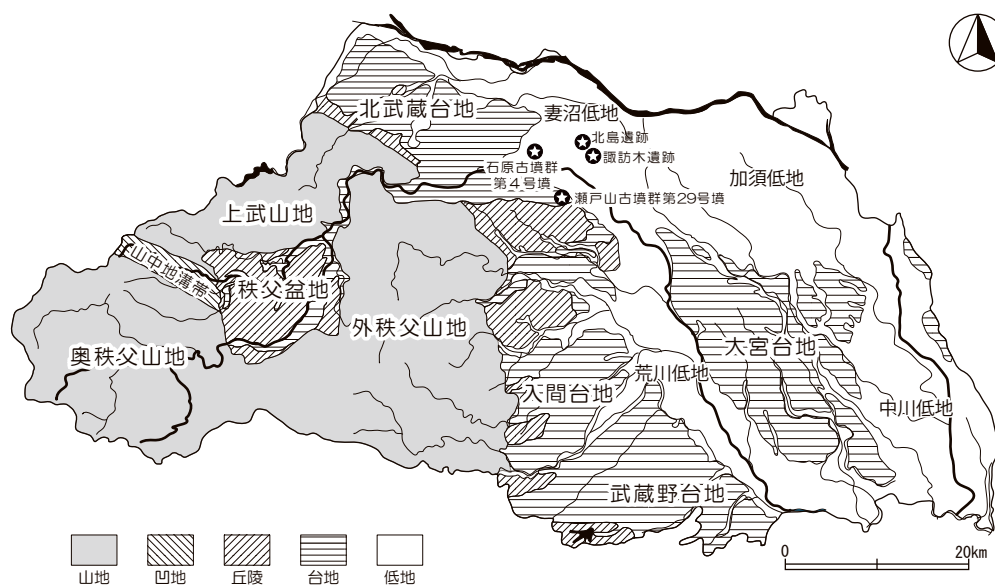
I 遺跡の立地と環境

熊谷市は、平成17年及び平成19年の二度に亘る合併を経て平成19年当時県北初の20万都市となり、平成21年4月に「特例市」へ移行したが、地方自治法改正に伴い、平成27年4月からは「施行時特例市」となり現在に至っている。しかし、近年は人口減少が見られ、現在の人口は20万人をやや下回っている。平成27年の国勢調査当時の人口は198,639人であり、埼玉県で9番目、県北では最大の人口を有する都市である。また、市域は南北に約20km、東西に約14kmと広大であり、面積は159.82km²である。

市域の北側には群馬県との境に利根川が、南側には大里地区（旧大里町）及び江南地区（旧江南町）との境を荒川が、それぞれ西から南東へと流れており、この関東地方の2大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市域の西側に櫛挽台地があり、荒川を挟んで南側には江南台地及び比企丘陵、北側及び東側には妻沼低地が広がっている。また、荒川以北の櫛挽台地の東側には、新期荒川扇状地がある。このように、市域内の地形は丘陵・台地・低地と変化に富み、太古の昔から人々が生活の場としてきた歴史ある地域である（第1図）。

櫛挽台地は、更新世に形成された荒川左岸一帯の総称で、西部の寄居町波久礼付近を扇頂として、東の扇端は、市内三ヶ尻付近からJR高崎線籠原駅付近を通り北東へ、そして、籠原駅から北へ約2kmの西別府付近まで延びている。市域内にある南東側の低い面は寄居面と呼ばれ、今から2～5万年前の立川期に形成されたものである。台地の標高は約36～54mを測り、新期荒川扇状地から妻沼低地へ向かって緩やかに下る。荒川に面した台地南東端には、第3紀層の残丘であり独立丘陵である標高81mの観音山があり、台地との比高差は約25m、沖積低地である新期荒川扇状地との比高差は約35mを測る。

妻沼低地は、新期荒川扇状地と下流に形成された微高地である自然堤防や微低地である後背湿地の地帯に分けることができ、櫛挽台地の東側に広がる完新世に荒川の乱流により形成された新期荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として、東は市内上之～小曾根・肥塚付近、北は上奈良・下奈良付近へと扇状に広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。



第1図 埼玉県の地形図

一方、荒川右岸には、櫛挽台地と同様に更新世に形成された外秩父山地に沿った台地群があり、市内には北から、荒川と江南台地に挟まれた立川期段丘面、江南台地がある。立川期段丘面は、寄居面の連続と考えられるもので、江南台地の北側に連続してあり、周囲の沖積低地との比高差は1m以下である。江南台地は、幅約2kmほどの東西に細長い台地であり、台地面の標高は西部の寄居町立原付近で140mで、東へと徐々に低くなり、東端の市内楊井付近で45mとなっている。この江南台地の南には、和田川を挟んで、西の外秩父山地から半島状に突き出した形の比企丘陵があり、丘陵内には開析が進んだ標高70～90mの山が連なっている。

今回報告する遺跡は、北島遺跡(1)、石原古墳群中の第4号墳(H)、諏訪木遺跡(20)及び瀬戸山古墳群中の第29号墳(S)である。北島遺跡は、市内東部、荒川左岸に広がる妻沼低地の複雑な旧河道によって形成された標高24～26mを測る自然堤防上に立地し、JR高崎線熊谷駅から北東へ約3.0kmにある。石原古墳群第4号墳は、市内中央部、荒川左岸の新时期荒川扇状地、荒川が形成した標高34m前後を測る河岸段丘上に立地し、JR高崎線熊谷駅から西へ約2.5kmにある。諏訪木遺跡は、市内東部、荒川左岸に広がる新时期荒川扇状地と妻沼低地が接する旧河道によって形成された標高23～24mを測る自然堤防上に立地し、JR高崎線熊谷駅から北東へ約2.0kmにある。瀬戸山古墳群第29号墳は、市内南部、荒川右岸の荒川に面した江南台地の東端、和田川と吉野川に挟まれた標高33～35mを測る舌状の台地南斜面に立地し、JR高崎線熊谷駅から南へ約4.0kmにある。

では、周辺の歴史的環境について概観する(第2図、第1表)。

旧石器時代から縄文時代までの遺跡は、市内西部及び荒川右岸に多く見られ、地形的には櫛挽台地及び台地直下の妻沼低地に集中する。旧石器時代については、櫛挽台地東端に立地する籠原裏遺跡(地図未掲載)から出土した黒耀石の尖頭器のほか、荒川右岸の江南台地に立地する鹿島遺跡(100)、本田・東台遺跡(111)、萩山遺跡、向原遺跡、塩西遺跡(いずれも地図未掲載)においてナイフ形石器が、同じく江南台地の寺内遺跡、上前原遺跡、天神遺跡、山神遺跡、千代西原遺跡(いずれも地図未掲載)において槍先形尖頭器が出土している。また、上前原遺跡からは非北方系の細石刃核が出土し、深谷市(旧川本町)に北方系細石刃を出土した白草遺跡(地図未掲載)が所在する。

縄文時代については、草創期は萩山遺跡(地図未掲載)で有舌尖頭器や爪型文土器が出土している。

早期の遺跡は、江南台地東部に多く見られ、県内有数の集落跡の萩山遺跡ではスタンプ型石器が200点以上、船川遺跡(地図未掲載)では竹之内式と呼称される貝殻沈線文土器が出土し、山形押型文土器・無文土器との共伴関係が確認されている。他には、鹿島遺跡、野原宮脇遺跡(112)、南方遺跡(地図未掲載)において燃糸文期後半の竪穴住居跡が検出されている。

続いて、前期は次第に遺跡数が増え始め、荒川を挟んで江南台地の対岸である櫛挽台地の三ヶ尻遺跡(地図未掲載)において集落跡が確認されている。江南台地においては、人々の生活痕跡は西部に移り、富士山遺跡(地図未掲載)において諸磯式期の竪穴住居跡を3軒検出するのみである。

中期になると遺跡数が大幅に増え、特に中期後半の加曾利E式期の遺跡が多くなる。前期とは異なり、台地以外の低地にも集落跡が確認されるようになるが、特に櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中する。一方で、江南台地においては、引き続き権現坂遺跡、富士山遺跡、寺内遺跡、上前原遺跡等(いずれも地図未掲載)で加曾利E式期の竪穴住居跡が見られる。

後期になると遺跡数は減少し、妻沼低地へと移る傾向が見られる。西城切通遺跡(地図未掲載)、場違ヶ谷戸遺跡(60)、中西遺跡(24)等の櫛挽台地から離れた低地でも遺跡が確認されるようになる。この時期の屋外埋甕が、宮下遺跡、萩山遺跡(いずれも地図未掲載)において確認されているが、いずれの遺跡も小規模である。

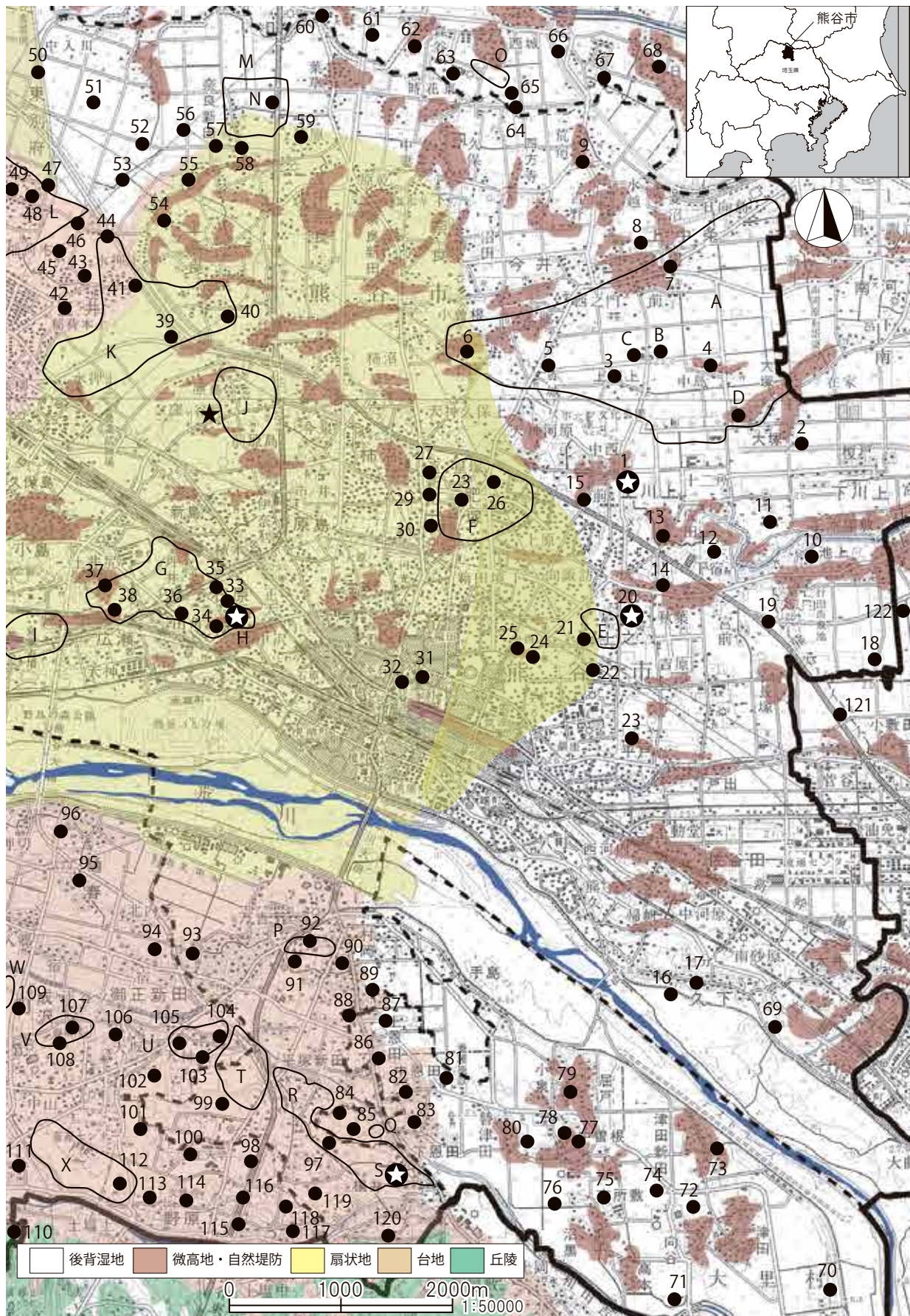
晩期は、遺跡数がさらに減少する。市内東部では低地上に立地する諏訪木遺跡や中西遺跡で集落跡が確認されている。台地上については、特に江南台地では活動の痕跡をほとんど認めることができない。

次の弥生時代では、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。前期末～中期前半の遺跡が櫛挽台地北東端及び台地下の低地に集中するが、確認されたのは集落跡ではなく再葬墓である。横間栗遺跡(地図未掲載)では、前期末から中期前半までの再葬墓が13基検出されており、再葬墓一括資料は1999年3月に埼玉県指定有形文化財になっている。深谷市上敷免遺跡、飯塚南遺跡(いずれも地図未掲載)等でも再葬墓が検出されており、上敷免遺跡では包含層から県内初の遠賀川式土器の壺胴部破片も出土している。

中期中葉以降は、これまでの状況と一変して市内東部の低地上に集落が出現する。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡(19)、その墓域として最古段階の方形周溝墓が検出された池上遺跡、行田市小敷田遺跡(121)等をはじめ、集落とこれに付随する墓域がセットとなり本格的に展開するようになる。中期後半には、前中西遺跡(22)、諏訪木遺跡、北島遺跡等でも集落が営まれ、墓域として前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡(21)では方形周溝墓が検出されている。特に、前中西遺跡範囲中央西寄り南側では、多数の方形周溝墓が検出されており、集落とともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されているが、特筆すべきは、当時本格的な水田経営が行われていたことを物語る、水田へ導水する水路跡・堰跡の灌漑施設が水田跡とともに検出され、その規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目される。このように北島遺跡や前中西遺跡等で大規模集落が展開するようになるが、後期については、市内北部及び西部では確認例が少なく、深谷市明戸東遺跡(地図未掲載)等の遺跡がいくつか点在するのみである。なお、後期初頭以降については、前中西遺跡、藤之宮遺跡で土器片が若干出土しているが、遺構は確認されていない。中条条里遺跡(2)に含まれる東沢遺跡、行田市池守遺跡(122)では、吉ヶ谷式土器が出土している。また、市内南部の荒川右岸の江南台地では、姥ヶ沢遺跡、富士山遺跡(いずれも地図未掲載)が、当該期の集落として確認されている。

古墳時代になると、古墳は台地・自然堤防等の微高地に形成され、集落は台地のみならず低地の自然堤防にも活発に営まれるようになり、低地への進出がより活発化し、次第に遺跡数も増加傾向にある。

前期の遺跡は、近年確認例が増加している。弥生時代から引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、特に北島遺跡では大規模な集落が営まれ、墓域も形成されている。また、北島遺跡は、中条条里遺跡に含まれる東沢遺跡とあわせて河川跡から鋤・鍬をはじめとする多量の木製農具を出土した遺跡として知られるほか、東海地方にその系譜が求められるパレス壺や高坏が多く見られ、近接する小敷田遺跡においても畿内や東海地方等の外来系の土器が多数出土している。墓域としては、新期荒川扇状地の中西遺跡において、方台部検出長が約15mの前期初頭の前方後方形周溝墓が、隣接する前中西遺跡でも旧河道沿いに方形周溝墓が点在して検出されているほか、市内西部の



第2図 周辺遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	熊谷市		62	森谷遺跡	古墳後、奈良、平安
1	北島遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世	63	鶴森遺跡	弥生後、古墳後、奈良、平安
2	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良、平安	64	長安寺遺跡	古墳後、奈良、平安
3	女塚遺跡	古墳後、奈良、平安、中世	65	西城城跡	平安
4	上中条中島遺跡	古墳後、奈良、平安	66	東城城跡	平安
5	赤城遺跡	古墳、奈良、平安	67	先載場遺跡	古墳後、奈良
6	東浦遺跡	古墳前、平安	68	八幡間遺跡	古墳後、奈良
7	中条遺跡	古墳、奈良、平安	69	大里条里推定地	奈良、平安
8	中条氏館跡	中世	70	下田町遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世
9	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中世、近世	71	高城町遺跡	奈良、平安
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良、平安、中世、近世	72	北町遺跡	奈良、平安
11	上河原遺跡	奈良、平安、中世、近世	73	旭町遺跡	奈良、平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	74	中街遺跡	奈良、平安
13	成田遺跡	古墳後	75	仲町遺跡	奈良、平安
14	成田氏館跡	中世	76	宮町遺跡	奈良、平安
15	河上氏館跡	中世	77	宮前町遺跡	奈良、平安
16	久下氏館跡	中世	78	宮前遺跡	奈良、平安
17	市田氏館跡	中世	79	北方遺跡	奈良、平安
18	鶴巻遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安	80	西浦町遺跡	奈良、平安
19	池上遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安	81	高田遺跡	奈良、平安
20	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世	82	西内手遺跡	縄文前、弥生後、奈良、平安
21	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安、中世	83	下恩田中町遺跡	奈良、平安
22	前中西遺跡	縄文晩、弥生中・後、古墳前、奈良、平安、中世、近世	84	原北遺跡	奈良、平安
23	平戸遺跡	弥生中、古墳後、平安、中世、近世	85	原南遺跡	縄文中、古墳、奈良、平安
24	中西遺跡	縄文後・晩、弥生中、古墳前	86	三分一遺跡	奈良、平安
25	箱田氏館跡	平安末、中世	87	腰廻遺跡	奈良、平安
26	八幡上遺跡	古墳後	88	西浦遺跡	奈良、平安、中世
27	肥塚中島遺跡	奈良、平安、近世	89	塚本遺跡	古墳後、奈良、平安
28	出口下遺跡	古墳後	90	北西原遺跡	奈良、平安
29	出口上遺跡	奈良、平安、中世、近世	91	村岡北西原遺跡	平安
30	肥塚館跡	中世	92	村岡館跡	平安末
31	宮町遺跡	奈良、平安、中世	93	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳後、平安、近世
32	熊谷氏館跡	中世	94	宿遺跡	奈良、平安、中世、近世
33	兵部裏屋敷跡	中世	95	宮前遺跡	古墳後、奈良、平安、近世
34	御蔵場跡	近世	96	平山館	中世、近世
35	天神前遺跡	古墳中・後、中世	97	瀬戸山遺跡	縄文早・中、古墳前・後、奈良、平安、近世
36	田角遺跡	平安末、中世	98	下新田遺跡	縄文中、古墳、奈良、平安
37	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中世、近世	99	下原遺跡	縄文、古墳後、奈良、平安、中世、近世
38	不二ノ腰遺跡	奈良、平安	100	鹿島遺跡	旧石器、縄文早、弥生、奈良、平安、中世、近世
39	下河原上遺跡	近世	101	八軒遺跡	縄文、奈良、平安、中世
40	本代遺跡	古墳後、近世	102	向原遺跡	旧石器、縄文早・中、古墳
41	下河原中遺跡	奈良、平安	103	松原遺跡	縄文
42	稲荷木上遺跡	古墳後	104	天神山遺跡	縄文早・後、古墳
43	水押下遺跡	古墳後	105	中原遺跡	古墳、奈良、平安
44	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安	106	成沢上原遺跡	縄文、古墳、奈良、平安
45	玉井陣屋跡	平安末、中世	107	静簡院遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
46	稲荷東遺跡	古墳後、奈良、平安	108	合羽山遺跡	縄文、奈良、平安、中世
47	寺東遺跡	縄文中・後、古墳後、平安	109	代遺跡	縄文中、中世
48	別府氏館跡	平安末、中世	110	石橋山遺跡	縄文中、古墳前
49	別府城跡	平安、中世	111	本田・東台遺跡	旧石器、縄文早、古墳中・後、奈良、平安、近世
50	深町遺跡	縄文中・後、古墳前・後、奈良、平安	112	野原宮脇遺跡	縄文早、古墳後、奈良、平安、中世、近世
51	別府条里遺跡	奈良、平安	113	諏訪脇遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世、近世
52	一本木前遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世	114	元境内遺跡	縄文、古墳中・後、奈良、平安、中世、近世
53	天神下遺跡	古墳前・後、奈良、平安	115	熊野遺跡	縄文早、古墳、奈良、平安、中世
54	奈良氏館跡	平安末、中世	116	荒神脇遺跡	縄文早～後、古墳、奈良、平安
55	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良、平安	117	丸山遺跡	縄文早・中、古墳、奈良、平安
56	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良、平安	118	丸山浦遺跡	縄文早、古墳、奈良、平安、中世
57	西通遺跡	古墳後	119	楊井前原遺跡	古墳後
58	東通遺跡	古墳後	120	安通寺遺跡	古墳後
59	横塚遺跡	古墳前、平安		行田市	
60	場達ヶ谷戸遺跡	縄文後	121	小敷田(条里)遺跡	弥生中、古墳、奈良、平安
61	鷲ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良、平安	122	池守遺跡	古墳前・後、奈良、平安

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
	古墳群、古墳		M	奈良古墳群	古墳中・後
A	中条古墳群	古墳中・後	N	横塚山古墳	古墳中
B	鎧塚古墳	古墳後	O	乙鶴森古墳群	古墳後
C	女塚第1号墳	古墳後	P	村岡古墳群	古墳後
D	大塚古墳	古墳後	Q	原古墳群	古墳後
E	上之古墳群	古墳後	R	瀬戸山古墳群	古墳後・末
F	肥塚古墳群	古墳後	S	瀬戸山古墳群第29号墳	古墳後
G	石原古墳群	古墳後	T	万吉下原古墳群(遺跡)	古墳前・後
H	石原古墳群第4号墳	古墳後	U	天神山古墳群	古墳後
I	広瀬古墳群	古墳後・末	V	静簡院古墳群	古墳後
J	原島古墳群	古墳後	W	行人塚古墳群(遺跡)	古墳前・後
K	玉井古墳群	古墳後	X	野原古墳群	古墳後
L	別府古墳群	古墳後			

妻沼低地の自然堤防では、一本木前遺跡(52)において、約100軒もの膨大な数の竪穴住居跡のほか、4基の方形周溝墓が検出されており、第2号方形周溝墓の主体部からはヒスイ製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉、人歯等が出土している。また、荒川右岸の江南台地の万吉下原古墳群(遺跡)(T)、江南台地の低地の下田町遺跡(70)において方形周溝墓が検出されており、方台部全長が22mの前方後方形周溝墓を盟主墓として、他に大小17基の方形周溝墓が検出されている。

一方、前期古墳については、江南台地の南に控える比企丘陵の北縁に、埼玉県指定史跡である塩古墳群・第I支群(地図未掲載)が分布する。この古墳群は、3世紀末～4世紀中頃の前方後方墳第1号墳をはじめ前方後方墳2基・方墳27基で構成され、当地域の出現期古墳の実例として貴重である。また、江南台地の行人塚古墳群(遺跡)(W)では、小鍛冶関連遺物が出土し、県内でも早い段階での製鉄技術の導入が確認された貴重な事例となっている。

中期は確認例が少なく、集落が大規模に展開していくのは中期後半以降となるようである。市内東部では、前期から引き続いて前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡(7)等で集落跡が確認されている。前中西遺跡では、近年竪穴住居跡や溝跡等の検出例が増え、土師器高坏を主体とする土器が多数出土している。藤之宮遺跡では溝跡から水辺の祭祀に使用されたと考えられる高坏・甕を中心とする土器群がほぼ完形に近い状態でまとまって出土している。一方、荒川右岸では、江南台地の低地の下田町遺跡において集落跡が確認されており、玉作り工房を含む竪穴住居跡が検出され、有孔円板形・勾玉形・剣形等の滑石製模造品が出土している。さらに、江南台地の瀬戸山遺跡(97)では、5世紀初頭の集落跡が確認されている。古墳についても確認例が少なく、市内北部の妻沼低地の自然堤防には、市指定史跡である奈良古墳群(M)中の横塚山古墳(N)が所在する。この古墳は、B種横刷毛目の円筒埴輪を有する5世紀後半に比定される帆立貝式前方後円墳であるが、後円部の一部は削平されている。また、同じく妻沼低地の市内東部の中条古墳群(A)では、北島遺跡の田谷地点において5世紀中葉～後半の方墳や円墳が検出されている。

後期になると、遺跡数が爆発的に増加する。集落は大規模になり、台地のみならず低地にも多数出現する。そして、これらの集落は、奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群をなして形成され、多数の古墳群が台地や低地に築造される。

古墳群は、概ね6世紀から7世紀末にかけて、ないしは8世紀初頭にかけて築造されている。妻沼低地では、上之古墳群(E)が分布するほか、飯塚古墳群、上江袋古墳群(いずれも地図未掲載)、乙鶴森古墳群(O)、中条古墳群等が分布する。中条古墳群では、当該期初頭の古墳として鎧塚古墳(B)や女塚

第1号墳(C)等の古墳が築造される。鎧塚古墳は全長43.8mの帆立貝式前方後円墳で、須恵器高坏型器台等（埼玉県指定有形文化財）を伴う墓前祭祀跡が2か所確認されており、築造年代は5世紀末～6世紀初頭に比定される。同時期の築造年代と考えられる女塚1号墳も全長46mの帆立貝式前方後円墳で、二重周溝を持ち楯持武人埴輪3体ほか多数の人物埴輪が出土している。また、当該期の終わりの埴輪を樹立しない7世紀前半に築造された大塚古墳(D)は、大型の胴張型横穴式石室をもち、側壁に角閃石安山岩、奥壁・天井石に緑泥石片岩を使用している。

荒川左岸に広がる新期荒川扇状地の河岸段丘には、広瀬古墳群(I)、石原古墳群(G)が、扇状地の扇端部には肥塚古墳群(F)が分布する。広瀬古墳群中の国史跡宮塚古墳（地図未掲載）は、上円下方墳という特異な墳形を今に残し、7世紀末～8世紀初頭の築造と考えられている。石原古墳群は、6世紀後半～7世紀初頭に築造され、埴輪の樹立を行わなくなる過渡期の古墳群である。肥塚古墳群は6世紀後半～7世紀前半に築造され、川原石乱石積と角閃石安山岩切組積の2種類の胴張型横穴式石室をもつ古墳が確認されており、前者が荒川水系の石材、後者が利根川水系の石材と考えられ、これは地理的な特徴と被葬者の特徴を示す可能性がある。

新期荒川扇状地の東に位置する櫛挽台地には、別府古墳群(L)、在家古墳群、籠原裏古墳群、三ヶ尻古墳群（いずれも地図未掲載）が分布する。別府古墳群及び三ヶ尻古墳群は、6世紀後半～7世紀前半に築造された前方後円墳を盟主墳とする古墳群であり、別府古墳群については、台地縁辺部に分布する古墳は埴輪を有し、台地中程の古墳は埴輪を有しないという特徴がある。また、在家古墳群及び籠原裏古墳群は、いずれも埴輪を有しない7世紀後半～8世紀初頭の築造と考えられる。籠原裏古墳群は、墳形が八角形を呈する古墳が検出されたことが特徴として挙げられ、後述する幡羅郡家とその関連遺跡である国史跡幡羅官衙遺跡群と時期的及び地理的に近い関係にあり、注目に値する古墳群である。また、在家古墳群も、隣接する在家遺跡（地図未掲載）が官衙的要素を持つ8世紀前半～9世紀の方形区画の集落が幡羅郡家の出先機関との見方があり、石室構造においても籠原裏古墳群と共通する部分があることから注目される。

荒川右岸の江南台地では、比較的小規模な古墳群が、樹枝状の谷に仕切られた台地端部に分布し、万吉下原古墳群、瀬戸山古墳群(R)、野原古墳群(X)、阿諏訪野古墳群、円山古墳群、東山古墳群、大境南古墳群（いずれも地図未掲載）が6世紀後半～7世紀前半に築造される。いずれの古墳群も埴輪を樹立するものと樹立しないものが混在し、瀬戸山古墳群及び阿諏訪野古墳群では7世紀後半ないしは末頃まで築造が続く。また、東山古墳群及び大境南古墳群は、小規模な前方後円墳を盟主墳とし他は円墳による構成であるが、7世紀初頭の築造と考えられる東山古墳群第1号墳は、円墳として築造後帆立貝式前方後円墳に改変された特徴を持ち、7世紀初頭頃の築造である大境南古墳群第1号墳は、埴輪樹立の代用として一定間隔に須恵器埴瓶8点が供献されたとされる特徴を持つ。

生産遺跡では、江南台地の姥ヶ沢埴輪窯跡群、権現坂埴輪窯跡群（いずれも地図未掲載）が確認されており、台地崖線部の斜面や台地上の平坦地を利用している。権現坂埴輪窯跡群では、小さな谷を挟んで東側と西側の斜面に窯が並んで造られ、平坦地には工房と考えられる竪穴や粘土の採掘坑も確認されている。これらの埴輪窯は、6世紀前半に操業が始まり6世紀後半まで続き、周辺の古墳へ埴輪を供給していたと考えられ、特に権現坂埴輪窯跡群では、高さ70cmを越す大型の円筒埴輪が作られており、埼

玉古墳群への供給も行われていた可能性が考えられている。

本格的な律令体制が始まる奈良時代以降平安時代、市内には武蔵国の幡羅郡、男衾郡、大里郡、埼玉郡の4郡があったとされ、そのうち市内北部から西部にかけてと深谷市東部の一帯は、幡羅郡に属していたと考えられる。幡羅郡は、上秦、下秦、広沢、荏原、幡羅、那珂、霜見、余部の8郷からなり、規模は中郡である。深谷市幡羅官衙遺跡（地図未掲載）は、東西500m、南北400mの範囲に広がる幡羅郡家跡であり、郡のほぼ中央部の幡羅郷に位置するとされる。これまでに郡庁を除く正倉院、館、厨家、曹司群、道路等の諸施設が確認され、評の時期である飛鳥時代の7世紀後半には小規模な倉庫等の掘立柱建物が建てられ、その後の郡が成立する7世紀末には主要な施設が整えられていったようである。そして、8世紀末には、正倉院の正倉が掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられ、敷地の拡張が行われる。9世紀前半～中葉になると、二重溝と土塁による区画施設が造られ郡家の様相も大きく変化し、この区画施設は、10世紀前半または中頃の正倉院の廃絶後も11世紀前半まで存続していたとされ、これが郡家全体の終焉と考えられている。この幡羅官衙遺跡周辺には、西別府遺跡、西別府廃寺、西別府祭祀遺跡（いずれも地図未掲載）が隣接して所在し、郡家やこれに付属する施設としての位置付けがなされ、2018年2月にはこのうち幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が、国史跡「幡羅官衙遺跡群」として指定されている。西別府遺跡は、幡羅官衙遺跡と一体の遺跡と捉えることができ、幡羅官衙遺跡と同様に、少なくとも9世紀前半～11世紀前半の二重溝と土塁（前身は掘立柱塀で、後に土塁に改変）による区画施設が確認され、幡羅郡家の機能の一部を担っていたと考えられている。西別府廃寺は、郡司が創建に関わったとされる県内でも古い8世紀初頭創建の寺院であり、基壇建物跡、寺院地及び主要伽藍域を区画する溝跡、瓦溜り状遺構等が検出され、多数出土している軒丸瓦や軒平瓦、伽藍廃絶に伴う廃棄土坑の出土遺物、仏教行事の献灯行為に用い一括投棄された灯明皿の出土状況等から10世紀後半まで存続していたと考えられている。西別府祭祀遺跡は、水源の多くが湧泉であった河川の河畔において7世紀後半から11世紀前半まで行われた祭祀場跡であり、祭祀具である石製模造品をはじめ呪術的や仏教色の濃い墨書土器等の土器が多数検出されており、祭祀具や場所を時代とともに変えて祭祀が継続的に行われていたと考えられる。さらに、荒川右岸の江南台地では、8世紀前半～10世紀中頃の古代寺院である寺内廃寺（地図未掲載）が確認され、三重の区画施設を備え、外側には寺院地を区画する大溝、中心伽藍には塔、金堂、講堂、中門、南門の建物跡が検出され、伽藍東側の寺院地区画大溝内には竪穴建物跡50軒以上の寺院の維持管理を担ったと考えられる人々の集落、南側には参道と推定される道路跡も確認されている。この寺内廃寺の西に近接する深谷市百済木遺跡（地図未掲載）では、7世紀代の豪族居宅跡と考えられる遺構が検出されており、両遺跡とも男衾郡の成立を推定する上で重要であると認識されている。なお、百済木遺跡の豪族居宅は、7世紀後半～8世紀初頭の築造である立野古墳群（地図未掲載）との関係において、豪族居宅は古墳群を築造した首長の居住域、古墳群はその墓域との見方もある。

そして、律令体制の経済基盤である税としての稲穀の生産域の整備において、条里は重要な役割を担うが、妻沼低地では条里に関わる痕跡をとどめている条里遺跡がいくつか確認されている。大里郡に属すると推定される中条条里遺跡は、北島遺跡を北西端に東及び南に広がり、池上遺跡以南には埼玉郡に属すると推定される行田市小敷田条里遺跡(121)が続き、その南の荒川両岸の低地に広がると推定される大里条里推定地(69)は大里郡に属すると考えられる。一方、櫛挽台地の北側には、幡羅郡に属すると

推定される別府条里遺跡(51)や道ヶ谷戸条里遺跡（地図未掲載）が存在する。

転じて、集落について飛鳥時代の7世紀後半から平安時代末の11世紀前半までの状況を見ると、櫛挽台地には7世紀後半から形成される幡羅郡家関連集落である深谷市下郷遺跡及び大竹遺跡（いずれも地図未掲載）、櫛挽台地東側の新期荒川扇状地には大規模集落跡である樋の上遺跡（地図未掲載）が存在し、台地ないしはそれに続く微高地に占地する大きな特徴がある。一方、妻沼低地には、7世紀後半以前からの集落である一本木前遺跡や北島遺跡、7世紀末～8世紀初頭頃の出拳木簡を出土した小敷田遺跡等が存在し、荒川右岸の江南台地下の低地には、古墳時代後期の6世紀をピークに、7世紀後半には遺構数が激減し8世紀へと移行していく下田町遺跡が存在する。一本木前遺跡は、別府条里が施工された東端に展開した集落で、低地の微高地にあった集落が再編されていく中、幡羅郡家の影響を受けつつ継続的に営まれた集落であると考えられる。

8世紀前半には、妻沼低地では飯塚北遺跡（地図未掲載）のような大規模な集落が形成され、江南台地の奥部には、荒神脇遺跡(116)や下原遺跡(99)のような集落が点在する。8世紀後半になると、妻沼低地では7世紀後半から中核となる規模を継続してきた北島遺跡ほか、諏訪木遺跡、飯塚北遺跡（地図未掲載）等の大規模集落が増加する一方、古墳時代後期以降累々と営まれた新期荒川扇状地の樋の上遺跡等の集落では衰退傾向となる。

9世紀前半は、妻沼低地の北島遺跡において、大型の掘立柱建物と少数の竪穴建物で構成される区画施設を有する有力者層の居宅が成立し10世紀末まで継続する。また、諏訪木遺跡でも集落が拡大していく。諏訪木遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての、齋串・人形等の木製祭祀具を使った律令祭祀へと変遷する河畔祭祀が行われた河川跡が検出されたほか、9世紀前半～10世紀後半の3つの区画施設を有する集落が確認され、最も大型の区画施設では、9世紀末～10世紀後半には区画の中心的建物として大型の四面廂掘立柱建物が出現している。また、多数の灰釉陶器や緑釉陶器も検出されており、官衙の様相が看取できる。

9世紀後半になると、全体として遺跡規模も遺跡数も縮小の傾向になる。妻沼低地の池上遺跡では、9世紀後半～10世紀初頭の整然と配された掘立柱建物跡群が検出され、埼玉郡を示す「前」の墨書土器が出土している。ちなみに、最近の調査では8世紀後半の須恵器坏に「官または宮」「里刀自」の墨書が見られ注目される成果があり、律令体制下において重要な役割を担った人物や施設の存在が想起される。市街地の新期荒川扇状地に立地する宮町遺跡(31)は7世紀末～10世紀初頭の集落であるが、9世紀後半～10世紀初頭には、火災を受けた大型の四面廂掘立柱建物跡が検出され、その片付けに使われたと考えられる土坑から多量の緑釉陶器や灰釉陶器が出土したほか、鉄斧・刀子・釘、砥石、鞆の羽口も出土したことから、有力者の存在を想起させる官衙的要素がある。また、荒川右岸の江南台地では、郷の有力者宅（郷長）に設置された凶作等に備え備荒米や出拳稲を保管したとの見方がある倉庫群が、丸山遺跡(117)において確認されている。この倉庫群は総柱や側柱式の掘立柱建物であり、9世紀～10世紀前半を主体とする竪穴建物群に併設している。

10世紀前半においては縮小傾向が顕著となり、当該期の集落全般を見渡すと、集落内にあった掘立柱建物が激減し、竪穴建物のみ集落が点在する程度となる。そして、これ以降の10世紀中頃には、11世紀まで続く大規模集落も規模が縮小し、集落内の竪穴建物も小型化、土器を見ると土師器甕に代わって

羽釜が出現し普及する等、食と住に大きな変化があったと推定される。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる時期であり、市内でも館跡が多数見られる。北部では実盛館（長井斎藤氏館跡）（地図未掲載）、西城城跡(65)、東城城跡(66)、東部では中条氏館跡(8)、光屋敷遺跡(9)、成田氏館跡(14)、久下氏館跡(16)、市田氏館跡(17)、中央部では熊谷氏館跡(32)、箱田氏館跡(25)、肥塚館跡(30)、兵部裏屋敷跡(33)、西部では西別府館跡（地図未掲載）、別府城跡(49)、別府氏館跡(48)、奈良氏館跡(54)、南部では村岡館跡(92)等の城館跡や伝承地があるが、その実態は不明なものが多い。東別府地区にある別府城跡では、一部ではあるが現在も土塁と空堀が良好な状態で残っている。三ヶ尻地区では、中世の遺構・遺物が比較的多く検出されている。なかでも黒沢館跡（地図未掲載）は、発掘調査により出隅を持ち全周する堀及び土塁、虎口等が検出され、渡辺華山が記した文献『訪甄録』所収の「黒沢屋敷」の記述と発掘調査成果が一致した大変貴重な例である。上之地区の成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされ、隣接する諏訪木遺跡では、成田氏関連と考えられる遺構や遺物がいくつか検出されている。館跡から南へ約300mの箇所では、中世の居館と考えられる変形方形区画が確認されており、『新編武蔵風土記稿』の成田氏一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている。また、井戸枠に器高70cmを超える13世紀中頃と考えられる常滑産の大甕を使用した井戸跡が検出されている。さらに、古墳時代後期の円墳の周溝埋没後に掘られた土坑からは5,000枚を超える大量の埋蔵銭が出土し、これは15世紀前半を上限とし、成田氏に関連するものであると推定されている。市内南部の江南台地では、中世に続く熊野遺跡(115)、元境内遺跡(114)、諏訪脇遺跡(113)、野原宮脇遺跡(112)等において集落が確認されている。また、これら集落の西に近接する野原古墳群では、平安時代末の金銅宝冠阿弥陀如来坐像が出土し、古墳墳丘が経塚に転用されたと考えられている。さらに、付近にあったとされる能満寺の伝承から中世後期成立の文殊寺の創建にかかる由来を垣間見ることができる。なお、文殊寺一体、元境内遺跡は増田氏館跡の伝承がある場所であり、1996年の館跡の内郭及び堀の発掘調査において中世の塚、近世の土坑・ピット・溝跡等が検出され、中世～近世の陶磁器や銭貨、中世の板石塔婆や五輪塔等が出土している。また、この周辺には、古代において武蔵国国府－上野国間の南北ルートとして知られる官道の東山道武蔵路が通っていたと想定されており、古代以降中世においても古街道の鎌倉道の一つ（上道）として伝わる地域の主要道として長く使用されていたことが推定されている。

中世段階においては、館跡等を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。このことは、近世段階においても同様で、市内では諏訪木遺跡等において調査例が見られるものの、不明な点が多いというのが実態である。

北島遺跡



Ⅱ 北島遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

北島遺跡の調査は、建築主2者それぞれとの調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。なお、建築主を小川辰也氏とする調査区をA区、建築主を小林勝利氏とする調査区をB区と呼称し、調査を実施した。経過については、次のとおりである。

A区は、平成25年12月12日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市上川上字前567番144・145地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号No.59-050 北島遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成25年12月12日に試掘調査を実施した。この調査により、宅地造成された現地表面より151cm下位で埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり地盤改良を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成25年12月19日付け熊教社発第1637号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成26年1月8日付け教生文第5-1359号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成25年12月25日付け熊教社発第313号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

B区は、平成25年12月18日付けで、埼玉県教育委員会あてに、建築主より文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市上川上字前567番46・126地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-050 北島遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成26年1月4日に試掘調査を実施した。この調査により、宅地造成された現地表面より195cm下位で埋蔵文化財の所在が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり地盤改良を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成26年1月4日付け熊教社発第1657号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成26年1月22日付け教生文第5-1418号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成26年1月4日付け熊教社発第1658号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、前述のとおりA区及びB区の2地点が隣接していたことから、平成26年1月4日から1月20日にかけて両区を並行して実施した。調査面積は、各々の家屋建築予定箇所全面の、A区が65.00㎡、B区が78.75㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、掘立柱建物跡、掘立柱列、土坑、井戸跡、溝跡等で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、令和2年4月から令和3年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。なお、遺構の整理に当たって、第2表のとおり遺構の見直しを図り、遺構番号の振替を行った。

次に、土器等の遺物のトレースを行い図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成25年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	根岸 敏彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	森田 安彦
主幹	吉野 健
主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主任	藏持 俊輔
主事	山下 祐樹
主事	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐

イ 整理・報告書作成

令和2年度

教育長	野原 晃
教育次長	田島 斉
社会教育課長	三友 孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲
主査	小島 洋一
主査	星 祥子
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主任	新井 端
主事	山川愛希子
主事	山川 守男
主事	大野美知子
発掘調査員	磯崎 一

第2表 北島遺跡遺構番号新旧対照表 (左：新番号、右：旧番号)

掘立柱建物跡 (SB)		ピ ッ ト (P)		溝 跡 (SD)	
1	A区SB1	1	A区P4	1	A区SD1
2	A区SB2	2	A区P3	2	B区SD2
掘 立 柱 列 (SA)		3	A区P6	3	B区SD1
1	B区SA1	4	—	井 戸 跡 (SE)	
土 坑 (SK)		5	B区P1	1	A区SE1
1	A区SK1	6	B区P2	性格不明遺構 (SX)	
2	A区SK2	7	B区P3	1	B区SX1
3	A区SK2	8	B区P4		
		9	B区P5		
		10	B区P6		
		11	B区P7		



第3図 北島遺跡調査地点位置図

2 遺跡の概要

(1) 北島遺跡について

北島遺跡は、熊谷市東部やや北寄り荒川左岸、標高約23.5～27.0mの妻沼低地の微高地に立地する遺跡である。その範囲は面積約1,129,700㎡と非常に広大であり、東西に長く約1,700m、南北は約1,200mを測る規模である。

本遺跡は、南に弥生時代中期後半～後期初頭の関東屈指の大規模集落跡である前中西遺跡、南東に弥生時代中期中葉の大溝を伴う集落跡や平安時代の掘立柱建物跡を中心とする古代の官衙的要素をもつ集落跡の池上遺跡、池上遺跡に隣接して弥生時代中期前半の方形周溝墓や7世紀末～8世紀初頭の出拳木簡が検出されている行田市小敷田遺跡が所在し、本遺跡を含めて周囲には5世紀中葉の古墳時代中期から7世紀前半の飛鳥時代まで多くの古墳が形成された中条古墳群が所在する等の歴史的環境にある。

本遺跡の存在を知る端緒は、昭和60年から62年にかけて(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団により実施された県営熊谷スポーツ文化公園整備に伴う発掘調査であり、その箇所は現遺跡範囲の北西部に位置する。その後、平成2年まで継続的に調査が行われ、平成6年には上之調節池建設に伴って、また平成10～12年には、熊谷スポーツ文化公園が第59回国民体育大会のメイン会場となったことによる拡張工事に伴って、そして、近年では、ラグビーワールドカップ2019の会場に公園内の熊谷ラグビー場が選ばれたことにより、平成28～29年に新メインスタンド建設等会場整備に伴って調査が行われている。なお、本遺跡は、平成16年度に当初隣接していた天神遺跡、田谷遺跡、天神東遺跡及び上川上東遺跡が本遺跡と一体となるものとの判断により範囲が拡大し、現在の広大な範囲の遺跡となっているが、田谷遺跡においてはやはり公園整備の一環である北東の外周道路建設に伴う調査が、天神東遺跡においては介護福祉施設建設に伴う調査が行われている。

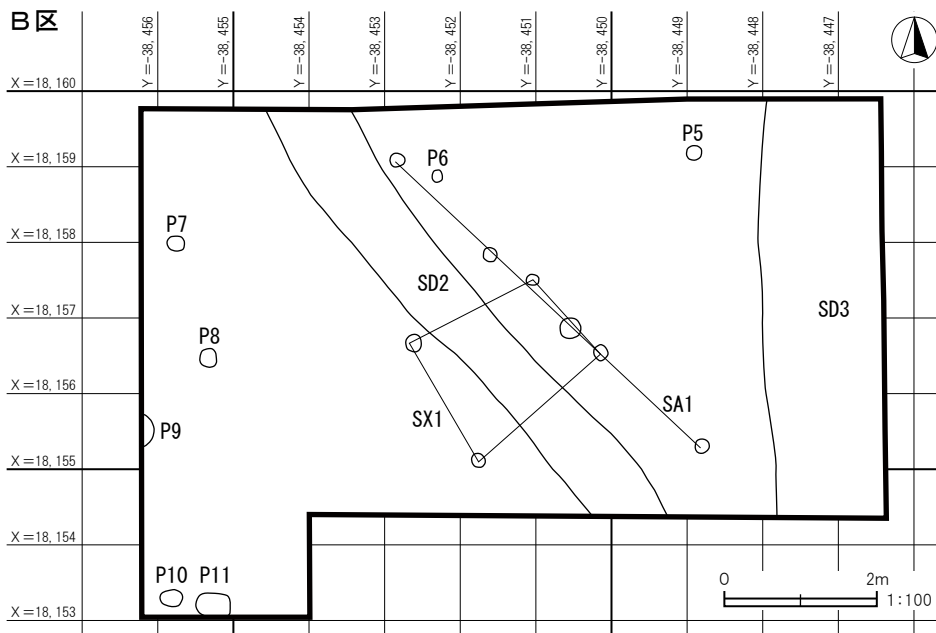
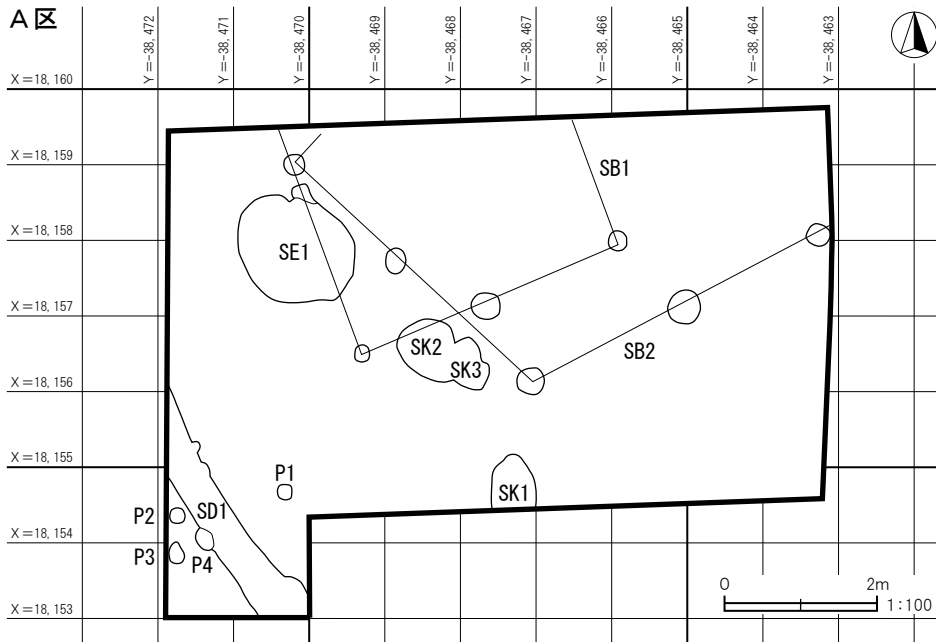
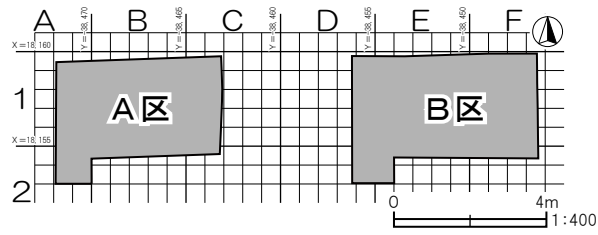
一方、本市教育委員会はこれまでに、国民体育大会のメイン会場整備の一環で公園北西外周市道の改良工事に伴う調査のほか、旧3遺跡では、天神遺跡において公園西のメイン取付け道路建設に伴い、田谷遺跡及び天神東遺跡において農道整備工事に伴い調査を実施している。

以上のような多次に亘る調査により、本遺跡は、弥生時代中期～平安時代を主体とし中世以降まで続く複合遺跡であり、特に弥生時代前期末～後期の生産域を伴う集落跡や7世紀後半から11世紀まで続いた地域有力者層の居宅と考えられる大規模集落跡であることが判明している。遺構については、主体となる時期の竪穴建物跡約930棟、掘立柱建物跡230棟のほか、中世以降まで含めると井戸跡約170基、土坑約1,550基、溝跡約1,300条、掘立柱列9列、道路跡6条、水田跡(条里跡)及び灌漑施設等膨大な数の遺構が検出され、遺物についても土器、石器、木器、金属製品等多種多様及び多量の遺物が検出されている。

(2) 調査の方法

調査の方法は、A・B区両調査区において、世界測地系国家方眼座標(国土標準平面直角座標第Ⅸ系)による基準点測量を委託して行い、両建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、両調査区が網羅できるよう、北西隅をA-1として東へA・B・C…、南へ1・2とし、Aラインは北から南へA-1・A-2と呼称した。また、Bライン以東もAラ

調査区配置



第4図 北島遺跡調査区全測図

インと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1 m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

調査地点は、遺跡範囲の中央部南端付近の箇所、熊谷スポーツ文化公園内の調節池建設に伴う調査である埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（以下「埼玉埋文」という。）第10地点の約200m西に当たる。また、第10地点の南は、北から用水路建設に伴う調査である第13地点、上之調節池建設に伴う調査である第16地点、第14地点（東）及び第15地点（西）へと調査箇所が続く（第3図）。以下、各地点の調査成果の概要を記す。

第10地点 大型の溝跡群、条里地割に関連する大型溝跡が検出され、調査地点の南部では8世紀の掘立柱建物跡がコの字状に配され検出されている（『北島遺跡Ⅱ』1989（財）埼玉埋文）。

第13地点 第10地点から広がる8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物跡と墓壇群、多量の遺物が出土した10世紀の溝跡、第14地点に続く河川跡が検出されている（『北島遺跡Ⅲ』1991（財）埼玉埋文）。

第16地点 8世紀後半～9世紀の小規模な竪穴建物跡及び掘立柱建物跡、9～11世紀の多数の溝跡群が検出されている（『北島遺跡Ⅳ』1998（財）埼玉埋文）。

第14地点 8世紀後半～9世紀の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・溝跡が多数検出され、調査地点の西部では第13地点に続く大規模な河川跡が検出されている。また、弥生時代中期の再葬墓が1基検出されている（『北島遺跡Ⅳ』1998（財）埼玉埋文）。

第15地点 調査地点南半では、8世紀後半～9世紀の竪穴建物跡及び掘立柱建物跡が軸を揃えて配置され、掘立柱建物跡はコの字状の配置が認められる。また、この建物群を迂回する道路跡が検出されている。調査地点北半では、同時期の竪穴建物跡群がやや疎らな状況で検出され、第14地点に続く大規模な溝跡が検出されている（『北島遺跡Ⅳ』1998）（財）埼玉埋文）。

本報告の調査地点では、出土遺物が乏しく時期不明の遺構がほとんどであるが、乏しい中遺物を見ると奈良・平安時代に所属すると考えられ、上記調査地点と同様な状況とも推定され、遺跡範囲と同じく集落の縁辺にあたる可能性があり、その集落の広がりを確認する結果となったと考えられる。

検出された遺構・遺物は、遺構については、掘立柱建物跡2棟、掘立柱列1列、土坑3基、溝跡3条、井戸跡1基、性格不明遺構1基であり、溝跡3条のうち2条から遺物が出土した以外は遺物が出土した遺構はなく時期不明である。なお、遺物が出土した溝跡2条は、一方が奈良・平安時代の可能性が考えられ、もう一方も平安時代（10世紀前半）と考えられる。遺物については極わずかの出土であり、土師器坏・甕、灰釉陶器長頸瓶、土師質土器皿等が見られ、その量は小型コンテナ（大きさ：縦40cm、横24cm、深さ14cm）1箱に大きく満たないものであった。

3 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第5図）

A区の中央部北寄りに位置する。A・B-1グリッド内にある。第1号井戸跡と直接重複関係にあり、本遺構が切れられている。また、第2号掘立柱建物跡及び第2号土坑とは位置的に重複関係にあるが、直接切り合いの関係にはない。

北部が調査区域外であり、柱穴が4基検出されている、梁行2間、桁行2間以上の南北棟側柱式建物と推定される。規模は、梁行3.70m、桁行3.20m以上、検出面積6.82㎡以上の建物であり、梁行の柱間が1.72m、1.98m（6尺前後）、桁行の柱間が西側で2.24m（約7尺）を測り、梁行の東側の柱間がやや広いものである。柱筋の通りが良い建物である。主軸方位は、N-24°-Eを示す。

柱穴は、概ね楕円形の掘方である。P1は南北にやや長い掘方で、長軸0.27m、短軸0.25m、深さ0.05mを測る。P2は北西-南東方向に長い掘方で、長軸0.38m、短軸0.34m、深さ0.05mを測る。P3は南北にやや長い掘方で、長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.05mを測る。P4は南北に長い隅丸長方形の掘方で、第1号井戸跡に切れられているため全体は不明であるが、残存長軸0.28m、短軸0.23m、深さ0.16mを測り、4基の柱穴のうち最も深いものである。

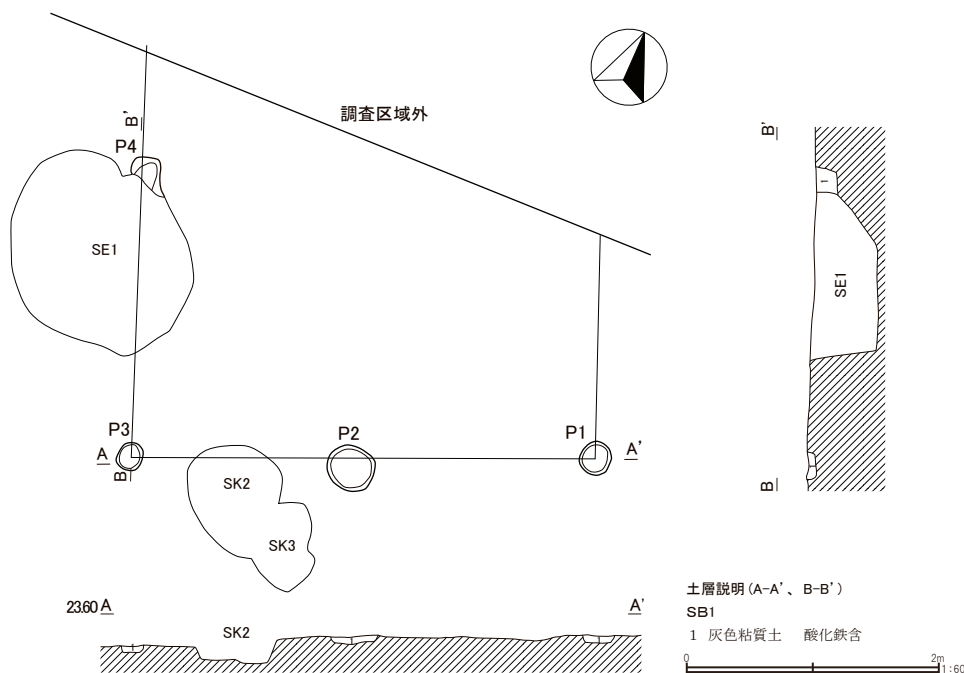
埋土は、いずれの柱穴においても単層の堆積土であった。また、柱痕跡はいずれの柱穴においても土層断面観察上確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第1号井戸跡より古いものである。

第2号掘立柱建物跡（第6図）

A区の中央部北寄りに位置する。A・B・C-1グリッド内にある。直接重複関係にある遺構はなく、



第5図 北島遺跡第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡とは位置的に重複関係にある。

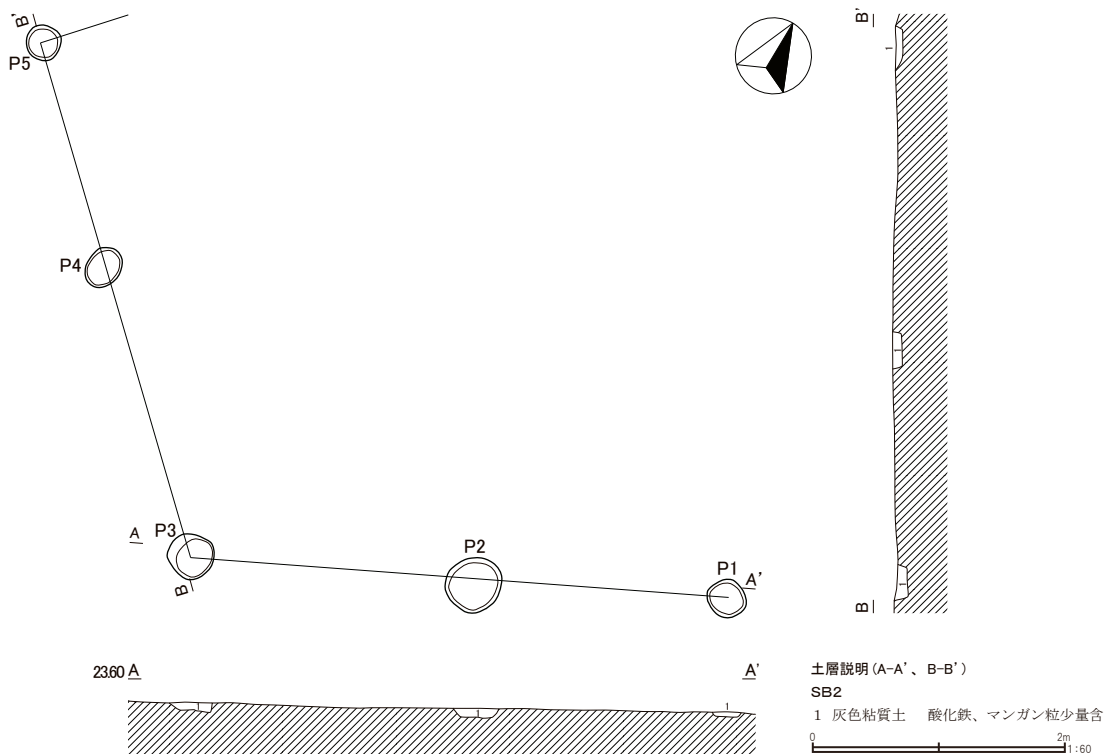
北部及び東部が調査区域外であり、柱穴が5基検出されている、梁行2間、桁行2間以上の東西棟側柱式建物と推定される。規模は、梁行4.2m、桁行4.2m以上、検出面積11.84㎡以上の建物であり、梁行の柱間は南側が2.40m（約8尺）、北側が1.85m（約6尺）、桁行の柱間は西側が2.24m、東側が2.00m（いずれも約7尺）を測り、梁行の南側及び桁行の西側の柱間がやや広いものである。柱筋の通りが良い建物ではあるが、梁行と桁行の柱列が直交せず平面形が方形ではない。主軸方位は、N-47°-Wを示す。

柱穴は、円形ないしは楕円形の掘方である。P1・2・3・5はほぼ円形の掘方で、P1が長軸0.30m、短軸0.29m、深さ0.10m、P2が長軸0.45m、短軸0.43m、深さ0.08m、P3が長軸0.36m、短軸0.35m、深さ0.07m、P5が直径0.27m、深さ0.04mを測る。一方、P4は北東-南西方向にやや長い楕円形の掘方で、長軸0.34m、短軸0.27m、深さ0.07mを測る。

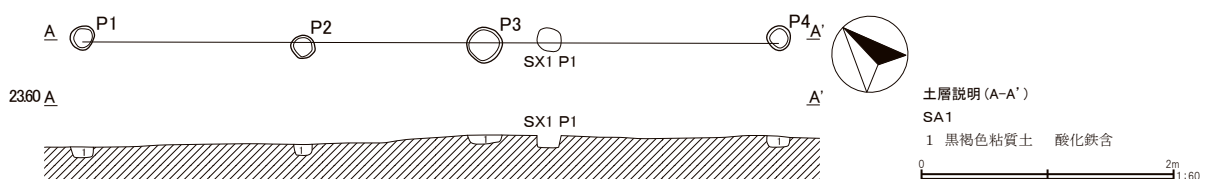
埋土は、いずれの柱穴においても単層の堆積土であった。また、柱痕跡はいずれの柱穴においても土層断面観察上確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明である。



第6図 北島遺跡第2号掘立柱建物跡



第7図 北島遺跡第1号掘立柱列

(2) 掘立柱列

第1号掘立柱列 (第7図)

B区の中央部に位置する。E・F-1グリッド内にある。直接重複関係にある遺構はなく、第1号性格不明遺構とは位置的に重複関係にある。

柱穴が4基検出されており、北及び南に続くとは仮定すると、北は調査区域外または第2号溝跡と重複し、南は第3号溝跡と重複する可能性がある。各柱穴の柱間は、P1-P2-P3-P4の順に、1.75m(約6尺)、1.50m(約5尺)、2.30m(約8尺)であり、P2-P3が狭い。主軸方位は、N-47°-Wを示し、第2号溝跡に概ね並行する。

柱穴は、概ね円形ないしは隅丸方形の掘方である。P1が長軸0.23m、短軸0.19m、深さ0.08m、P2が直径0.18m、深さ0.09m、P3が直径0.26m、深さ0.08m、P4が直径0.18m、深さ0.09mを測る。4基ともほぼ同じ深さであるが、P3は平面形が最も大きい。

埋土は、いずれの柱穴においても単層の堆積土であり、柱痕跡はいずれの柱穴においても土層断面観察上確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明である。

(3) 土坑

第1号土坑 (第8図)

A区の中央部南端に位置する。B-1・2グリッド内にある。重複関係にある遺構はない。

規模は、南部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸0.72m、短軸0.50mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所北側がやや突出する楕円形状を呈する。深さは、土層断面観察から11cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。

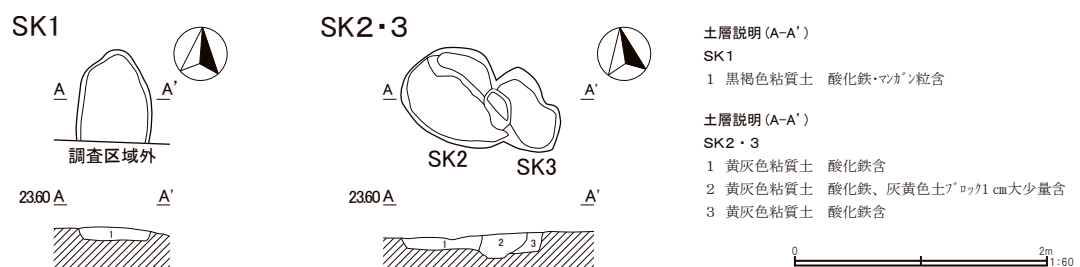
埋土は、単層の堆積土である。

出土遺物は、土師器甕片が検出できたが、図示可能なものではなかった。

時期は、出土遺物から判断すると奈良・平安時代と考えられる。

第2号土坑 (第8図)

A区の中央部に位置する。B-1グリッド内にある。第3号土坑と直接重複関係にあり、本遺構が切っ



第8図 北島遺跡第1～3号土坑

規模は、長軸1.01m、短軸0.76mを測る。平面プランは、やや不整形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で19cmを測る。床面は、北側がやや深く、東端がさらにピット状に最も深くなる箇所がある。

埋土は、概ねレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第3号土坑より新しいものである。

第3号土坑（第8図）

A区の中央部に位置する。B-1グリッド内にある。第2号土坑と重複関係にあり、本遺構が切られている。

規模は、長軸0.70m、短軸0.58mを測る。平面プランは、不整形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から16cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状に堆積していると推定されることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第2号土坑より古いものである。

(4) ピット

ピットは、11基検出された。ピットはその大部分が、A区の南西部の第1号溝跡周辺に、B区の西部において検出された。これらのピットの位置には、規則性はない。

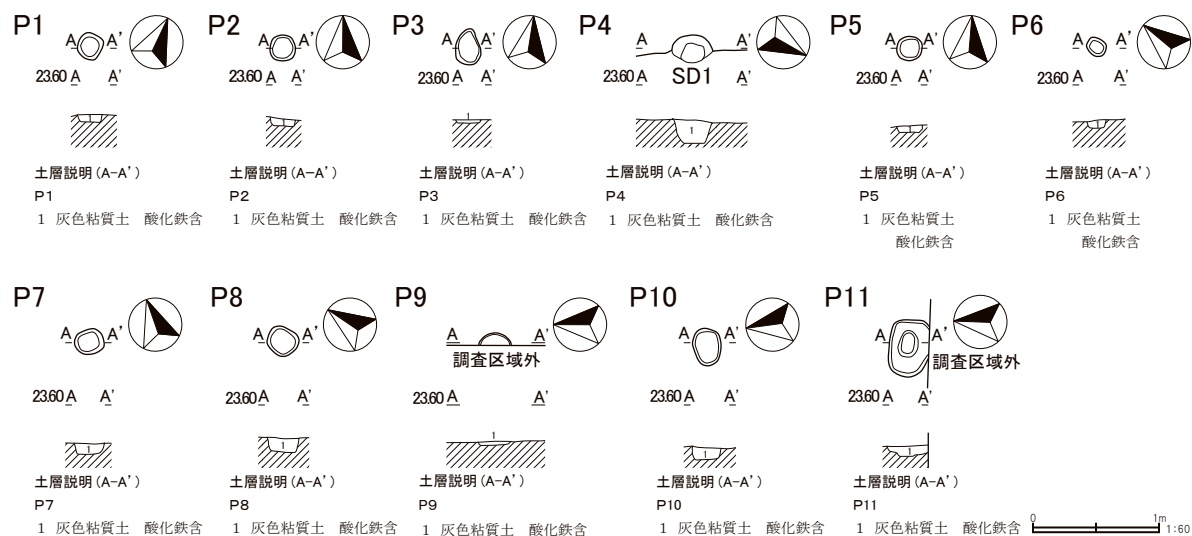
出土遺物については、いずれもピットにおいても検出できなかった。よって、時期は特定し得ない。

以下、一覧表にて記述する（第9図、第3表）。

(5) 溝跡

第1号溝跡（第10図）

A区の南西部に位置し、南東-北西方向に走る。A-1・2グリッド内にある。第4号ピットと重複



第9図 北島遺跡第1～11号ピット

第3表 北島遺跡ピット一覧表（第9図） ※ 〈 〉 残存値

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	重複関係	備考
1	A-2	隅丸方形	21	20	6	なし	
2	A-2	円形	21	21	5	なし	
3	A-2	楕円形	29	17	3	なし	
4	A-2	楕円形?	34	〈21〉	18	SD1	
5	F-1	円形	20	20	6	なし	
6	E-1	楕円形	16	14	8	なし	
7	D-1	隅丸方形	23	20	9	なし	
8	D-1	隅丸方形	25	23	12	なし	
9	D-1	楕円形?	〈26〉	〈9〉	7	なし	
10	D-2	楕円形	30	23	10	なし	
11	D-2	隅丸方形	47	31	8	なし	床面中央部が一段やや深くなる。

関係にあり、本遺構が切られている。また、B区に所在する第2号溝跡と並行する。

規模は、北部及び南部が調査区域外となり、検出残存長3.57m、幅0.48～0.72mを測る。走行軸の方位は、N-37°-Wを示す。また、北東部立ち上がり部にピット状の落ち込みが2か所存在する。

埋土は、レンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。

断面形は逆台形状を呈し、深さは、確認面から22cmを測る。底面は、北西部が最も深く、南東に行くほどやや浅くなることから、南東から北西へ流れるものである。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第4号ピットより古いものである。

第2号溝跡（第10・11図）

B区の中央部に位置し、南東-北西方向に走る。E・F-1・2グリッド内にある。直接重複関係にある遺構はなく、第1号性格不明遺構とは位置的に重複関係にある。また、A区に所在する第1号溝跡と並行する。

規模は、北部及び南部が調査区域外となり、検出残存長7.55m、幅0.70～1.02mを測る。走行軸の方位は、N-36°-Wを示す。

埋土は、レンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。また、掘り直しまたは浚渫の痕跡の可能性が認められ、第2層がその痕跡を示すと考えられる。

断面形は、西側の一部にテラス状の段を持つ逆台形状を呈し、深さは、確認面から41cmを測る。底面は、北西部が最も深く、南東に行くほどやや浅くなることから、南東から北西へ流れるものである。

出土遺物は、第11図1の灰釉陶器長頸瓶が検出された。口径は5.00cm、残存高は復元高で3.00cmである。胎土は、白色粒子及び黒色粒子を含む。焼成は良好、堅緻である。色調は灰色、外面に灰釉が施されている。頸部下半～胴部上半破片である。

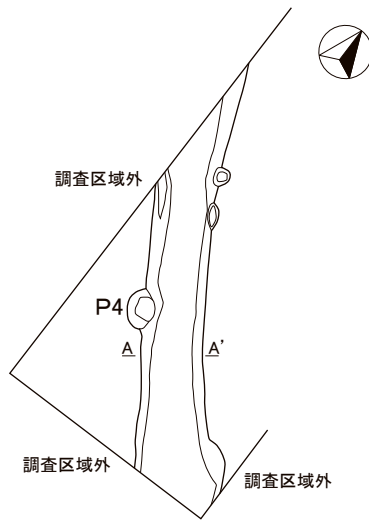
時期は、出土遺物から判断すると10世紀前半と考えられる。

第3号溝跡（第10図）

B区の東端部に位置し、南北方向に走る。F-1・2グリッド内にある。重複関係にある遺構はない。規模は、北部及び南部が調査区域外となり、検出残存長5.51m、残存幅1.44～1.64mを測る。走行軸の方位は、ほぼ南北を示す。

埋土は、レンズ状の堆積であることから自然堆積と考えられる。また、土層断面観察から、堆積時期

SD1



2360 A A'

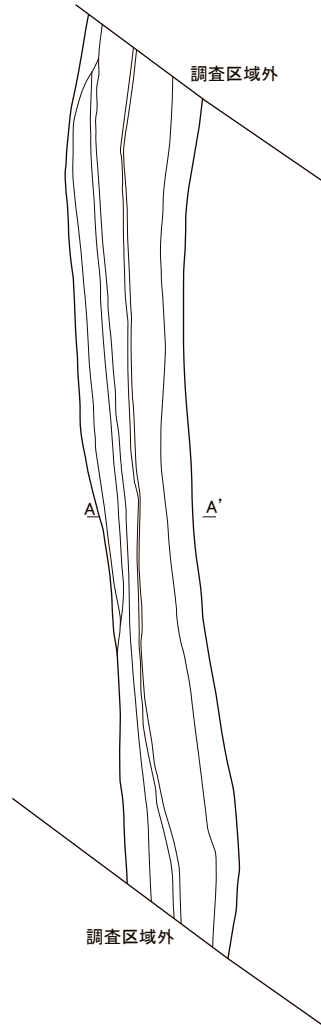


土層説明 (A-A')

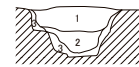
SD1

- 1 黒褐色粘質土 酸化鉄含
- 2 暗灰色粘質土 酸化鉄含
- 3 暗灰色粘質土 明利-7' 灰色土ブロック 3 cm 大多量、酸化鉄含

SD2



2360 A A'

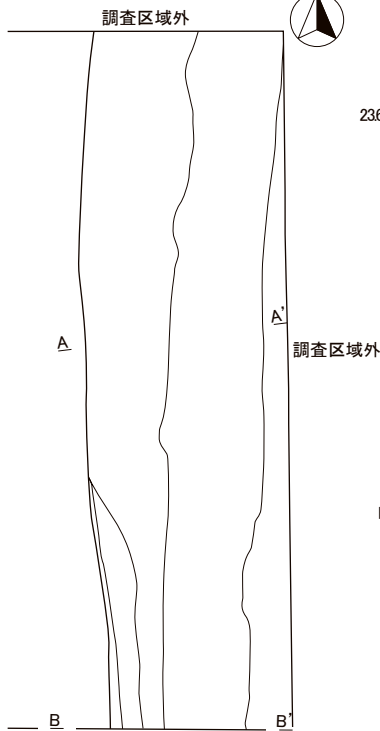


土層説明 (A-A')

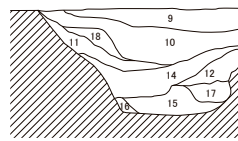
SD2

- 1 灰色粘質土 酸化鉄含
- 2 灰色粘質土 淡黄色7' ロック1 cm 少量、酸化鉄含
- 3 黄灰色粘質土 淡黄色7' ロック3 cm 大多量、酸化鉄含

SD3



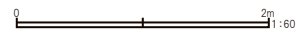
2360 A A'



土層説明 (A-A'、B-B')

SD3

- 1 盛土 酸化鉄、白色軽石含
- 2 暗青灰色粘質土 酸化鉄、白色軽石微量含
- 3 灰色粘質土【水田床土】 酸化鉄層状に含
- 4 灰黄色粘質土 酸化鉄、白色軽石微量含
- 5 黒褐色土 酸化鉄、白色軽石含
- 6 黄灰色土 灰黄色7' ロック1 cm 少量、酸化鉄含
- 7 灰色粘質土 酸化鉄多量含
- 8 灰色粘質土 酸化鉄含
- 9 灰色粘質土 酸化鉄含
- 10 灰色粘質土 酸化鉄含
- 11 灰色粘質土 灰白色7' ロック3 cm 大微量、利-7' 黒色7' ロック1 cm 大、酸化鉄含
- 12 灰色粘質土 灰白色7' ロック3 cm 大多量、酸化鉄含
- 13 暗灰色粘質土 酸化鉄含
- 14 利-7' 灰色粘質土 酸化鉄含
- 15 暗灰色粘質土 酸化鉄含
- 16 暗灰色粘質土 緑灰色7' ロック3 cm 大多量、酸化鉄含
- 17 灰色粘質土 暗灰色7' ロック1 cm 大、酸化鉄含
- 18 灰色粘質土 黒色7' ロック5 cm 少量、酸化鉄含



第10図 北島遺跡第1～3号溝跡

は大きく3時期である可能性が考えられる。

断面形は、北側が逆台形状、南側が両側にテラス状の段を持つ逆凸型状を呈し、深さは、確認面から85cm、南壁の土層断面観察から95cmを測る。底面は、北部が最も深く、南に行くほどやや浅くなることから、南から北へ流れるものである。

出土遺物は、土師器甕片を検出できたが、図示可能なものではなかった。

時期は、出土遺物から判断すると奈良・平安時代と考えられる。

(6) 井戸跡

第1号井戸跡 (第12図)

A区の北西部に位置する。A・B-1グリッド内にある。第1号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本遺構が切っている。

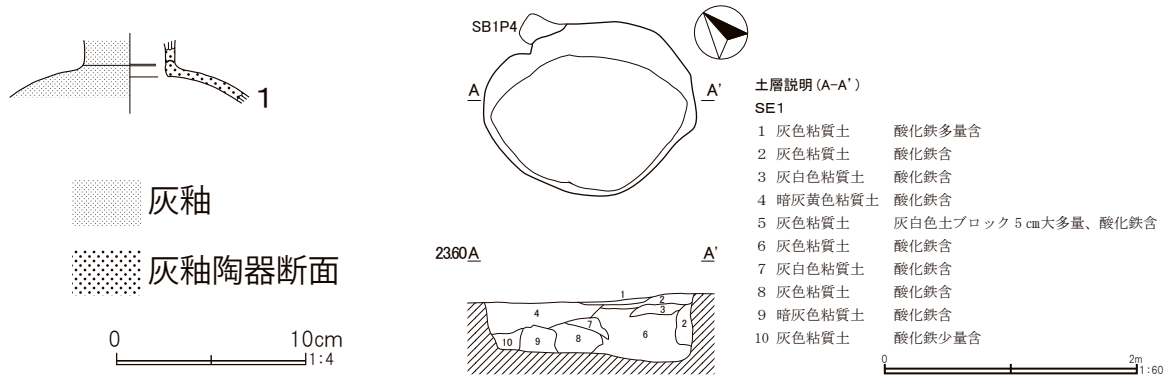
規模は、長軸1.67m、短軸1.37mを測る。平面プランは、隅丸菱形状の楕円形を呈する。深さは、確認面から最深で53cmで底面の東部がやや深くなる。また、通常の井戸と比較するとかなり浅いものである。

埋土は、ランダムに大きなブロック状に堆積していることから、人為的に埋め戻された人工堆積であると考えられる。

断面形は、井筒状である。

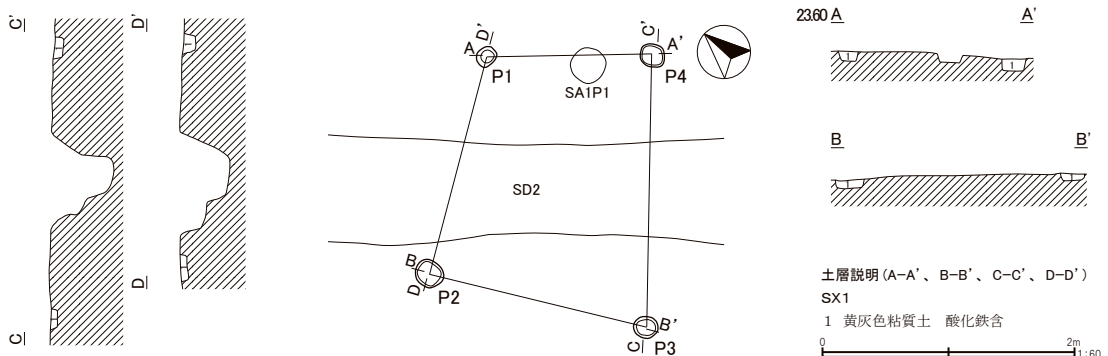
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、出土遺物がなかったことから不明であるが、重複関係から第1号掘立柱建物跡より新しいものである。



第11図 北島遺跡第2号溝跡出土遺物

第12図 北島遺跡第1号井戸跡



第13図 北島遺跡第1号性格不明遺構

(7) 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第13図）

B区の中央部南寄りに位置する。E-1グリッド内にある。直接重複関係にある遺構はなく、第1号掘立柱列及び第2号溝跡とは位置的に重複関係にある。

柱穴状のピットが4基検出されており、平面形は掘立柱建物跡状である。また、第2号溝跡を跨ぐ形で所在する。各ピット間の距離は、P1-P2-P3-P4-P1の順に、1.80m（約6尺）、1.80m（約6尺）、2.15m（約7尺）、1.30m（約4尺）であり、P1-P4が最も狭く、次にP1-P2及びP2-P3である。また、第2号溝跡を跨ぐP1-P2より、P3-P4の距離がやや長い。全体的には、西側が広く東側が狭い台形状の平面形を呈する上に、一見第2号溝跡を跨ぐ橋のような形状である。仮に橋と考えれば、主軸方位は第2号溝跡に直交する角度を示す。

ピットは、隅丸形状の楕円形の掘方である。P1が長軸0.17m、短軸0.14m、深さ0.10m、P2が長軸0.23m、短軸0.21m、深さ0.09m、P3が長軸0.20m、短軸0.17m、深さ0.05m、P4が直径0.19m、深さ0.07mを測る。

埋土は、いずれのピットにおいても単層の堆積土であり、柱痕跡はいずれのピットにおいても土層断面観察上確認できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

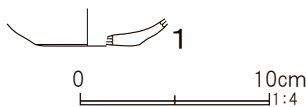
時期は、出土遺物がなかったことから不明である。

(8) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物を掲載する（第14図）。

古墳時代後期から奈良・平安時代までの土師器、土師質土器が出土した。

図示できたのは、第14図1の土師質土器皿である。残存高は1.20cm、底径は復元径で5.60cmである。胎土は、白色粒子、赤褐色粒子、長石及び片岩を含む。焼成は不良である。色調は外面が橙色、内面が浅黄橙色である。底部付近の30%破片である。全体的に摩滅が激しく、調整の読み取りが困難である。16世紀代の所産と考えられる。



第14図 北島遺跡遺構外出土遺物

4 調査のまとめ

北島遺跡においては、熊谷スポーツ文化公園整備をきっかけに昭和60年（1985）から始められ、これまでに30年以上断続的に、26次に亘る発掘調査が行われてきた。その調査面積は、約135,500㎡であり（旧天神遺跡、旧田谷遺跡、旧天神東遺跡、旧上川上東遺跡も含む）、広大な遺跡面積の約8%を占める。遺跡範囲の大部分が熊谷スポーツ文化公園であり、その周辺の水田や住宅地が含まれ遺跡の多くの面積が地下に保存されている中、公園内の構造物や周辺の道路箇所についての記録保存とは言え、市内の遺

跡においては、調査例が格段に多い遺跡の代表格である。それ故、古くは縄文時代後期から江戸時代に至るまでの膨大かつ多種多様な遺構や遺物が検出されているのである。遺構の種類や数量については、本章第2節第1項に記載したが、実にバラエティーに富んでいる。

今回の調査では、数量的には僅かであったが、掘立柱建物跡、掘立柱列、土坑、ピット、溝跡等が検出された。しかし、いずれの遺構からも遺物が出土しないか極僅かであったため、時期の特定が困難であった。その僅かに出土した遺物を見ると、検出された遺構は古代に所属することが推定され、その中でも概ね平安時代に所属するであろうと考えられた。

北島遺跡では、これまでの調査成果から、本調査地点と同時期の古代に所属する遺構は遺跡の全面に広がっており、埋没河川と集落域との関係により集落の変遷が推定されている。その変遷の様子は、時期により盛衰があるものの、飛鳥時代の7世紀後半から平安時代の11世紀までの約450年に亘って古代全期を通じて継続的に営まれている。その最たるものが、埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「埼玉埋文」という。）による第19地点、現在の彩の国くまがやドーム箇所の調査で確認された方形区画の集落である。この集落は、9世紀前半に出現した二重の区画溝に囲まれた中に主屋である大型四面廂掘立柱建物を擁した集落で、この地域の有力者層の居宅と考えられている。この区画施設は、9世紀後半には区画内外に掘立柱建物が充実し、10世紀に入ると規模が縮小し僅かな竪穴建物で構成されるようになり、10世紀末には消滅してしまうという変遷を辿るものである。しかし、遺跡内では、11世紀いっぱいまで続けられた水田経営の維持・管理のための拠点としての集落が継続していた可能性が考えられている。

本調査地点で唯一時期が特定できたのは、10世紀前半と考えられる灰釉陶器長頸瓶が出土した第2号溝跡である。この時期は、前述の方形区画施設が規模を縮小していく時期であるが、本地点近隣の調査成果を見てみると、埼玉埋文調査第13地点において多量の遺物が出土した10世紀の溝跡が検出され、また、第13地点に南接する埼玉埋文調査第16地点においては、9～11世紀の多数の溝跡群が検出されている状況がある。さらに南に接する埼玉埋文調査第14地点の北東部においても、主として10～11世紀前半の遺物を出土する溝跡が多数検出されている。これらの溝跡は、①北西－南東方向に流れる一群、②北東－南西方向に流れる一群、③ほぼ南北方向に流れる一群、④東西方向に流れる一群等に大きく分かれるが、そのうちの①に属する溝跡が、本調査地点で検出された第1号溝跡及び第2号溝跡の特徴と同じ状況であるとともに、第13地点・第16地点・第14地点の①の特徴をもつ溝跡の、ほぼ北西方向の延長上に本調査地点の溝跡が位置するのである。また、出土遺物の時期の点でも、おおよそではあるが合致するのである。以上の点から、本調査地点で検出された溝跡は、この周辺に形成された溝跡群と一体のものとして機能していた可能性があるのではないだろうか。

主な引用・参考文献

- | | | |
|--------------------|------|----------|
| (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 1989 | 『北島遺跡Ⅱ』 |
| (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 1991 | 『北島遺跡Ⅲ』 |
| (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 1998 | 『北島遺跡Ⅳ』 |
| (公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 2018 | 『北島遺跡XⅣ』 |

石原古墳群第 4 号墳



Ⅲ 石原古墳群第4号墳の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

石原古墳群第4号墳の調査は、建築主（濱田信英氏）との調整を経て、現地が山林であることから、個人専用住宅の建築に付随する駐車場整備予定地において樹木の伐根を行うことにより埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。なお、個人専用住宅の建築予定地については、平成12年9月13日及び平成26年2月3日に別の届出者による開発に伴って実施した試掘調査により埋蔵文化財の所在が確認されなかったことから、調査対象からは除外し慎重工事の措置とした。経過については、次のとおりである。

平成26年4月30日付けで、埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市石原字羽黒1146番2・3地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-025 石原古墳群）に該当し、また平成12年9月13日及び平成26年2月3日の、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため実施した試掘調査により、既に開発予定地の西半部の現地表面下29cmで古墳時代後期の古墳周溝及び円筒埴輪片を確認していた。

個人専用住宅建築に伴う駐車場整備予定地は、前述のとおり樹木の伐採伐根工事を伴うもので、これにより埋蔵文化財が破壊を受ける影響があると判断したため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成26年5月12日付け熊教社埋発第51号で埼玉県教育委員会あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付した。その後、建築主あてに平成26年5月15日付け教生文第4-110号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成26年6月5日付け熊教社埋発第99号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成26年5月30日から同年6月26日にかけて行われた。調査面積は、駐車場整備予定箇所全面の73.50㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、古墳の周溝跡、土坑、ピットで、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。なお、調査中、検出された溝跡が検出の位置及びその状況から西に隣接して墳丘が所在する埋蔵文化財包蔵地・石原古墳群第4号墳（埼玉県遺跡番号59-025-4）に伴う周溝と判断されたため、本報告では遺跡名称として当該名称を使用する。

整理・報告書作成作業は、令和2年4月から令和3年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

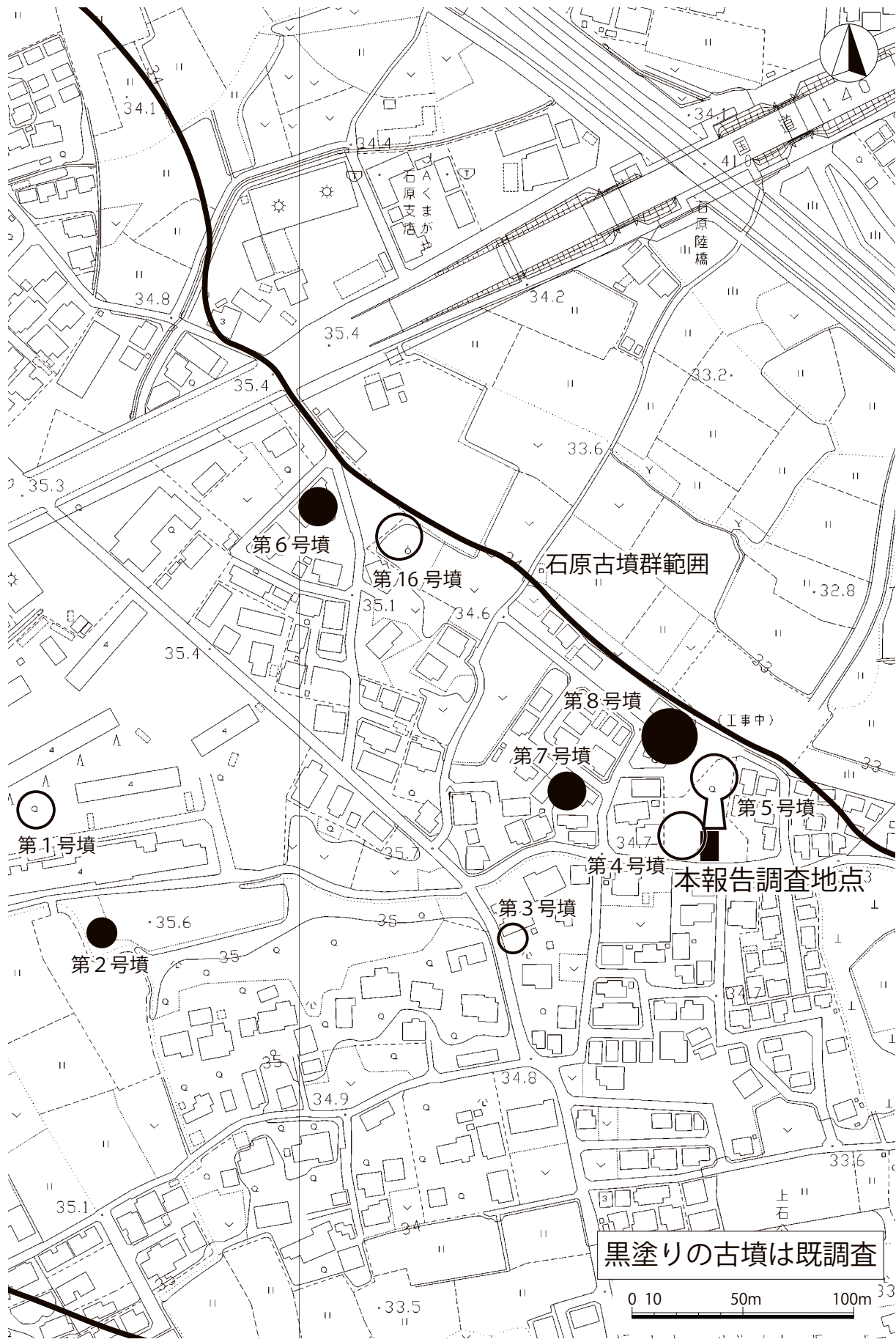
平成26年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	岩上 精純
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
主査	杉浦 朗子
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主任	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
発掘調査員	原野 真祐

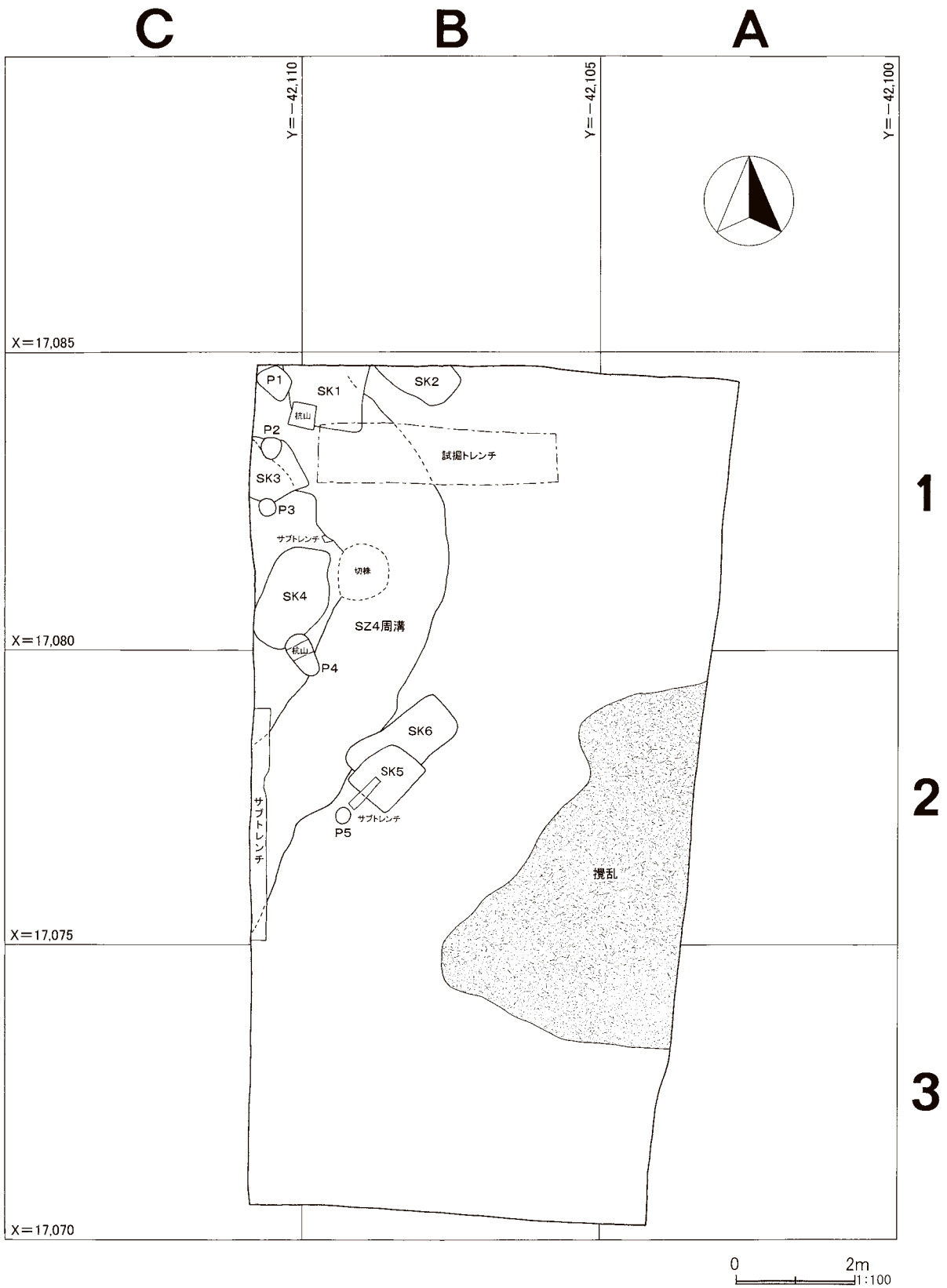
イ 整理・報告書作成

令和2年度

教育長	野原 晃
教育次長	田島 斉
社会教育課長	三友 孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲
主査	小島 洋一
主査	星 祥子
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主任	新井 端
主事	山川愛希子
主事	山川 守男
主事	大野美知子
発掘調査員	磯崎 一



第15図 石原古墳群第4号墳調査地点位置図



第16図 石原古墳群第4号墳調査区全測図

2 遺跡の概要

(1) 石原古墳群について

石原古墳群は、熊谷市中央部やや西寄り荒川左岸、標高約33.5～35.5mの新期荒川扇状地に立地する古墳群である。その分布域は面積560,000㎡を超え、東西に長く約1,450m、南北は約680mを測る規模で、北東に比高差約0.5mの低地を臨むやや高い地形に広がる。現在把握できている古墳の基数は、消滅した3基を含む16基で、墳丘がほぼ完存のものが4基、半壊のものが1基、削平されたものが8基である。確認されている古墳の中には、開発に伴う事前の試掘調査により古墳周溝や石室が発見されたことからその存在が確認されたものもあり、今後このように地中に残されている古墳が発見される可能性がある。なお、消滅した古墳の中には開発に伴う記録保存の発掘調査を行った後消滅したものが含まれる。

古墳群は、大きく2群に分かれて分布し、その主な分布域の地名を用い、北を坪井支群、南を石原支群と呼称している。石原支群には9基の古墳の存在が知られ、本報告の第4号墳の北東に接して所在する、本支群の盟主墳と考えられる全長34mの前方後円墳のほか、第4号墳を含む円墳8基で構成される。本支群では、これまでに5基に及ぶ古墳が発掘調査され、いずれの古墳からも埴輪が出土している。また、石室が検出された古墳はいずれも川原石積みのいわゆる胴張型横穴式石室であることから、6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造されたものと推定される。

一方、坪井支群については、残る7基が属し、いずれも円墳である。本支群において調査された古墳である薬師堂古墳は、墳丘に埴輪が樹立され、川原石積みの胴張型横穴式石室からは直刀、刀子、鉄鏃、銅釧、耳環、切子玉が出土している。銅釧を出土する後期古墳は数少なく、この薬師堂古墳が坪井支群の盟主墳に位置付けられ、石室の構造と併せて7世紀初頭前後に築造されたと推測される。

以上のことから、石原古墳群は、6世紀後半から7世紀初頭までの約50年間に亘って造営され、南の石原支群にその造営が始まり次第に北の坪井支群までその造営が展開していったものと現段階では推測される。

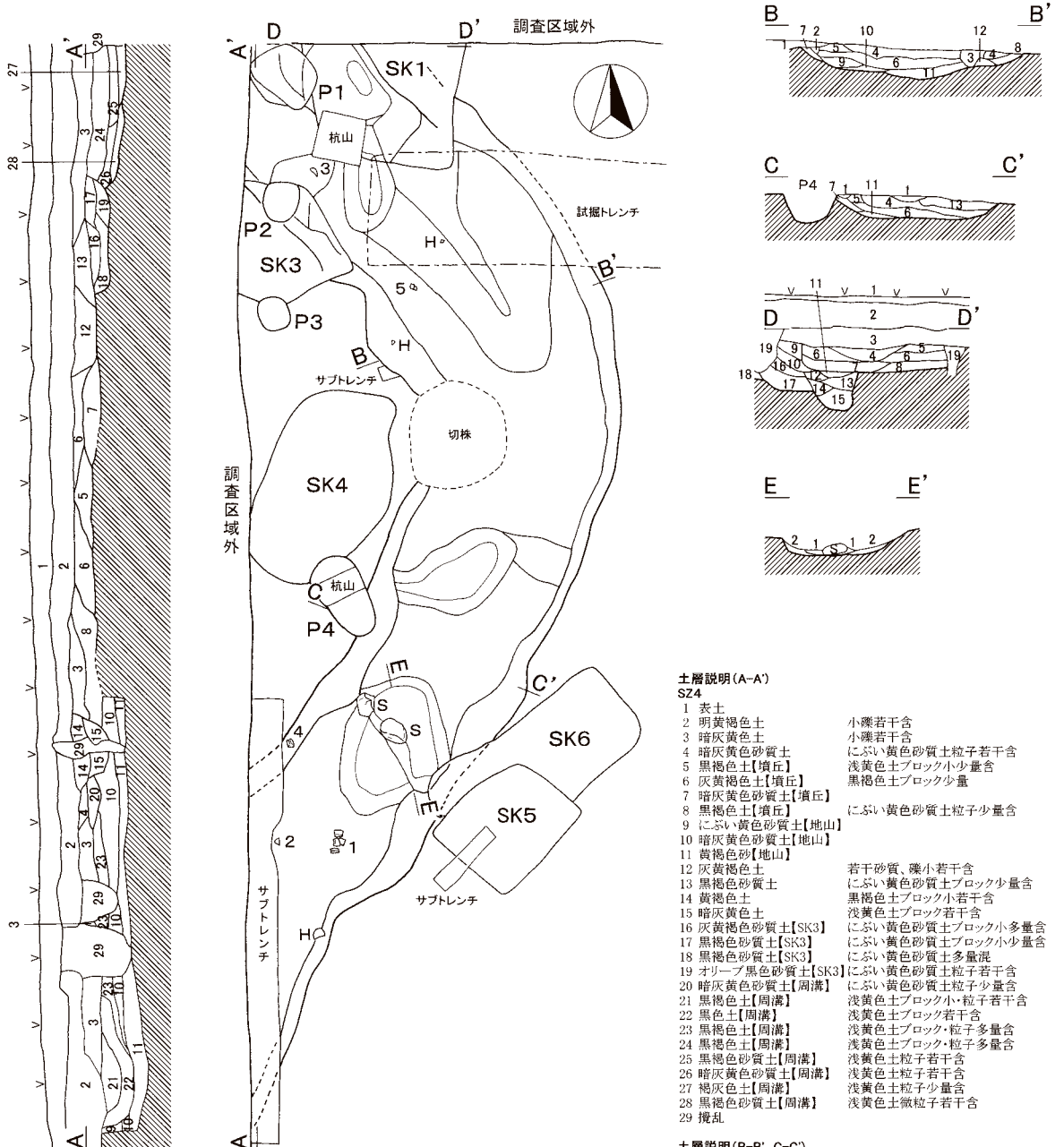
(2) 調査の方法

調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体が網羅できるよう、北東隅をA-1として西へA・B・C、南へ1・2・3とし、Aラインは北から南へA-1・A-2・A-3と呼称した。また、Bライン以西もAラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

本調査地点は、石原古墳群の遺跡範囲の東端の場所で、一段低い北側の低地を臨む北端に位置する。周囲には、当該第4号墳のほか、北側に前方後円墳の第5号墳が隣接し、両古墳とも遺存状態はほぼ良好であるが、近年開発の話がちらほら聞かれ、その保存について危惧すべき事案である。



- 34.40 A**
- 土層説明(D-D')**
- 1 表土
 - 2 明黄褐色土
 - 3 暗灰黄色土
- SK1**
- 4 にぶい黄色砂質土
 - 5 褐灰色砂質土
 - 6 褐灰色砂質土
 - 7 黒褐色土
 - 8 黒褐色砂質土
- SZ4(周溝)**
- 9 暗灰黄色土
 - 10 褐灰色土
 - 11 黄灰色土
 - 12 灰色土
 - 13 黒褐色土
 - 14 黒褐色土
 - 15 黒褐色土
 - 16 黒褐色土
 - 17 黒褐色土
 - 18 褐灰色土
 - 19 攪乱
- 土層説明(E-E')**
- SZ4(周溝)**
- 1 黒褐色砂質土
 - 2 黒褐色砂質土

- 小礫若干含
- 小礫若干含
- 黒褐色土ブロック小若干、にぶい黄色砂質土粒子若干含
- 黒褐色土ブロック少量、にぶい黄色砂質土ブロック小若干含
- にぶい黄色砂質土ブロック・粒子多量含
- にぶい黄色砂質土ブロック・粒子少量含
- にぶい黄色砂質土粒子若干含
- 黒褐色土ブロック多量、にぶい黄色砂質土ブロック若干含
- にぶい黄色砂質土ブロック多量含
- 浅黄色土粒子若干含
- にぶい黄色砂質土ブロック少量含
- にぶい黄色砂質土ブロック多量含
- にぶい黄色砂質土ブロックわずか含
- 黒褐色土ブロック多量、にぶい黄色砂質土ブロック少量含
- 浅黄色土粒子少量含
- にぶい黄色砂質土ブロック小若干、礫大含
- 火山灰粒若干、坩土粒・炭化物粒わずか、小石わずか含

- 土層説明(A-A')**
- SZ4**
- 1 表土
 - 2 明黄褐色土
 - 3 暗灰黄色土
 - 4 暗灰黄色砂質土
 - 5 黒褐色土【墳丘】
 - 6 灰黄褐色土【墳丘】
 - 7 暗灰黄色砂質土【墳丘】
 - 8 黒褐色土【墳丘】
 - 9 にぶい黄色砂質土【地山】
 - 10 暗灰黄色砂質土【地山】
 - 11 黄褐色砂【地山】
 - 12 灰黄褐色土
 - 13 黒褐色砂質土
 - 14 黄褐色土
 - 15 暗灰黄色土
 - 16 灰黄褐色砂質土【SK3】
 - 17 黒褐色砂質土【SK3】
 - 18 黒褐色砂質土【SK3】
 - 19 オリブ黒色砂質土【SK3】
 - 20 暗灰黄色砂質土【周溝】
 - 21 黒褐色土【周溝】
 - 22 黒色土【周溝】
 - 23 黒褐色土【周溝】
 - 24 黒褐色土【周溝】
 - 25 黒褐色砂質土【周溝】
 - 26 暗灰黄色砂質土【周溝】
 - 27 褐灰色土【周溝】
 - 28 黒褐色砂質土【周溝】
 - 29 攪乱
- 小礫若干含
 - 小礫若干含
 - にぶい黄色砂質土粒子若干含
 - 浅黄色土ブロック少量含
 - 黒褐色土ブロック少量
 - にぶい黄色砂質土粒子少量含
 - にぶい黄色砂質土粒子少量含
 - にぶい黄色砂質土【地山】
 - 若干砂質、礫小若干含
 - にぶい黄色砂質土ブロック少量含
 - 黒褐色土ブロック小若干含
 - 浅黄色土ブロック若干含
 - にぶい黄色砂質土ブロック小多量含
 - にぶい黄色砂質土ブロック少量含
 - にぶい黄色砂質土多量混
 - にぶい黄色砂質土粒子若干含
 - にぶい黄色砂質土粒子少量含
 - 浅黄色土ブロック小・粒子若干含
 - 浅黄色土ブロック若干含
 - 浅黄色土ブロック・粒子多量含
 - 浅黄色土ブロック・粒子多量含
 - 浅黄色土粒子若干含
 - 浅黄色土粒子わずか含
 - 浅黄色土粒子少量含
 - 浅黄色土微粒子若干含
- 土層説明(B-B', C-C')**
- SZ4(周溝)**
- 1 にぶい黄色砂質土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土ブロック少量・浅黄色ブロック多量混合層
 - 4 黒褐色土
 - 5 黒褐色土
 - 6 黒色土
 - 7 灰黄褐色土
 - 8 黒褐色土
 - 9 黒褐色土
 - 10 黒褐色土
 - 11 灰褐色土
 - 12 浅黄色土ブロック
 - 13 灰黄色砂質土
- にぶい黄色砂質土ブロック多量含
 - にぶい黄色砂質土ブロック少量・浅黄色ブロック多量混合層
 - 浅黄色土ブロック・粒子多量含
 - 浅黄色土ブロックわずか含
 - 浅黄色土ブロック・粒子少量、埴輪片含若干砂質
 - 浅黄色土粒子若干含
 - 浅黄色土粒子わずか含
 - 浅黄色土粒子若干含
 - にぶい黄色砂質土ブロック・粒子少量含

第17図 石原古墳群第4号墳

検出された遺構・遺物は、遺構については、古墳時代後期の古墳周溝（第4号墳東側周溝）1条のほか、この遺構より新しい時期と考えられる時期不明の土坑6基、ピット5基であった。遺物については、円筒埴輪を主体にして形象埴輪が周溝、土坑及びピットから出土し、遺構外の遺物には、土師器片のほか近世の銭貨等も見られた。なお、円筒埴輪は、その特徴から本調査全体で6種類に分類されたと考えられた。出土遺物の総量は、コンテナにして1/2箱であった。

3 遺構と遺物

(1) 古墳（周溝跡）

第4号墳（第17・18図、第4表）

調査区の北西部に位置する。B・C-1・2グリッドにある。第1・3・4・6号土坑、第1～4号ピットと重複関係にあり、重複関係にあるいずれの遺構にも本遺構が切られている。なお、古墳墳丘と位置的に重複関係にあるのが第3・4号土坑及び第2・3・4号ピットであり、周溝と重複関係にあるのが第1・3・6号土坑及び第1・2・4号ピットであり、いずれも第4号墳築造後の時期の所産と考えられる。

本墳は、規模が墳丘径約20m、周溝径約23.0～23.8mの円墳と推定される。

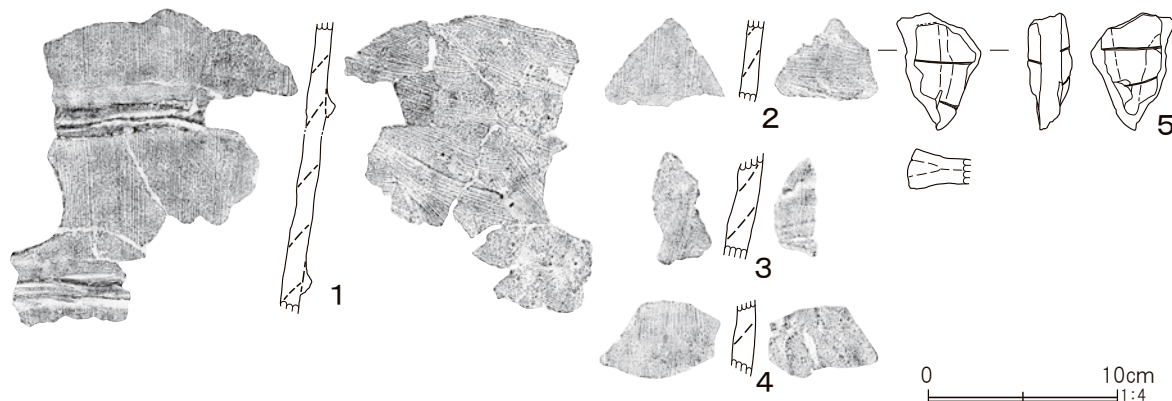
確認部分における墳丘の平面形態は、やや南北に長い楕円形であるが、比較的整った円形に近いものと推定される。一方、周溝の平面形は、南側がやや直線的であり、墳丘平面形よりさらに南北に長い楕円形を呈する。

周溝は、確認面で幅1.53～1.91mであり、深さは確認面で20～26cmと浅いが、断面観察部で30cmを測る箇所もある。周溝の底面は一樣ではなく、検出部における状況ではあるが、北及び南に1か所ずつ不整形な楕円形の土坑状の深い箇所があり、北の箇所が最深で70cm、南の箇所が最深で36cmを測る。これ以外の箇所はほぼ平坦であり、船底状の断面形をもつ周溝である。

周溝の埋土は、断面観察から墳丘側から徐々に埋まっていったと推定された。

遺物は、埋土中から埴輪が出土し、ややまとまって出土した箇所もあった。埴輪は、円筒埴輪が主体で、翳形形象埴輪片が1点見られた。

時期は古墳時代後期であるが、関東地方における埴輪の消長から概ね6世紀後半～7世紀初頭と考えられる。



第18図 石原古墳群第4号墳周溝出土遺物

第4表 石原古墳群第4号墳周溝出土遺物観察表（第18図）

図版番号	器種	厚さ	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	0.80~1.05	ABGHKN	A	赤褐色	第1段第1突帯 ~口縁部破片	突帯：低台形（一部三角形）。 外面：縦刷毛目17本/2cm。 内面：横・右傾斜刷毛目17本/2cm。一部指ナデ。 スカシ孔部有り。
2	円筒埴輪	0.80~0.90	BEGKN	A	赤褐色	口縁部(直下) 破片	外面：縦刷毛目20本/2cm。 内面：横・右傾斜刷毛目20本/2cm。 No1と同一窯跡か。
3	円筒埴輪	1.20~1.30	BCK	B	赤褐色	胴下半破片 (第1段片か)	外面：縦・左傾斜刷毛目9本/1cm。 内面：指ナデ（横位）。
4	円筒埴輪	0.95~1.15	ABDEJ	B	橙色	胴下半破片 (第1段片か)	外面：縦刷毛目20本/2cm。 内面：指ナデ（右傾斜）。
5	形象埴輪 翳形	1.25~2.10	ACGIN	A	赤褐色	鱗部破片	基部から伸びていると思われる放射状の線刻。 一方面には刷毛目（8本/1cm）わずかに残存。 芯の粘土板（塊）に板状の粘土を貼り付け鱗部成形。

(2) 土坑

土坑は、総数にして6基検出されたが、その位置は、概ね第4号墳が所在する箇所であった。また、うち3基は第4号墳周溝と重複関係にあり、残る3基のうち2基は第4号墳周溝外に、うち1基は第4号墳の墳丘箇所の位置に形成されていた。また、土坑同士が切り合っているものも見られた。

第1号土坑（第19図）

調査区の北西部北端に位置する。B・C-1グリッド内にある。第4号墳周溝及び第1号ピットと重複関係にあり、第4号墳周溝を切り、第1号ピットに切られている。

規模は、北部が調査区域外となっており詳細不明であるが、残存長軸1.12mと推定され、検出短軸は最大で1.47mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所で長方形を呈する。深さは、土層断面観察から、最深で23cmを測る。主軸方位は、ほぼ真北を示す。

埋土は、レンズ状及び水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

断面形は箱形で、床面は平坦である。

出土遺物は、円筒埴輪及び形象埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。形象埴輪は、盾形または翳形の一部であると考えられる。また、出土遺物は重複する第4号墳（周溝）に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

時期は、第4号墳の周溝を切っていることから、古墳時代後期以降であるが詳細は不明である。

第2号土坑（第19図）

調査区の北西部北端やや中央寄りに位置する。B-1グリッド内にある。検出された箇所では重複関係にある遺構はないが、第1号土坑と近接することから調査区域外において重複関係にある可能性がある。

規模は、北部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸が最大で1.14m、検出短軸が最大0.76mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈すると考えられる。深さは、土層断面観察から、最深で33cmを測る。主軸方位は、N-54°-Wを示す。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

断面形は船底状で、床面は平坦である。

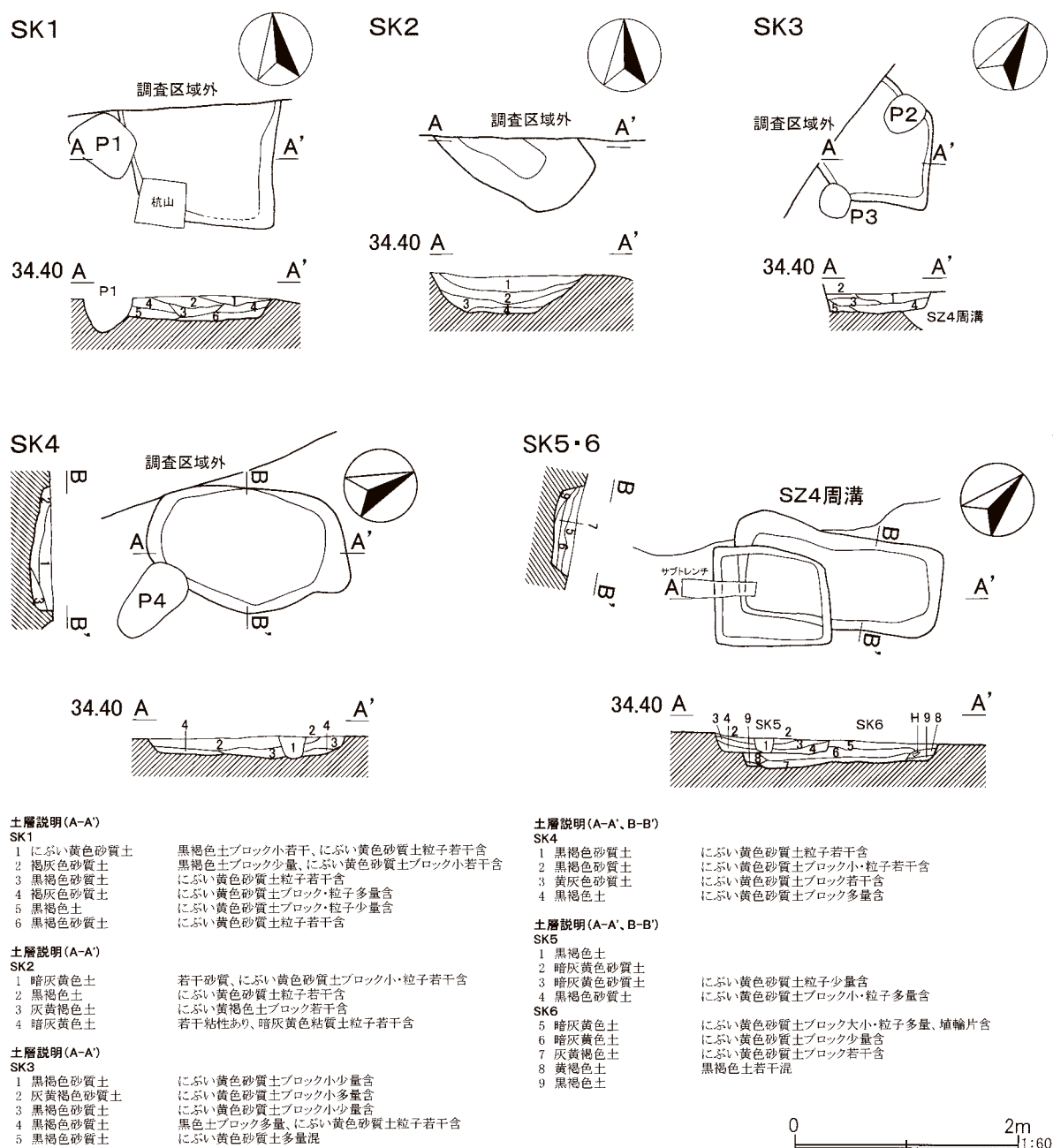
出土遺物は、円筒埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。また、出土遺物は近接して所在する第4号墳（周溝）に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

時期は、不明である。

第3号土坑（第19図）

調査区の北西部西端北寄りに位置する。B・C-1グリッド内にあり、概ねC-1グリッド内にある。第4号墳周溝、第2号ピット及び第3号ピットと重複関係にあり、第4号墳周溝を切り、第2号ピット及び第3号ピットに切られている。

規模は、西部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸が最大で1.13m、検出短軸が最



第19図 石原古墳群第4号墳第1～6号土坑

大で1.00mを測る。平面プランは、多角形（六角形か）を呈すると考えられる。深さは、土層断面観察から、最深で22cmを測る。主軸方位は、N-29°-Wを示すか。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

断面形は隅丸の箱形で、床面は平坦である。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、第4号墳の周溝を切っていることから、古墳時代後期以降であるが詳細は不明である。

第4号土坑（第19図）

調査区の北西部やや中央寄りに位置する。B・C-1グリッド内にある。第4号墳及び第4号ピットと重複関係にあり、第4号ピットに切られている。また、位置的には第4号墳の墳丘下にあるが、第4号墳との新旧関係は不明である。

規模は、長軸1.85m、短軸が最大1.11mを測る。平面プランは、不整形な楕円形を呈する。深さは、検出面から、最深で20cmを測る。主軸方位は、N-33°-Eを示す。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。また、土層断面観察から、一部ピット状に掘り込まれている箇所が確認された。

断面形は隅丸の箱形で、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は、円筒埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。また、出土遺物は重複する第4号墳（周溝）に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

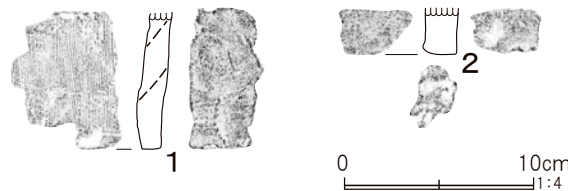
時期は、不明である。

第5号土坑（第19図）

調査区の中央部やや西寄りに位置する。B-2グリッド内にある。第6号土坑と重複関係にあり、第6号土坑を切っている。

規模は、長軸が最大で1.01m、短軸が最大で0.89mを測る。平面プランは、やや南北軸が長い長方形を呈する。深さは、土層断面観察から、最深で14cmを測る。主軸方位は、N-43°-Eを示す。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。また、土層断面観察から、一部ピット状に掘り込まれている箇所が確認された。



第20図 石原古墳群第4号墳第6号土坑出土遺物

第5表 石原古墳群第4号墳第6号土坑出土遺物観察表（第20図）

図版番号	器種	厚さ	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	1.05~1.40	ABGJN	B	明赤褐色	第1段基部破片	外面：縦刷毛目17本/2cm。 内面：指ナデ、基部付近のみ横位のヘラケズリ・ヘラナデ。
2	円筒埴輪	1.20	ABDEK	B	橙色	第1段基部破片	外面：縦刷毛目か（磨滅が激しく不明）。 内面：指ナデ。

断面形は隅丸の箱形で、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は、円筒埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。また、出土遺物は近接して所在する第4号墳（周溝）に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

時期は、古墳時代後期以降と考えられる第6号土坑よりも新しいが、詳細不明である。

第6号土坑（第19・20図、第5表）

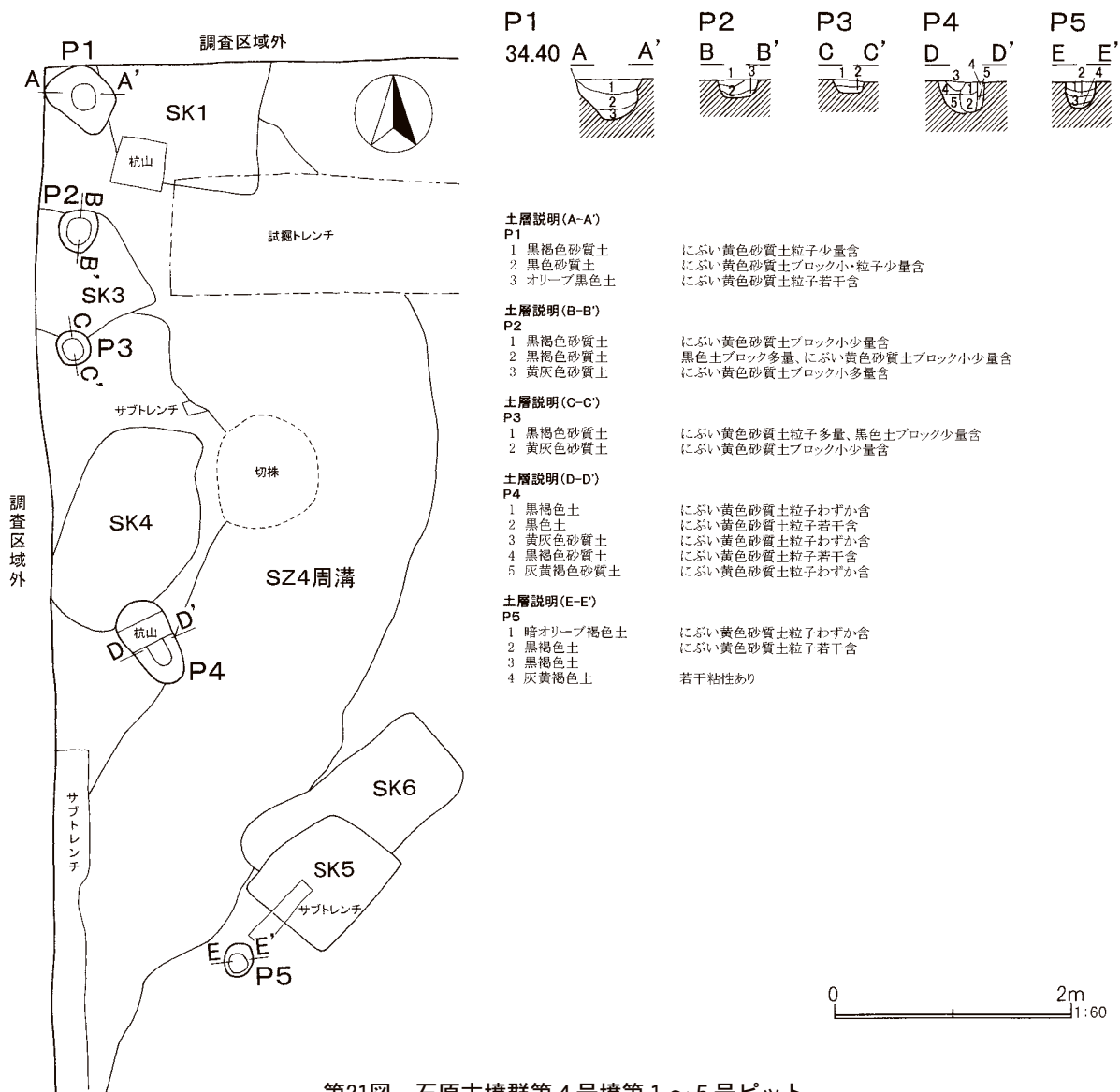
調査区の中央部やや西寄りに位置する。B-2グリッド内にある。第4号墳周溝及び第5号土坑と重複関係にあり、第4号墳周溝を切り、第5号土坑に切られている。

規模は、南東が第5号土坑に切られているが、長軸が最大で1.87m、短軸が最大で0.94mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈する。深さは、検出面から、最深で27cmを測る。主軸方位は、N-51°-Eを示す。

埋土は、レンズ状及び水平に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

断面形はやや船底状の箱形で、床面はほぼ平坦である。

出土遺物は、円筒埴輪片が検出できた。また、重複する第4号墳（周溝）に所属する遺物と考えられ



第21図 石原古墳群第4号墳第1～5号ピット

ることから、混入したものと考えられる。

時期は、第4号墳の周溝を切っていることから、古墳時代後期以降であるが詳細は不明である。

(3) ピット

ピットは、総数にして5基検出されたが、その位置は、概ね第4号墳が所在する箇所であり、5基ともやや弓なりではあるがほぼ南北に直線上に並ぶ。

第1号ピット (21図)

調査区の北西部北西端に位置する。C-1グリッド内にある。第4号墳周溝及び第1号土坑と重複関係にあり、両遺構を切っている。

規模は、長軸が最大で0.60m、短軸は0.43mを測る。平面プランは、隅丸台形を呈する。深さは、検出面から35cmを測る。

出土遺物は、円筒埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。また、出土遺物は重複する第4号墳(周溝)に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

時期は、第4号墳の周溝を切っていることから、古墳時代後期以降であるが詳細は不明である。

第2号ピット (第21図)

調査区の北西部北西端付近に位置し、第1号ピットとの距離は心線で1.1mを測る。C-1グリッド内にある。第4号墳周溝及び第3号土坑と重複関係にあり、両遺構を切っている。

規模は、長軸0.36m、短軸0.32mを測る。平面プランは、楕円形を呈する。深さは、検出面から16cmを測る。

出土遺物は、円筒埴輪片が検出できたが、図示できるものはなかった。また、出土遺物は重複する第4号墳(周溝)に所属する遺物と考えられることから、混入したものと考えられる。

時期は、第4号墳の周溝を切っていることから、古墳時代後期以降であるが詳細は不明である。

第3号ピット (第21図)

調査区の北西部に位置し、第2号ピットとの距離は心々で1.0mを測る。C-1グリッド内にある。第3号土坑と重複関係にあり、同遺構を切っている。また、位置的には第4号墳の墳丘箇所にある。

規模は、直径0.28mを測る。平面プランは、やや隅丸方形の円形を呈する。深さは、検出面から11cmを測る。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第4号ピット (第21図)

調査区の西端付近のやや中央寄りに位置し、第3号ピットとの距離は心々で2.5mを測る。B・C-1・2グリッドに跨る位置にある。第4号墳周溝及び第4号土坑と重複関係にあり、両遺構を切っている。また、位置的にはほぼ第4号墳の墳丘箇所にある。

規模は、長軸0.76m、短軸は最大で0.42mを測る。平面プランは、楕円形を呈する。深さは、検出面から27cmを測る。なお、土層断面観察から、柱痕と考えられる上層から底面に至る土層が確認され、柱痕とすれば径14cm程度の小規模な柱材になるであろうか。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第5号ピット（第21図）

調査区の中央部西寄りに位置し、第4号ピットとの距離は心で2.8mを測る。B-2グリッド内にある。重複関係にある遺構はなく、単独で所在する。

規模は、長軸0.28m、短軸0.24mを測る。平面プランは、円形に近い楕円形を呈する。深さは、検出面から22cmを測る。

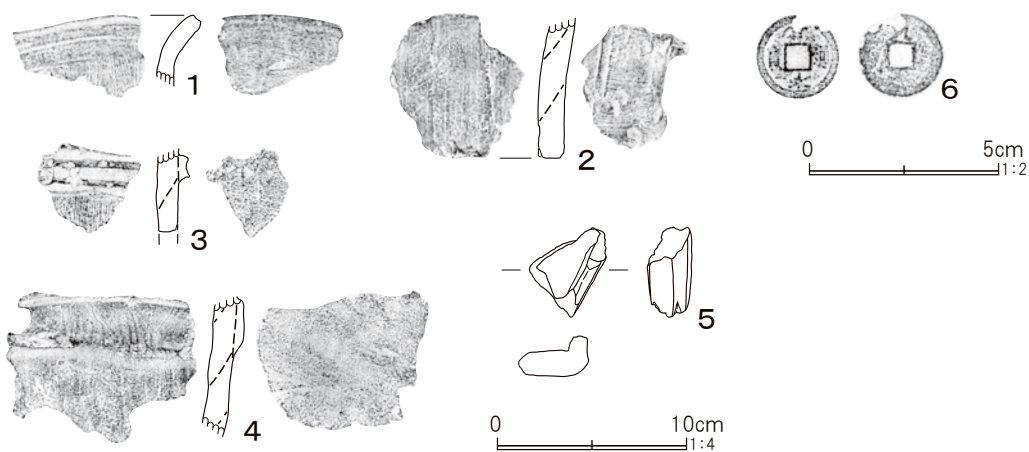
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

(4) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物を掲載する（第22図、第6表）。

古墳時代後期の円筒埴輪及び形象埴輪、江戸時代の銭貨等が出土した。



第22図 石原古墳群第4号墳遺構外出土遺物

第6表 石原古墳群第4号墳遺構外出土遺物観察表（第22図）

図版番号	器種	厚さ	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	円筒埴輪	0.80~0.95	CDGJ	B	外面：明黄褐色 内面：橙色	口縁部破片	口唇部：浅いM字状。 外面：縦刷毛目18本/2cm。 内面：横・右傾斜刷毛目18本/2cm。 口縁部にヨコナデを加える。
2	円筒埴輪	1.35~1.40	AEGJL	B	明黄褐色、 赤褐色	第1段（底部 付近）破片	外面：縦刷毛目24本/2cm。 内面：横刷毛目（一部左傾斜刷毛目22本/2cm）。
3	円筒埴輪	1.00~1.15	AEGJN	B	橙色	第2段（第2突 帯）破片	突帯：M字状台形（幅狭）。 外面：縦刷毛目14本/2cm。 内面：横・右傾斜刷毛目12本/1cm + 指ナデ。 スカシ孔部有り。
4	円筒埴輪	1.00~1.25	ABCIN	B	赤褐色	胴部（第2段か） 破片	突帯：低い大台形（幅広）。 外面：縦刷毛目17本/2cm。 内面：右傾斜指ナデ。
5	形象埴輪 家形	残存高4.7 厚さ0.9~1.3	ACGM	B	明赤褐色	破風部（下部） 破片か	表面ナデ調整。
6	銭貨	直径1.05 孔0.60×0.60 重量1.5				一部欠損	寛永通寶。裏面に「足カ」の一部残存、寛保期足尾銭か。寛保元年（1741）铸造。

4 調査のまとめ

石原古墳群は、本章第2節第1項で記述したとおり、現在16基の古墳の存在が確認されており、その内訳は前方後円墳が1基、円墳が15基である。ここでは、過去の本古墳群における本調査履歴を追ってみる。本調査が実施された古墳は、古くは1972年（昭和47年）、北に分布する坪井支群中の薬師堂古墳がある（本章第2節第1項参照）。それ以降については、平成に入ってからである（第15図）。先ず、1990年（平成2年）に調査された天神前遺跡内の石原支群の石原古墳群第6号墳（以下、「石原古墳群」は省略する。）である。調査では、横穴式石室の玄室の一部及び南東の周溝の一部が検出され、墳丘直径約20mの円墳と推定された。また、出土遺物は、石室から耳環、鉄鏃、刀子が、周溝からは円筒埴輪片のほか靴形・大刀形・家形・馬形・馬形または盾形・人物の形象埴輪片が出土した。本報告の第4号墳とは、距離にして200m北西に位置する。次は、1997年（平成9年）の同じく石原支群の第7号墳である。本墳は、中世の館跡である兵部裏屋敷跡内に所在し、事前の試掘調査によりその存在が知られることとなった。本調査では分譲住宅の浄化槽埋設箇所において確認されたこともあり、周溝の一部が検出されるにとどまったため詳細は不明であり、墳形は円墳と推定される。出土遺物は、円筒埴輪片が僅かに出土した。本報告の第4号墳とは、距離にして僅か50m北西に位置する。2001年（平成13年）には、第7号墳に程近い石原支群の第8号墳が調査され、西側の周溝の一部が検出された。墳丘は既に削平を受けており、大部分が住宅下に所在する状況であるが、古墳全体で直径約24mの規模と推定されている。出土遺物は、朝顔形を含む円筒埴輪片のほか家形・馬形・人物の形象埴輪片が出土した。本報告の第4号墳とは、距離にして僅か40m北に位置する。2007年（平成19年）には、石原支群の第2号墳が調査された。本墳は調査まで、削平の状態ではあったが墳丘を残していた。調査により、破壊を受けていたものの胴張型横穴式石室の玄室・羨道部・前庭部が検出され、石室そのものの規模は全長約6.2mであった。また、周溝の一部が北西で検出され、墳丘の直径が約12.5mの円墳と推定された。なお、周溝幅は約4mであることから、古墳全体の規模は直径約20mと推定される。出土遺物は、主に石室玄室から耳環、大刀、刀子、鉄鏃、火打鉄が、墳丘において円筒埴輪及び形象埴輪片が出土した。本報告の第4号墳とは、距離にして260m西に位置する。そして、2014年（平成26年）の本報告の石原支群第4号墳の調査であり、これ以降は、2021年（令和3年）3月現在、本調査が実施された古墳はない。

今回報告する第4号墳は、その存在が古くから知られていた。また、北東には隣接して石原古墳群（石原支群）の盟主墳と考えられる全長34mの前方後円墳である第5号墳が所在し、いずれも雑木林の中に墳丘を今に伝え、遺存状態は良好でほぼ完存と推定されている。さらに、第4号墳及び第5号墳は、石原支群でも古墳が集中して分布するエリア内にあり、近年は周辺に住宅地が迫り古墳が消滅する中、この住宅地に囲まれる形で奇跡的に墳丘が手つかずの状態に残されている。

調査では、その検出された位置関係から西に隣接する第4号墳の周溝と判断され、これまで墳丘直径が17～18mとされていたが、東側の状況だけではあるが、墳丘直径約20m、周溝を含めた古墳全体の規模が直径約23.0～23.8mの円墳と推定されるに至った。これは、今回の調査により墳丘規模がやや大きいものと判断され、また周溝まで含めた規模を推定することができたという成果である。因みに、墳丘高は、現存（現地表面上）で1.4mを測り、調査における土層断面観察から周溝の上面と現地表面との比高差が約0.5mであることから、少なくとも墳丘は1.9m以上あったと、併せて考えられることとなった。

最後に出土遺物を見てみると、今回の調査では、古墳周溝の遺物として、これまでの調査では出土例がなかった翳形の形象埴輪が出土した。器財の形象埴輪は、最も中心的な役割を担う家形埴輪の周囲に配されることが多いが、これまで石原古墳群では、靱形、大刀形、そして盾形とも考えられるものが見られるだけであった。翳形は、蓋形と共に、貴人に差しかけ顔を隠したとされるものである。本墳において、この翳形が出土したことは何を意味するのであろうか。本墳の被葬者が形成された古墳群の中でも上位に位置するものであったのであろうか。本墳の墳丘規模が、古墳群中の他の古墳と比較しても規模の大きい部類に属することもこれを補完する材料となろうか。加えて、隣接する盟主墳と推定される前方後円墳・第5号墳の位置付けや、これとの関係も併せて考えていく必要があるであろう。

近年は、この唯一良好な状態で残された古墳2基が所在する箇所が危機に面している。それは度々の開発の話である。今後も注視して、残された古墳を後世に伝えていかなければならないと考える。

主な引用・参考文献

- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』
- 熊谷市教育委員会 1992 『天神前遺跡』
- 熊谷市教育委員会 1998 『石原古墳群7号墳・兵部裏屋敷跡』
- 熊谷市石原古墳群調査会 2002 『石原古墳群8号墳』
- 熊谷市石原古墳群調査会 2008 『石原古墳群第2号墳』

諏訪木遺跡



Ⅳ 諏訪木遺跡の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

諏訪木遺跡の調査は、建築主（久保直也氏）との調整を経て、地盤改良（柱状改良）工事を伴う個人専用住宅の建築により埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたため、国庫・県費補助事業として実施したものである。経過については、次のとおりである。

平成26年4月30日付けで、埼玉県教育委員会あてに、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出される。これを受けて、熊谷市教育委員会は、届出のあった熊谷市上之字陣鋤2768番3の一部地内は、埋蔵文化財包蔵地（埼玉県遺跡番号59-016 諏訪木遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成26年5月19日に試掘調査を実施した。この調査により、現地表面下67～76cmで弥生時代、古墳時代及び平安時代の遺構・遺物が確認された。

個人専用住宅建築は、前述のとおり柱状改良工事を伴うもので、その施工は建物の範囲全面に及ぶものであったため、発掘調査の措置が適当である旨副申を付して、平成26年6月30日付け熊教社埋発第131号で埼玉県教育委員会あてに送付した。その後、建築主あてに平成26年7月7日付け教生文第4-453号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。なお、住宅建築に伴う浄化槽埋設箇所については、その規模が狭小につき工事立会の措置とした。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成26年7月7日付け熊教社埋発第149号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成26年7月3日から同年8月23日にかけて行われた。調査面積は、家屋建築予定箇所全面の78.66㎡である。

まず、重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。検出された遺構は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、ピット、井戸跡、溝跡等で、順次掘り下げを行った。そして、掘り下げ作業と並行して、土層断面図の作成、遺物出土状況の分布図を作成し、適宜写真撮影を行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、最後に調査区全景について写真撮影を行った。

整理・報告書作成作業は、令和2年4月から令和3年3月にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。なお、遺構の整理に当たって、第7表のとおり遺構の見直しを図り、遺構名称及び遺構番号の振替を行った。

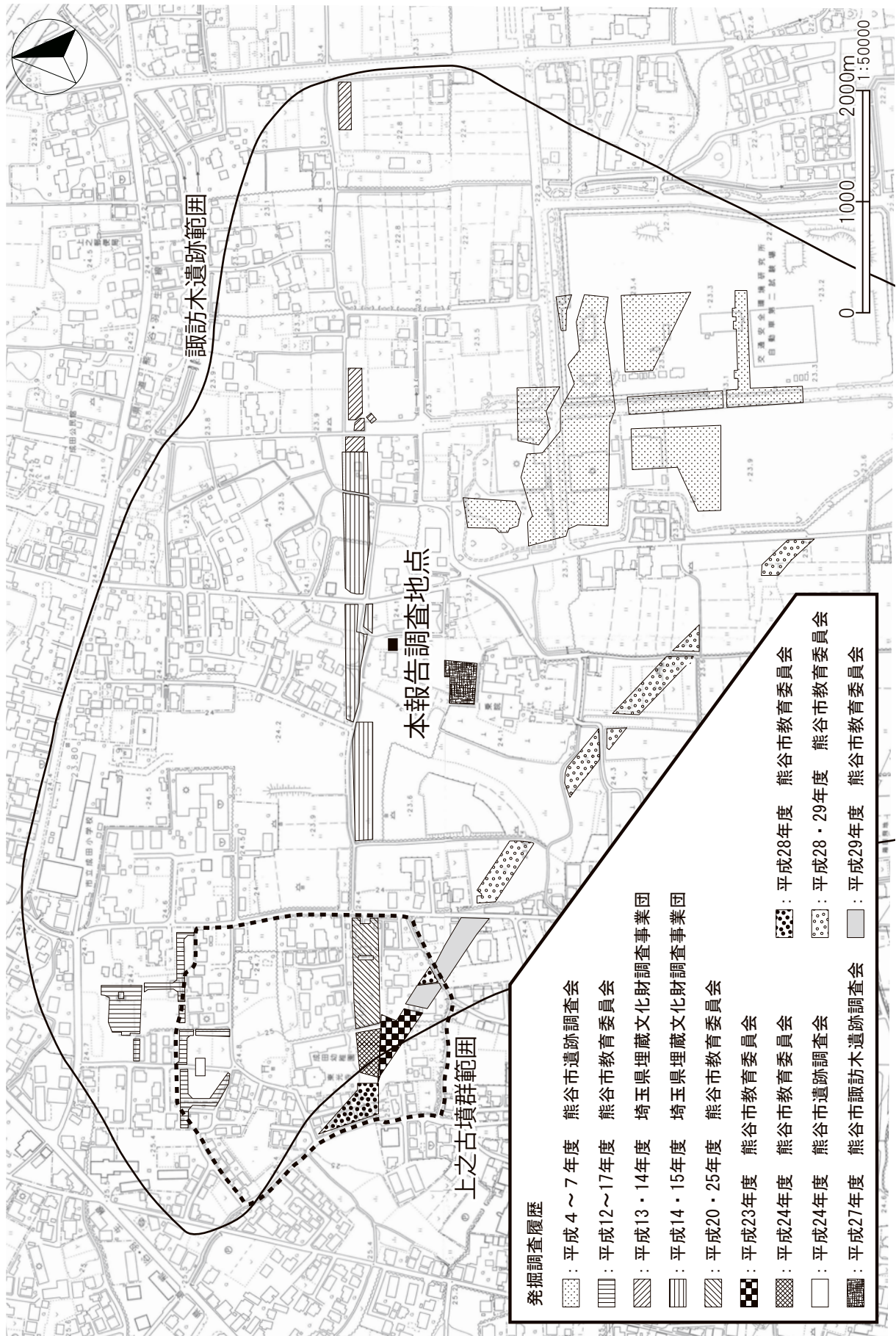
次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書作成の組織

発掘調査は平成26年度に、整理・報告書作成は令和2年度に、いずれも熊谷市教育委員会が主体者となって実施した。なお、組織については、第Ⅲ章の石原古墳群第4号墳と同一であるため記述を省略することとし、第Ⅲ章の記述を参照されたい。

第7表 諏訪木遺跡遺構番号新旧対照表（左：新番号、右：旧番号）

縦穴建物跡 (SI)		土 坑 (SK)		4	P5	21	P26
1	SX1	1	SK1	5	P6	22	P27
2	SX3	2	SK4	6	P7	23	P28
3	SI3	3	SK6	7	P8	24	P29
4	SI4	4	SK9	8	P9	25	P30
掘立柱建物跡 (SB)		5	SK10	9	P10	26	SK5
		6	SK11	10	P11	27	P31
1	SK2・3 P16・21	7	SK12	11	P12	28	P18
2	SK3 P2・16・22	8	SK14	12	P13	溝 跡 (SD)	
		9	SX2	13	P14	1	SD1
		10	P1	14	P15	井 戸 跡 (SE)	
		ピ ッ ト (P)		15	P17	1	SE1
		1	P32	16	P19	火 葬 跡 (SX)	
		2	P3	17	P20	1	第1号火葬跡
		3	P4	18	P23		
				19	P24		
				20	P25		



第23図 諏訪木遺跡調査地点位置図

2 遺跡の概要

(1) 諏訪木遺跡について

諏訪木遺跡は、熊谷市東部やや西寄り荒川左岸、標高約22～26mの妻沼低地の微高地に立地する遺跡である。その範囲は面積約780,000㎡と広大であり、東西に長く約1,050m、南北は約850mを測る規模である。

本遺跡は、西に弥生時代中期後半～後期初頭の関東屈指の大規模集落跡である前中西遺跡、東に弥生時代中期中葉の大溝を伴う集落跡や平安時代の掘立柱建物跡を中心とする古代の官衙的要素をもつ集落跡の池上遺跡、池上遺跡に隣接して弥生時代中期前半の方形周溝墓が検出されている行田市小敷田遺跡、北に弥生時代前期末～後期の生産域を伴う集落跡や7世紀後半から11世紀まで続いた地域有力者層の居宅と考えられる大規模集落跡の北島遺跡が所在する歴史的環境にある。特に弥生時代中期～後期の時期には、集落が集中して形成された地区である。

本遺跡の存在を知る端緒は、平成5年から7年にかけて実施されたミニ工業団地造成事業に伴う発掘調査であり、その箇所は現遺跡範囲の東部中央に位置する。その後、現在も進捗中の上之土地区画整理事業に伴う試掘・発掘調査、県道熊谷羽生線建設工事、市道137号線道路改良工事、民間の共同住宅建設工事等様々な原因で実施された発掘調査を重ね、遺跡が東西南北に広く分布することが判明し、現在の規模の遺跡範囲となった。上之土地区画整理事業に伴う発掘調査は毎年のように実施され、本遺跡範囲内においては数多くの調査が実施され、令和元年度までに27次に及ぶ。なお、本遺跡の北西端の一部は古墳時代後期の群集墳である上之古墳群の遺跡範囲が重複しており、当該古墳群では墳丘が現存する古墳を含めて3基確認されている（第23図）。

これらの調査により、遺跡全体では縄文時代後期から江戸時代までに及ぶ複合遺跡であると判明している。

(2) 調査の方法

調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、建築物予定地全体を網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。グリッド設定に当たっては、調査区全体が網羅できるよう、北東隅をA-1として西へA・B・C、南へ1・2とし、Aラインは北から南へA-1・A-2と呼称した。また、Bライン以西もAラインと同様に呼称した。

実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

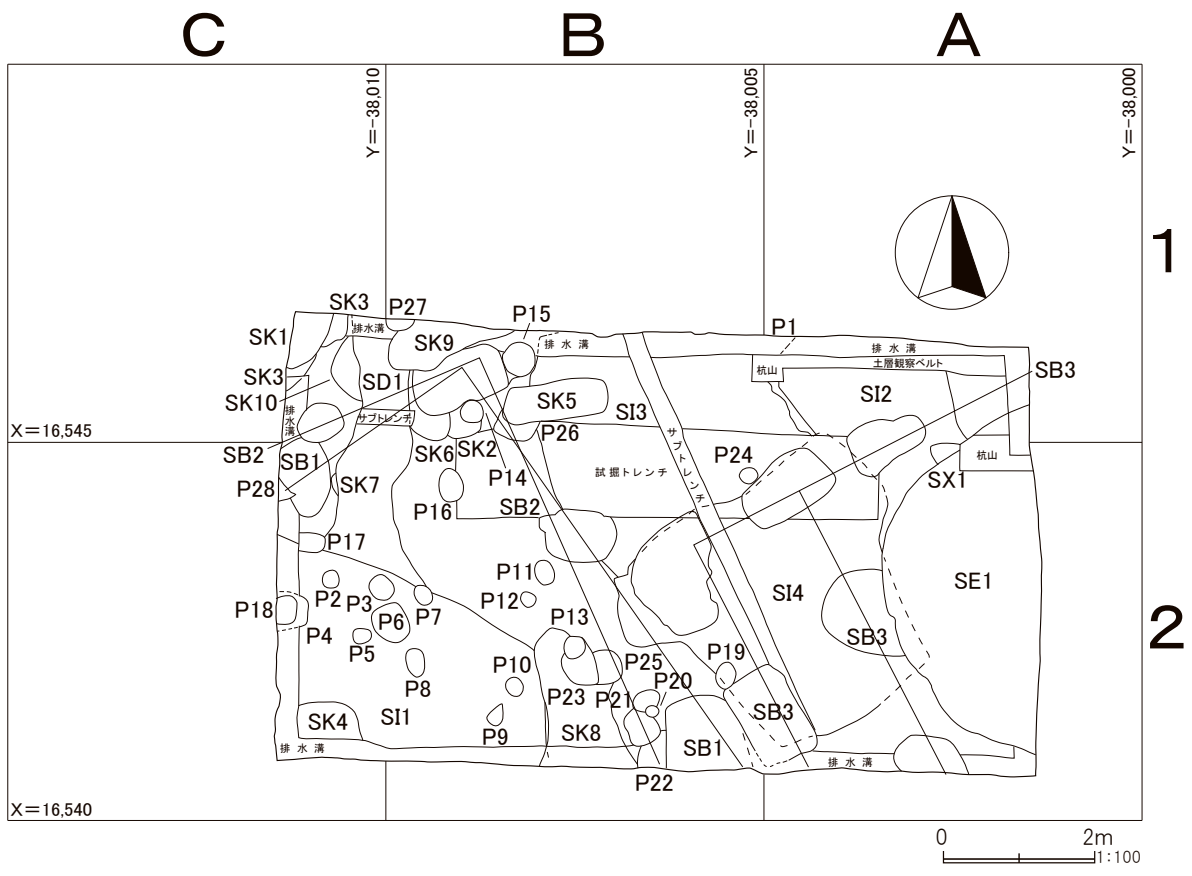
(3) 検出された遺構と遺物

調査地点は、遺跡範囲の中央部やや北寄りの箇所、平成14・15年度に県道熊谷羽生線建設工事に伴い調査が行われた箇所（E・F区）の南に近接する（第23図）。この調査では文化面が2面確認され、下面では縄文時代晩期前葉を中心とする集落跡が存在し、竪穴建物跡4棟が確認され、北西の緩斜面では祭祀に関わる配石遺構1基が確認されている。また、集落部分から東の斜面にかけて縄文時代後期後葉～晩期中葉の遺物包含層が確認されている。一方、上面では弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴建物

跡11棟及び方形周溝墓2基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟や溝跡、中世の区画溝跡と共に区画内に井戸跡1基及び区画外に蔵骨器1基・竪穴状遺構1基・井戸跡1基が確認されている（『諏訪木遺跡Ⅱ』2007、『諏訪木遺跡Ⅲ』2008（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）。本報告の調査地点では、同様な状況が見られ、一連の集落であると推定され、その集落の広がりを確認する結果となったと考えられる。

検出された遺構・遺物は、遺構については、縄文時代後期・晩期の遺物包含層、弥生時代中期末の竪穴建物跡1棟、古墳時代前期の竪穴建物跡2棟、古墳時代後期の竪穴建物跡1棟、奈良時代の掘立柱建物跡1棟、平安時代の掘立柱建物跡2棟、平安時代～中世と考えられる井戸跡1基のほか、土坑10基、ピット26基、溝跡1条、火葬跡1基であった。遺物については、縄文土器深鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器、弥生土器壺・甕・台付甕・台付鉢、土師器坏・高坏・器台・小型壺・鉢・壺・甕・台付甕・甌、須恵器坏・埴・皿・甕・短頸壺・長頸壺・瓶、須恵系土師質土器坏、土師質土器坏・皿、陶器灯明皿・甕、土製耳飾り、土錘、打製石斧・砥石・石錘・凹石・磨製石剣・環状石斧等の石器、刀子、鉄鏃等のほか、特筆すべきは弥生時代中期の土偶形容器が1点ほぼ完存の状態出土し、その全量はコンテナにして5箱であった。

なお、調査区の一部には幾条もの噴砂が確認され、その走向方位は南西—北東方向及び南北方向のものであった。この噴砂は、弥生時代中期の竪穴建物跡はもちろん、古墳時代、奈良・平安時代の遺構をも切っていることから、弘仁9年（818）の大地震による噴砂と推定された。



第24図 諏訪木遺跡調査区全測図

3 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第25～27図、第8表）

調査区の南西部に位置する。B・C-2グリッド内にある。第4・8号土坑、第2～10・17・18号ピット、第1号溝跡と直接重複関係にあり、本遺構が第1号溝跡を除く遺構に切られ、第1号溝跡を切っている。また、第1・2号掘立柱建物跡とも位置的に重複関係にあり、当該遺構に切られていると考えられる。

規模は、南部及び西部が調査区域外となっており、検出長の最大が東西軸で3.55m、南北軸で2.95mを測る。平面プランは、隅丸の長方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-67°-Wを示すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察から24～43cmを測る。埋土は、レンズ状の水平堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、東部に一段高い平坦面があり、西側の大半が東部より深くほぼ平坦となっている。また、中央部付近には炭化物範囲が3か所検出され、それぞれ30cm×9cm、14cm×5cm、9cm×7cmを測るものであった。なお、本章第2節第3項の記述のとおり、弘仁9年（818）の大地震による噴砂が床面及び埋土を貫き確認され、その走行方位は概ね南西-北東方向である。

壁溝は、確認できなかった。

炉が、南端西寄りに検出され、南半は調査区域外となっている。検出最大長が東西軸で57cm、南北検出長34cmを測る。深さは、土層断面観察から6cmを測る。埋土には、焼土塊・焼土粒・炭化物粒が若干含まれていた。

柱穴と考えられるピットはP4・14である。P4は平面プランが楕円形のもので、長軸47cm、短軸30cm、深さが最深で22cmを測り、東側が深いものである。P14は、P13に切られ詳細は不明であるが、平面プランが楕円形と推定され、残存最大長が60cmを測り、深さは最深で16cmを測る。

床面には、このほか16基の大小ピットが検出され、平面プランは主に円形、楕円形であった。以下、全貌が分かるピットについて、長軸・短軸・深さの順で計測値を記述する。

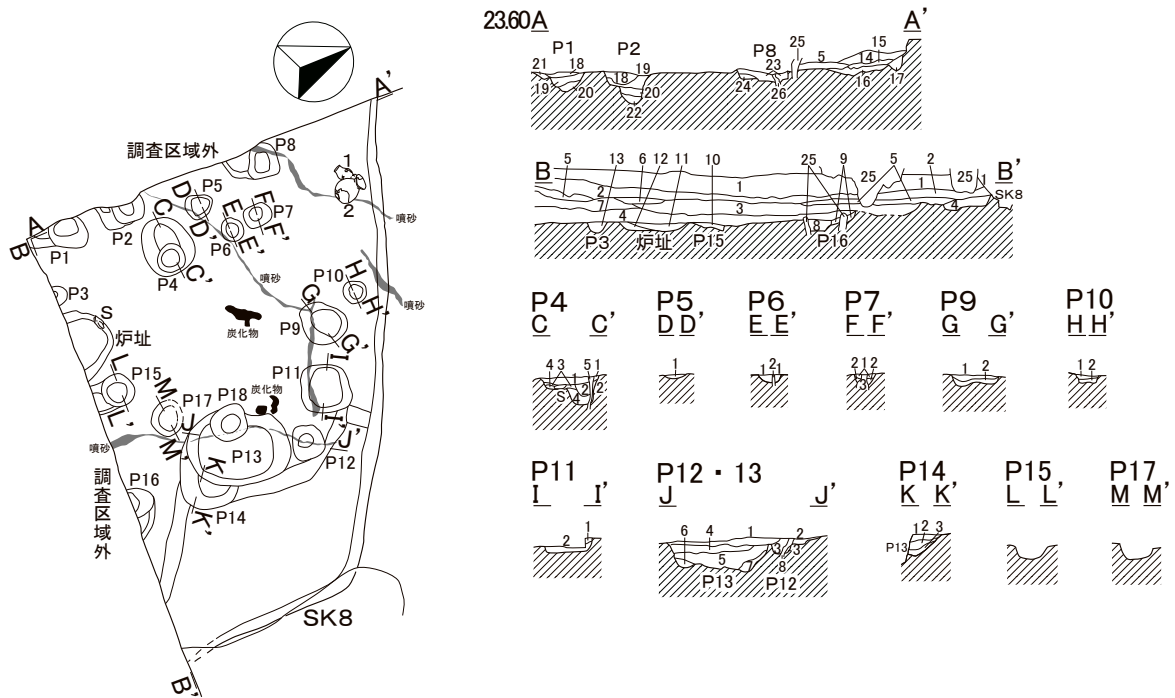
P5：22cm・20cm・3cm、P6：19cm・18cm・6cm、P7：22cm・17cm・8cm、P9：37cm・32cm・9cm、
P10：18cm・18cm・6cm、P11：39cm・38cm・6cm、P12：28cm・25cm・13cm、P13：80cm・60cm・21cm、
P17：28cm・25cm・11cm、P18：29cm・27cm・20cm

出土遺物は、弥生土器壺・甕・台付鉢のほか、ほぼ完形の土偶形容器が出土した。土偶形容器は、竪穴建物跡の北壁際において頭位をN-64°-Eにして、仰向けの状態で出土した。また、この容器は、東部付近に弥生土器壺が覆いかぶさるような状態で出土し、その壺の口縁はほぼ北方向を示していた。なお、容器の頭部付近では弥生土器破片が出土しており、また、容器内は片口状の口縁部付近のみこれを塞ぐように土が見られただけで、空洞の状態であったことから、この土器片が口縁部を塞ぐ蓋の役割を担っていた可能性が指摘される。

このほか出土遺物には、縄文土器深鉢形土器、土師器高坏・甕、ミニチュア土器甕、打製石斧等が見られた。土師器については古墳時代前期に所属し流れ込みと、打製石斧については本遺構が所属する時

期または縄文時代後期～晩期のものと考えられた。

時期は、土偶形容器と共伴した壺が中部高地の栗林式土器と考えられることから、弥生時代中期末と考えられる。



土層説明 (A-A', B-B')

- SI1
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 灰色粘質土
 - 4 灰色粘質土
 - 5 黄灰色粘質土
 - 6 灰色粘質土
 - 7 青灰色粘質土
 - 8 褐灰色粘質土【P16】
 - 9 褐灰色粘質土【P16】
 - 10 褐灰色粘質土【P15】
 - 11 黄灰色粘質土【炉址】
 - 12 灰色粘質土【炉址】
 - 13 褐灰色粘質土【P3】
 - 14 褐灰色粘質土
 - 15 褐灰色粘質土
 - 16 褐灰色粘質土
 - 17 黄灰色粘質土
 - 18 灰色粘質土【P1・2】
 - 19 灰色粘質土【P1・2】
 - 20 黒褐色粘質土【P1・2】
 - 21 灰色粘質土【P1・2】
 - 22 黒色粘質土【P2】
 - 23 褐灰色粘質土【P8】
 - 24 灰色粘質土【P8】
 - 25 攪乱
 - 26 噴砂

土層説明 (C-C')

- SI1 (P4)
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 黄灰色粘質土
 - 3 黄灰色粘質土
 - 4 黒褐色粘質土
 - 5 噴砂

土層説明 (D-D')

- SI1 (P5)
- 1 褐灰色粘質土

土層説明 (E-E')

- SI1 (P6)
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 噴砂

土層説明 (F-F')

- SI1 (P7)
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 褐灰色粘質土
 - 3 黒褐色粘質土

土層説明 (G-G')

- SI1 (P9)
- 1 灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土

土層説明 (H-H')

- SI1 (P10)
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 黄灰色粘質土

土層説明 (I-I')

- SI1 (P11)
- 1 褐灰色粘質土
 - 2 黄灰色粘質土

土層説明 (J-J')

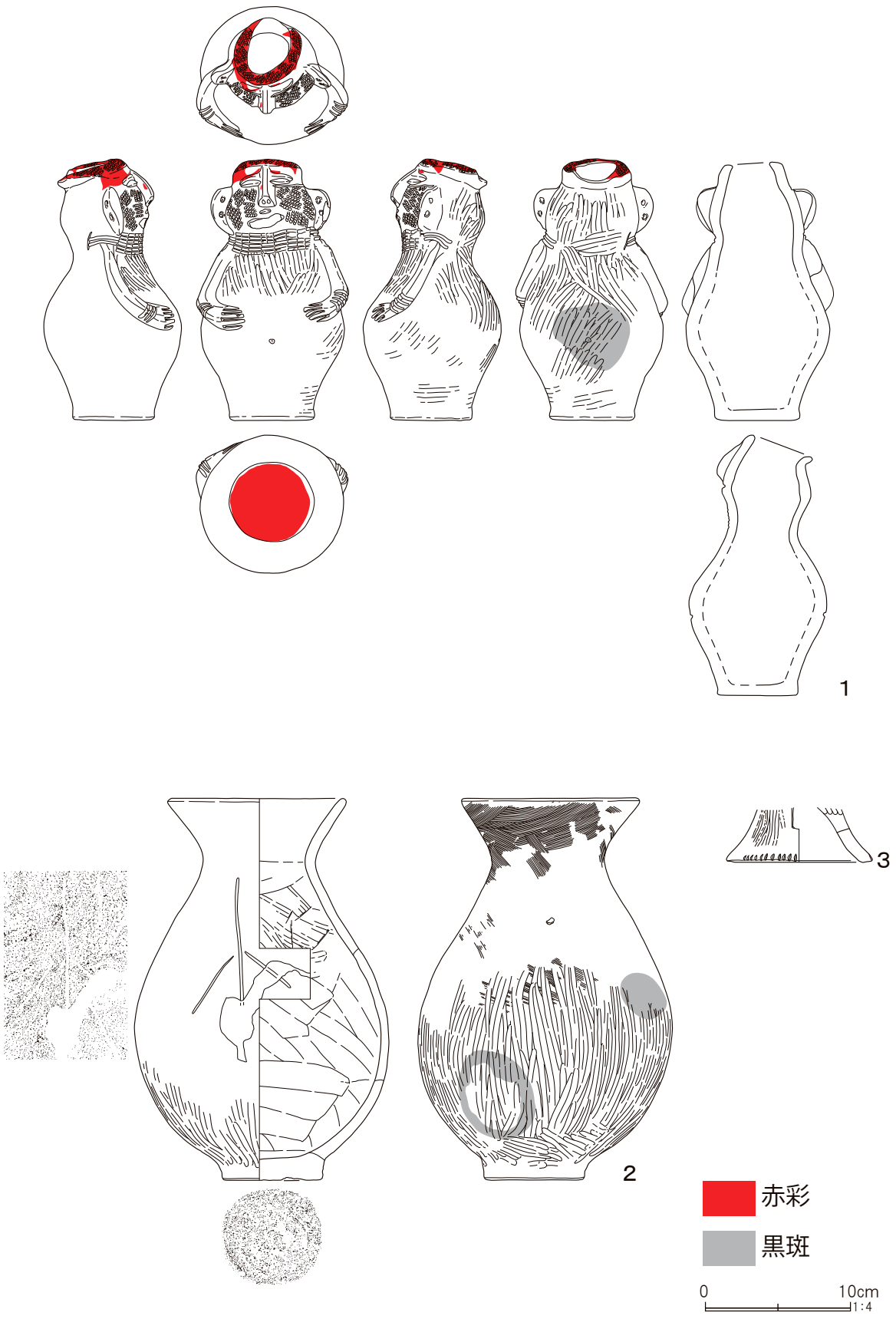
- SI1 (P12・13)
- 1 暗灰色粘質土
 - 2 灰褐色粘質土
 - 3 黄灰色粘質土【P12】
 - 4 黒褐色粘質土【P13】
 - 5 黒色粘質土【P13】
 - 6 灰色粘質土【P13】
 - 7 灰色粘質土【P13】
 - 8 黒褐色粘質土

土層説明 (K-K')

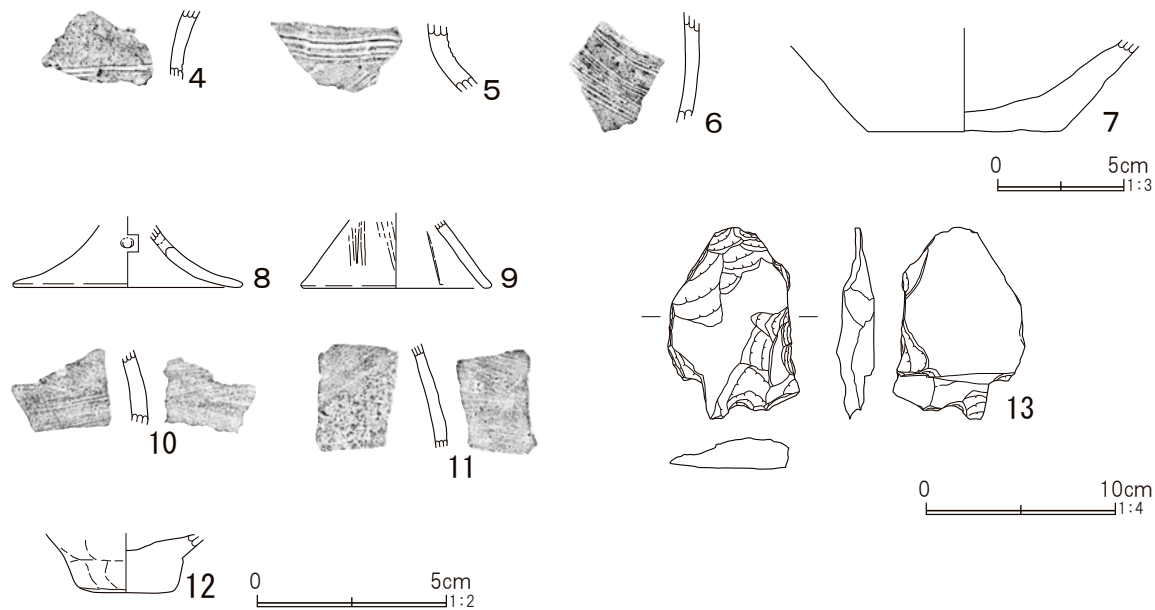
- SI1 (P14)
- 1 灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 灰色粘質土



第25図 諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡



第26図 諏訪木遺跡第1号竖穴建物跡出土遺物(1)



第27図 諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物(2)

第8表 諏訪木遺跡第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第26・27図)

標図番号	図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
26	1	土偶形容器	4.60	18.00	5.90 幅10.50	ABDGH	A	灰白色、灰黄褐色、 にぶい黄橙色	98%	頭部・底部外面に赤彩。腹部背 面に黒斑。重量453.5g。
26	2	弥生土器 壺	11.90	26.30	6.90	ABDGM	B	灰白色、浅黄橙色	90%	胴部上半に鳥脚文様。口縁部外 面：刷毛目。胴部下半：ミガキ。 底部外面に植物痕(刎か)。内面： ナデ。胴部上半・下半に黒斑有 り。胴部上半に粗粒痕か。
26	3	弥生土器 台付鉢?	—	残存高 3.60	10.00	ACEIJO	B	橙色	台部25%	口唇部にキザミ、外面にミガキ。 スカシ孔(4方向か)。
27	4	弥生土器 甕	—	—	—	ABI	B	灰黄褐色、黒褐色	頸部破片	頸部に横位の櫛描簾状文。
27	5	弥生土器 甕	—	—	—	ABEH	B	明赤褐色	頸部破片	頸部に横位の櫛描簾状文。
27	6	弥生土器 甕	—	—	—	EHI	B	灰褐色	胴部破片	胴部に4本一単位の櫛歯状工具 による斜位の多条沈線文。
27	7	縄文土器 深鉢形土器	—	残存高 3.50	(7.60)	ABDIJ	B	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	底部25%	縄文時代後・晩期遺物包含層か ら流れ込み。
27	8	土師器 高坏	—	残存高 3.30	(12.00)	ABCGHMN	B	外面：にぶい赤褐色、 橙色 内面：黒色	脚部20%	スカシ孔有り。 外面に一部赤彩が残存。 古墳前期。 SI2またはSI3から流れ込み。
27	9	土師器 高坏	—	残存高 3.60	(9.90)	ABEHMN	B	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい橙色	脚部10%	外面：ミガキ。 内面：ヘラナデ。 古墳前期。 SI2またはSI3から流れ込み。
27	10	土師器 甕	—	—	—	BGJM	B	外面：明赤褐色 内面：赤褐色	胴部破片	外面：刷毛目。 内面：ヨコナデ。 古墳前期。 SI2またはSI3から流れ込み。
27	11	土師器 甕	—	—	—	EGIJM	B	外面：灰黄褐色 内面：にぶい橙色	胴部破片	外面：ヘラケズリ(一部摩滅)。 内面：ナデ(横位・斜位)。 古墳前期。 SI2またはSI3から流れ込み。
27	12	ミニチュア土器 甕(壺)	—	残存高 1.40	2.50	EHMO	B	橙色、灰褐色	底部 100%	壺か。 手つくね。 古墳前期。 SI2またはSI3から流れ込み。
27	13	打製石斧	最大長10.10 最大幅6.40 最大厚2.00			重量120.0			50%	粘板岩製。

第2号竪穴建物跡（第28・29図、第9表）

調査区の北東部に位置する。A-1・2グリッド内にある。第3・4号竪穴建物跡、第3号掘立柱建物跡、第1号井戸跡、第1号火葬跡と重複関係にあり、本遺構が第3号竪穴建物跡を切り、その他の遺構に切られている。

規模は、プランの北部及び東部が調査区域外となり、また複数の他遺構によって切られているため詳細不明であることから、残存部において長軸2.52m、短軸1.55mを測る。平面プランは、長方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-44°-Eを示すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察から5～25cmを測る。埋土は、水平及びレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、土層断面観察ができた箇所、やや凹凸があり、西が浅く東が深い傾斜をもつものである。なお、第1号竪穴建物跡と同様に、弘仁9年（818）の大地震によるものと考えられる噴砂が、土層断面観察から床面及び埋土を貫く状況で確認された。

壁溝や炉は、検出できなかった。

柱穴の可能性のあるピットを含めて床面において一切のピットが検出できなかった。

出土遺物は、土師器壺・台付甕のほか弥生土器甕等が検出できた。

時期については、判断材料に乏しいが、土師器壺・台付甕が古墳時代前期に所属すると考えられ、重複する古墳時代後期の第4号竪穴建物跡に切られていることから、古墳時代前期としておきたい。なお、同じく古墳時代前期の第3号竪穴建物跡よりは、若干の時期差をもって新しいと考えられる。

第3号竪穴建物跡（第28・30図、第10表）

調査区の中央部北寄りに位置する。A・B-1・2グリッド内にある。第2・4号竪穴建物跡、第1・2・3号掘立柱建物跡、第5号土坑、第1・24・26号ピットと重複関係にあり、本遺構がいずれの遺構にも切られている。

規模は、プランの北部が調査区域外となり、またプランの東部が第2号竪穴建物跡に、プランの南部が第4号竪穴建物跡に切られているため詳細不明であることから、残存部において長軸3.29m、短軸3.05mを測る。平面プランは、方形を呈すると推定される。主軸方位は、N-77°-Eを示すと推定される。

床までの深さは、土層断面観察から8～14cmを測る。埋土は、やや水平なレンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、土層断面観察ができた箇所、やや凹凸はあるが概ね平坦である。なお、遺構確認の際には、ほぼ床面または床面の一部をやや削平した状態での検出であった。

床面下には、特にプランの中央部から西部にかけて、多数の方形及び不整形な土坑状の掘方が至る所に確認され、凹凸が激しいものであった。また、土坑状の掘方下にはP6のようなピット状の掘方を伴うものも見られた。これらの掘方は貼床の掘方と考えられ、主として灰白色粘質土の大小ブロックや粒子を含むオリーブ黒色粘質土・黒褐色粘質土・褐灰色粘質土をもって埋められていた。

壁溝は、平面では検出できなかったが、土層断面観察ができた北壁箇所において溝状の落ち込みが確認された。その規模は、幅30cm、深さ21cmを測る。

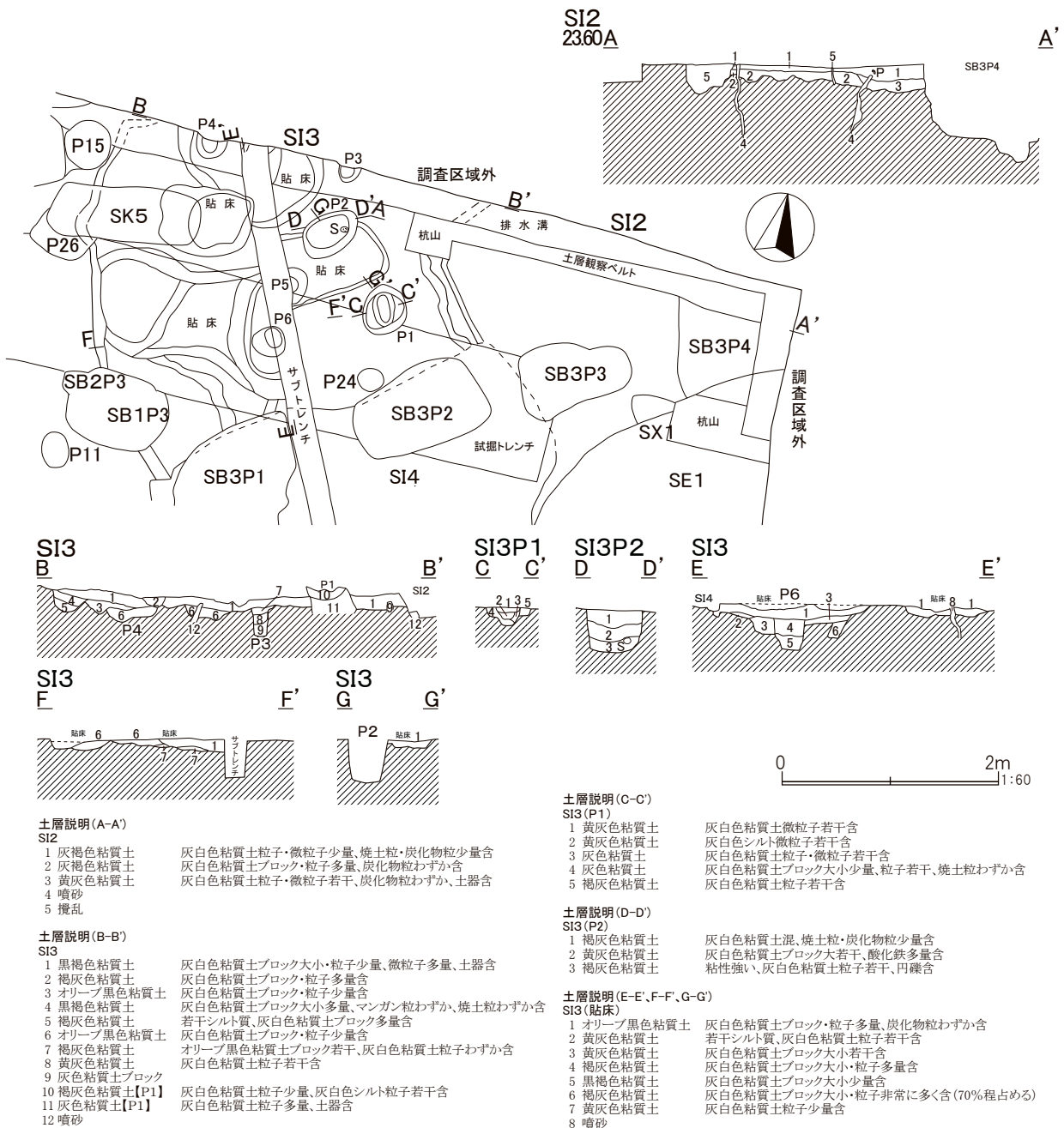
プランの東端、第2号竪穴建物跡と接する箇所において焼土が広がる箇所を検出し、炉址とも考えら

れた。その規模は、最大幅で35cm×15cmである。

床面にはピットが5基（P1～5）検出でき、うち柱穴の可能性のあるのはP1・3である。各々平面形、規模について長軸・短軸・深さの順で記述すると、P1がやや不整形な円形で、43cm・40cm・16cm（最深部）であり、底部中央部が深く断面形が逆凸型状になるものである。P3は楕円形と推定され、不明・21cm・27cmである。その他、P2は楕円形で55cm・37cm・39cm、P4は楕円形と推定され、34cm・不明・11cm、P5は楕円形と推定され、34cm・不明・13cmの規模である。

出土遺物は、縄文土器深鉢形土器・注口土器、弥生土器甕、土師器器台、打製石斧等が出土した。土師器器台以外は、当該遺構に所属するものとは考え難く、他遺構等からの流れ込みと判断した。

時期は、土師器器台が示す古墳時代前期と考えられ、同じく古墳時代前期と考えられる第2号竪穴建



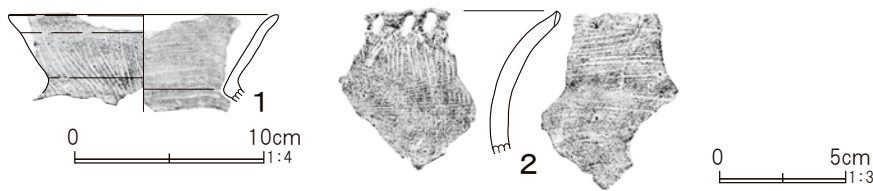
第28図 諏訪木遺跡第2・3号竪穴建物跡

物跡とは、重複関係において先行するものと考えられる。

第4号竖穴建物跡（第31・32図、第11表）

調査区の中央部から南東部に位置する。A・B-2グリッド内にある。第2・3号竖穴建物跡、第3号掘立柱建物跡、第19号ピット、第1号井戸跡と重複関係にあり、本遺構が第2・3号竖穴建物跡を切り、第3号掘立柱建物跡、第19号ピット及び第1号井戸跡に切られている。また、第1号掘立柱建物跡とは位置的に重複関係にある。

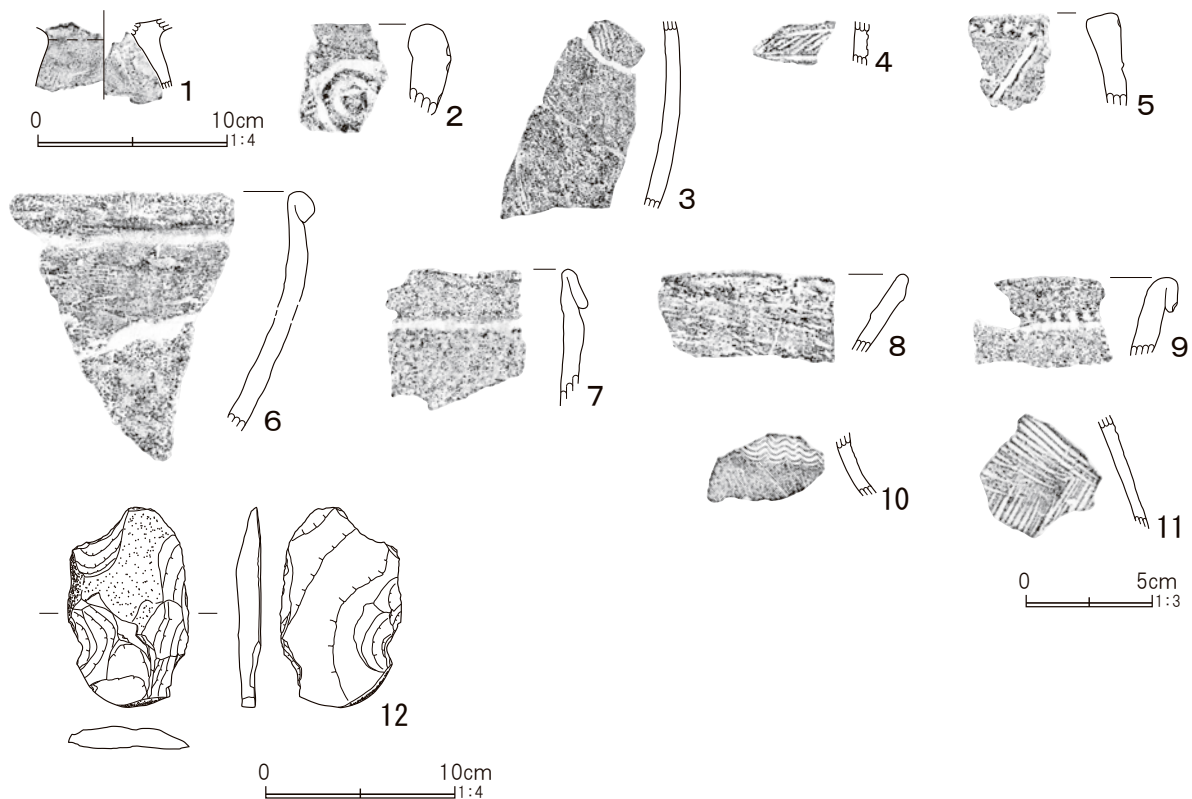
規模は、プランの東部の一部が第1号井戸跡に切られているが、長軸3.36m、短軸2.80mを測る。平面プランは、やや不整形な正方形を呈すると推定され、北部の短軸は推定で3.3m前後を測る。



第29図 諏訪木遺跡第2号竖穴建物跡出土遺物

第9表 諏訪木遺跡第2号竖穴建物跡出土遺物観察表（第29図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器壺	(14.10)	残存高4.10	—	ABCJK	B	にぶい橙色	口縁部20%	口縁部外面に刷毛目状調整。古墳前期。
2	弥生土器甕	—	—	—	AIJN	B	黒褐色	口縁部破片	外面：櫛歯状工具による横位及び縦位の多条沈線文。内面：口縁部付近に櫛歯状工具による横位の多条沈線文。他はミガキ。流れ込み。



第30図 諏訪木遺跡第3号竖穴建物跡出土遺物

第10表 諏訪木遺跡第3号竪穴建物跡出土遺物観察表（第30図）

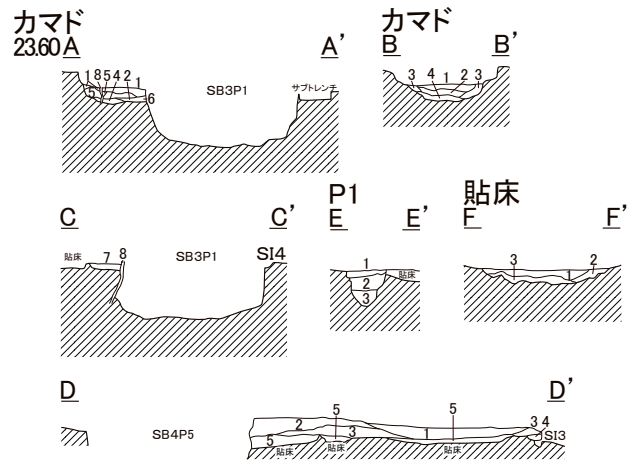
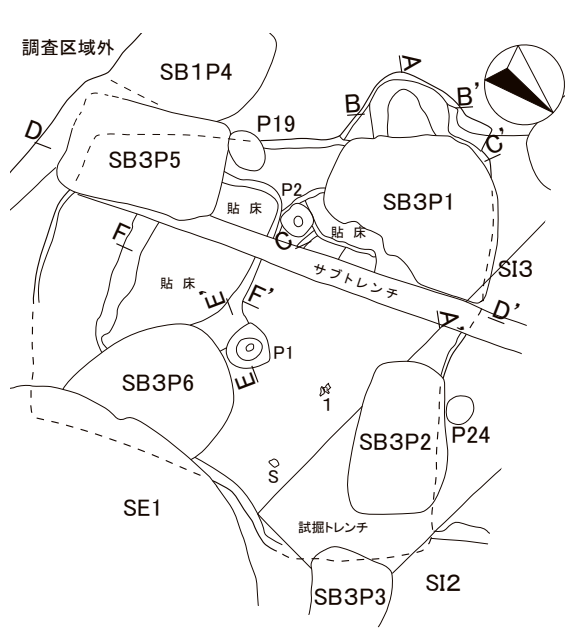
図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 器台	—	残存高 3.10	—	EHILMN	B	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	台部破片	内外面に刷毛目。 古墳前期。
2	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	DEGJM	B	橙色	口縁部破片	精製土器。口縁部に隆帯による渦巻文。加曾利E式か。P2出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
3	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	DGJL	B	にぶい黄橙色	胴部破片	精製土器。摩滅して詳細は不明だが、LR縄文か。安行式。P1出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
4	縄文土器 注口土器	—	—	—	GM	A	にぶい赤褐色	頸部破片	横位の沈線文区画内にLR縄文。外面に赤彩。安行3a式か。縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
5	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	BDEGM	B	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	口縁部破片	粗製土器。口唇部付近に列点文。沈線による区画文(J字状か)。称名寺Ⅱ式。P2出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
6	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	DGKMN	B	橙色、にぶい黄橙色	口縁部破片	粗製土器。口縁部付近に横位及び斜位のヘラケズリか。口縁部に太い隆帯が巡る。加曾利B式。縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
7	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	BEGMO	B	橙色、黒褐色	口縁部破片	粗製土器。口縁部に太い隆帯が巡る。加曾利B式。P2出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
8	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	ADEMN	B	にぶい黄橙色	口縁部破片	粗製土器。口縁部が直線的に開く。加曾利B式。P2出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
9	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	EGMN	B	橙色	口縁部破片	粗製土器。口縁部にキザミ目を持つ隆帯が巡る。安行式。P1出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
10	弥生土器 甕	—	—	—	ABEJN	A	外面：灰褐色 内面：にぶい橙色	頸部破片	櫛描波状文(5本一単位櫛歯状工具)。
11	弥生土器 甕	—	—	—	EHILN	B	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	胴部破片	櫛歯状工具による羽状文(6本一単位)。
12	打製石斧	最大長10.50 最大幅6.40 最大厚1.20 重量92.6						一部欠損	泥岩または粘板岩製。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。

主軸方位は、N - 127° - Wを示す。

床までの深さは、土層断面観察から6～14cmを測る。埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

床面は、ほぼ平坦である。また、貼床構造と考えられ、カマド前及び南寄りの床面に掘方が確認された。その掘方は、不整形や方形状の土坑状に概ね5～11cmの深さで掘りくぼめてあり、P2のようにピット状に掘りくぼめてあった箇所も確認された。また、灰白色粘質土の大小ブロック・粒子を含む灰色粘質土・黄灰色粘質土・黒褐色粘質土をもって埋められていた。

壁溝は、平面では検出できなかったが、土層断面観察ができた北壁箇所において僅かに溝状の落ち込みが確認された。その規模は、幅10cm、深さ5cmを測る。



土層説明(A-A', B-B', C-C')
SI4(カマド)

- 1 灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック小・粒子多量、炭化物粒わずか含
- 2 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子少量含
- 3 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子わずか、黒褐色粘質土ブロックわずか、炭化物粒若干含
- 4 灰色粘質土 灰白色粘質土微粒子わずか含
- 5 灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック多量含(70%程占める)、焼土粒わずか含
- 6 灰色粘質土 灰白色粘質土粒子少量含
- 7 灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック大小少量含
- 8 噴砂

土層説明(D-D')
SI4

- 1 灰白色粘質土ブロック小・粒子若干、炭化物粒わずか含
- 2 灰白色粘質土粒子・微粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか含
- 3 黄灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック大小・粒子若干含
- 4 灰色粘質土 若干シルト質、灰白色粘質土粒子ごくわずか含
- 5 灰色粘質土【貼床】 灰白色粘質土ブロック大小少量含

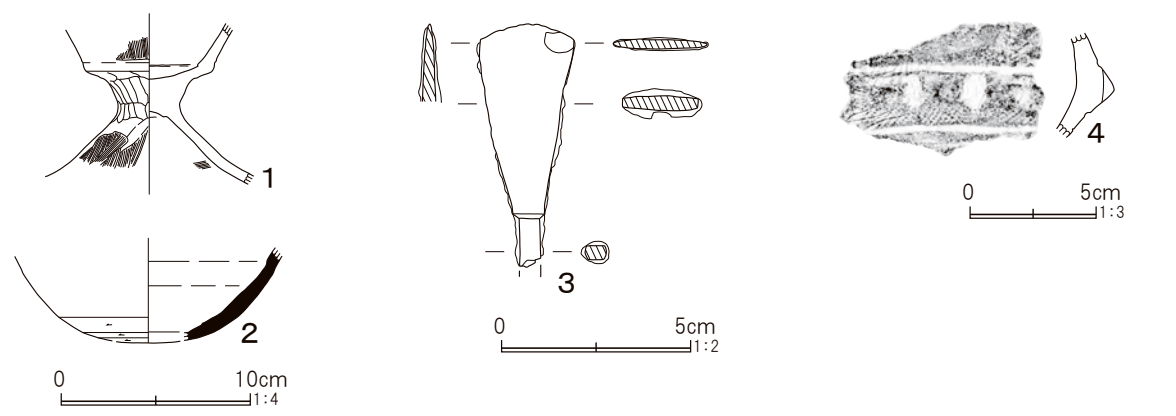
土層説明(E-E')
SI4(P1)

- 1 黄灰色粘質土 灰白色粘質土粒子若干含
- 2 黒褐色粘質土 灰白色粘質土粒子多量、焼土粒わずか含
- 3 黒褐色粘質土 灰白色粘質土粒子・微粒子少量、焼土塊わずか含

土層説明(F-F')
SI4(貼床)

- 1 黄灰色粘質土 灰白色粘質土ブロック大少量、粒子若干、炭化物若干、焼土粒わずか含
- 2 黒褐色粘質土 灰白色粘質土ブロック小多量、焼土粒わずか含
- 3 黒褐色粘質土 灰白色粘質土ブロック小若干、ブロック大わずか含

第31図 諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡



第32図 諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡出土遺物

第11表 諏訪木遺跡第4号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第32図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 高坏	—	残存高 7.70	—	AEIKMN	B	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	坏部下半～ 脚部上半	外面：坏部と脚部つなぎ目付近のみヘラナデ、他は刷毛目。古墳後期。
2	須恵器 短頸壺	—	残存高 4.40	—	ABDGH	A	外面：青灰色 内面：灰色	胴下半部～ 底部破片	底部付近のみ回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。古墳後期か。
3	鉄鎌	長さ6.40 幅2.50 厚さ0.55 重量12.4g						鎌身下半部 及び基部の 一部	方頭式長茎(無頸)先刃式鎌。斜角関。
4	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	ABDHJK	B	にぶい橙色、橙色	胴部破片	肩の張る部位に紐線文を配し刻みを施し、下端にはLR単節縄文。以下は入組文の磨滑縄文。安行3a式。縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。

柱穴と考えられるピットは検出されず、ほぼ中央部において唯一ピット（P1）が検出された。その規模は、直径33cm前後、深さ28cmを測る。なお、柱穴あったと考えられる箇所には第3号掘立柱建物跡の柱穴があり、これにより失われた可能性が考えられる。

カマドは、西壁の北寄り、北西隅に近い箇所に設置されていた。炊口付近のみ確認され、平面残存長54cm、焚口上幅83cm、最深25cmを測り、煙道部は削平されて確認できなかった。焚口前は、第3号掘立柱建物跡の柱穴（P6）により大きく掘削されていた。

貯蔵穴は、焚口前と同様に第3号掘立柱建物跡の柱穴（P6）により大きく掘削されたと考えられ、検出できなかった。

出土遺物は、土師器高坏、須恵器短頸壺、鉄鏃（方頭式長茎先刃式鏃）のほか縄文土器深鉢形土器等が出土し、中央部やや北寄りを中心にして検出された。縄文土器深鉢形土器については、流れ込みと判断される。

時期は、土師器高坏、須恵器短頸壺が示す古墳時代後期と考えられる。なお、土師器高坏は6世紀中頃～後半と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第33～35・37図、第12・14表）

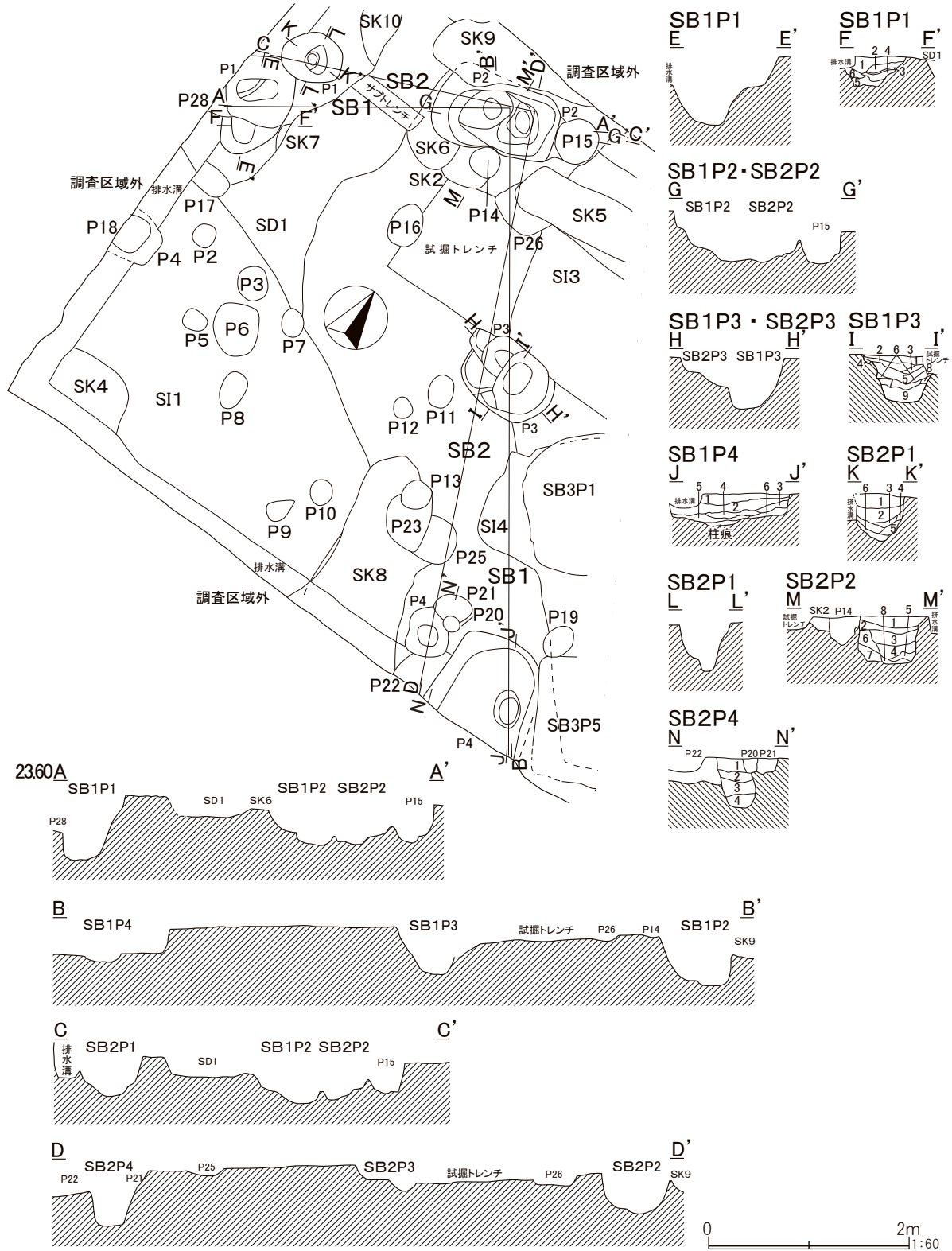
調査区の西半部に位置する。B・C-1・2グリッド内にある。第2・3号掘立柱建物跡、第3号竪穴建物跡、第2・6・9号土坑、第14・22・28号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が第2・3号掘立柱建物跡及び第14号ピットに切られ、その他の遺構を切っている。また、位置的には第1・4号竪穴建物跡、第1号溝跡、第4・7・8号土坑、第2～13・16～18・20・21・23・25号ピットと重複関係にあるが、直接切り合いの関係にはない。なお、第1号竪穴建物跡とは時期がかけ離れていることは明白である。

西部及び南部が調査区域外であり、柱穴が4基検出されている、梁行2間以上、桁行2間以上の南北棟側柱式建物と推定される。規模は、検出面積18㎡以上の建物であり、梁行の柱間が約2.4m（約8尺）、桁行の柱間が2.7～3.3m（約9～11尺）を測り、桁行については北側の柱間が狭く、南側の柱間が広いものと考えられる。概ね柱筋の通りが良い建物である。主軸方位は、N-35°-Wを示す。

柱穴は、隅丸長方形ないしは楕円形の掘方である。P1は南北に長い楕円形の掘方で、長軸1.05m、短軸0.68m、最深0.67mで、大きく2段の掘方で南側が浅く深さ30cmを測る。P2は東西に長い隅丸長方形の掘方で、第2号掘立柱建物跡の柱穴P2と重複しているため長軸長は不明である。短軸も第9号土坑と一部重複していることから推定長で0.67mを測り、深さは49cmを測る。P3は東西に長い楕円形の掘方で、第2号掘立柱建物跡の柱穴P3と重複しているが、長軸0.95mを測る。短軸は試掘調査の際のトレンチにより一部破壊を受けていることから推定長で0.76mを測り、深さは46cmを測る。P4は南北に長い隅丸長方形の掘方と推定され、南部が調査区域外となっていることから検出残存長軸1.00m、短軸は検出残存長1.05mを測る。深さは、東寄りにある柱沈下の柱痕跡箇所で31cmを測る。

埋土は、いずれの柱穴においてもレンズ状または水平に堆積していた。柱痕跡は、P4における柱沈下の柱痕跡（柱のあたり）を除いて、いずれの柱穴においても土層断面観察上確認できなかった。

出土遺物は、P 1 で図示ができなかった須恵器坏のほか縄文土器深鉢形土器、第 2 号掘立柱建物跡の P 2 と重複している P 2 では須恵器長頸壺、土師器甕・甌、同じく第 2 号掘立柱建物跡の P 3 と重複している P 3 では土師器器台、P 4 で須恵器瓶、土師器坏・壺のほか弥生土器甕が検出できた。P 2 の土師器甕・甌は前者が古墳時代前期、後者が古墳時代後期、P 3 の土師器器台は古墳時代前期、P 4 の土



第33図 諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡

土層説明(F-F)**SB1・P1**

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子若干、マンガング粒わずか、酸化鉄少量含 |
| 2 青灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、炭化物粒若干含 |
| 3 炭化物 | 青灰色粘質土中、灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子・微粒子若干含 |
| 5 黒色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 6 灰色粘質土 | 灰白色シルト粒子わずか、灰白色粘質土粒子ごくわずか含 |

土層説明(I-I)**SB1・P3**

- | | |
|-------------|-----------------------------|
| 1 黒褐色粘質土 | 灰白色シルト微粒子多量、焼土粒・炭化物粒わずか含 |
| 2 灰色粘質土 | 若干シルト質、灰白色粘質土粒子若干、焼土粒わずか含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか、マンガング粒・炭化物粒わずか含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか、マンガング粒・炭化物粒わずか含 |
| 5 灰色粘質土 | 酸化鉄含み黒褐色帯びる、灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 6 黒褐色粘質土 | 灰白色シルトブロック小・粒子若干、酸化鉄含 |
| 7 オリーブ黒色粘質土 | 灰白色シルト粒子わずか、炭化物粒わずか含 |
| 8 オリーブ黒色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子・微粒子少量含 |
| 9 灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子・微粒子少量含 |

土層説明(J-J)**SB1・P4**

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 黒褐色粘質土 | 灰白色シルト粒子・微粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか、遺物含 |
| 2 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子・微粒子若干、灰白色シルトブロック小わずか、焼土粒わずか、遺物含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロックわずか含 |
| 4 オリーブ黒色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子多量含 |
| 5 灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小少量、灰白色シルトブロック小若干含 |
| 6 灰白色粘質土中にオリーブ黒色粘質土ブロック大小・粒子多量の混合層 | |

土層説明(K-K)**SB2・P1**

- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 黄灰色粘質土 | 灰白色シルトブロック・粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか含 |
| 2 灰色粘質土 | 灰白色シルトブロック大わずか含 |
| 3 黒褐色粘質土 | |
| 4 褐灰色粘質土 | 灰白色シルト粒子少量含 |
| 5 暗灰色粘土 | 粘性強い |
| 6 黒色粘土 | 灰白色粘質土ブロック小若干含 |

土層説明(M-M)**SB2・P2**

- | | |
|--------------------|-----------------------------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか、土器含 |
| 2 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小わずか、灰白色シルトブロック小わずか含 |
| 3 黄灰色粘質土 | 灰白色シルト粒子若干、灰白色粘質土ブロック小わずか、焼土粒わずか含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 粘性強い、灰白色シルト粒子若干含 |
| 5 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子若干含 |
| 6 灰白色粘質土と褐灰色粘質土混合層 | |
| 7 黒褐色粘土 | |
| 8 暗灰色粘土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |

土層説明(N-N)**SB2・P4**

- | | |
|----------|--------------------------|
| 1 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、酸化鉄若干、焼土粒わずか含 |
| 2 灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子少量含 |
| 3 灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小・粒子・微粒子多量含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土粒子・微粒子多量含 |

第34図 諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡土層説明

師器坏・壺は前者が古墳時代後期、後者が古墳時代前期と判断され、いずれも位置的に重複する第3・4号竪穴建物跡からの流れ込み、P1の縄文土器深鉢形土器及びP4の弥生土器甕も流れ込みの遺物と判断される。

時期は、P1の須恵器坏が示す時期、重複する第2号掘立柱建物跡との切り合い関係、及び位置的に重複関係にある遺構との関係から、8世紀後半としておきたい。

第2号掘立柱建物跡（第33・34・36・37図、第13・14表）

調査区の西半部に位置する。B・C-1・2グリッド内にある。第1号掘立柱建物跡、第14・20～22号ピットと直接重複関係にあり、本遺構が第1号掘立柱建物跡を切り、第14・20～22号ピットに切られている。また、位置的には第1号竪穴建物跡、第1号溝跡、第2・4・5～8号土坑、第2～13・16～18・23・25・26号ピットと重複関係にあるが、直接切り合いの関係にはない。なお、第1号竪穴建物跡とは時期がかけ離れていることは明白である。

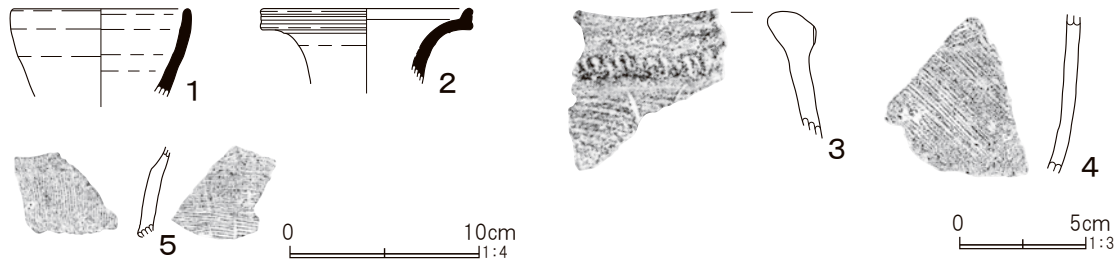
西部及び南部が調査区域外であり、柱穴が4基検出されている、梁行2間以上、桁行3間以上の南北棟側柱式建物と推定される。規模は、検出面積18㎡以上の建物であり、梁行の柱間が約2.3m（8尺弱）、桁行の柱間が2.4～3.0m（約8～10尺）を測り、桁行については北側の柱間が狭く、南側の柱間が広いものと考えられる。やや柱筋の通りが悪い建物である。主軸方位は、N-24°-Wを示す。

柱穴は、概ね円形に近い楕円形の掘方である。P1は長軸0.61m、短軸0.50m、深さ0.47mを測る。P2は隅丸方形と推定される掘方で、第2号掘立柱建物跡の柱穴P2と重複しているため長軸長は不明である。短軸は0.78mを測り、深さは47cmを測る。P3は東西に長い楕円形の掘方で、2段の掘方で西側が浅い。第2号掘立柱建物跡の柱穴P3と重複しているため長軸長は不明である。短軸は試掘調査の際のトレンチにより一部破壊を受けていることから検出残存長で0.41m測り、深さは29cmを測る。P4は南北にやや長い楕円形の掘方で、長軸0.51m、短軸0.41m、深さ0.49mを測る。

埋土は、いずれの柱穴においてもレンズ状または水平に堆積していた。柱痕跡は、P1における柱沈下の柱痕跡（柱のあたり）を除いて、いずれの柱穴においても土層断面観察上確認できなかった。なお、柱穴P2における第3～5・8層は、柱痕跡の可能性も考えられる。

出土遺物は、P1で図示ができなかった須恵器坏のほか土師器坏、第2号掘立柱建物跡のP2と重複

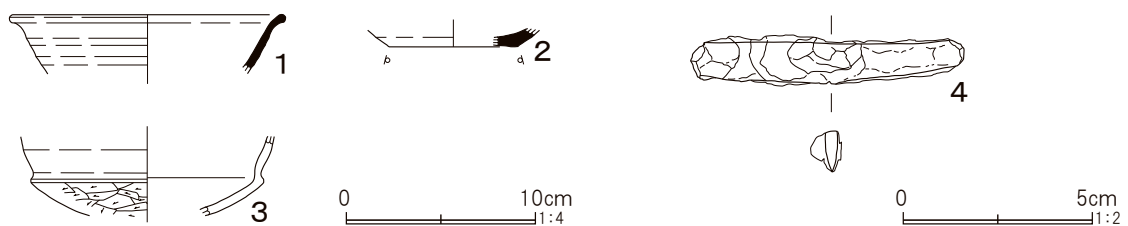
しているP2では須恵器坏・長頸壺、土師器甕・甌、同じく第2号掘立柱建物跡のP3と重複しているP3では須恵器坏、土師器器台、P4で土師器坏のほか刀子が発出できた。P1の土師器坏は古墳時代後期、P2の土師器甕・甌は前者が古墳時代前期、後者が古墳時代後期、P3の土師器器台は古墳時代前期、P4の土師器坏は古墳時代後期と判断され、いずれも位置的に重複する第3・4号竪穴建物跡からの流れ込みの遺物と判断される。



第35図 諏訪木遺跡第1号掘立柱建物跡出土遺物

第12表 諏訪木遺跡第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第35図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器瓶	(9.20)	残存高4.10	—	ABL N	A	灰色	口縁部～頸部20%	外面に自然釉。P4出土。
2	須恵器長頸壺	(10.80)	残存高4.00	—	ADFHN	A	青灰色	口縁部～頸部15%	南比企産。P2出土。
3	縄文土器深鉢形土器	—	—	—	ABDM	B	明赤褐色	口縁部破片	縄文土器。口辺は肉厚で点刻が施される。以下沈線文。縦位の弧状の沈線文間に横位及び斜位の沈線文。安行2式。P1出土。
4	弥生土器甕	—	—	—	GHJO	B	にぶい橙色、灰黄褐色	胴部下半破片	外面：櫛歯状工具による横位の羽状文。内面：斜位のヘラナデ。弥生中期後半。P4出土。
5	土師器壺	—	—	—	ABDEG	B	外面：浅黄橙色 内面：灰色	頸部破片	外面：縦位の刷毛目。内面：横位の刷毛目。古墳前期。P4出土。



第36図 諏訪木遺跡第2号掘立柱建物跡出土遺物

第13表 諏訪木遺跡第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第36図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏	(14.30)	残存高3.10	—	ABDHL	A	灰色	口縁部破片10%	末野産。9C後半。P2出土。
2	須恵器坏	—	残存高0.90	(6.80)	AEHJM	B	黒褐色	底部20%	底部外面：回転糸切り。末野産。9C後半。P3出土。
3	土師器坏	—	残存高4.20	—	ABDEJK	A	橙色、にぶい黄橙色	20%	古墳後期(6C後半)。P4出土。
4	鉄製品刀子	最大長7.20 最大幅(1.00) 最大厚(0.30) 重量10.2						切先欠損	茎部側残存か。P4出土。

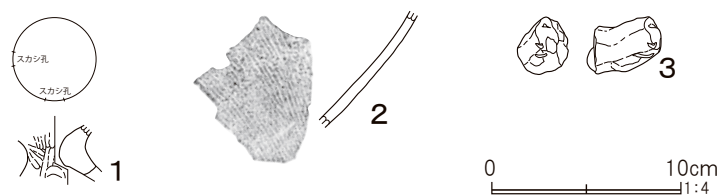
時期は、P 1・2・3の須恵器坏が示す時期、重複する第1号掘立柱建物跡との切り合い関係から、9世紀後半と考えられる。

第3号掘立柱建物跡（第38・39図、第15表）

調査区の東半部に位置する。A・B-1・2グリッド内にある。第1号掘立柱建物跡、第2～4号竪穴建物跡と直接重複関係にあり、本遺構がいずれの遺構も切っている。また、位置的には第1号井戸跡、第1号火葬跡と重複関係にあるが、直接切り合いの関係にはない。

東部及び南部が調査区域外であり、柱穴が7基検出されている、梁行2間以上、桁行3間以上の側柱式建物と推定される（東西棟か）。規模は、検出面積17㎡以上の建物であり、梁行の柱間が約2.4m（約8尺）、桁行の柱間が約1.5～1.6m（約5尺）を測る。また、身舎の西側には東柱と判断した柱穴が2基検出され、その柱間は1.8～2.1m（約6～7尺）を測るが、梁行の柱穴とは位置的に対応しないものである。概ね柱筋の通りが良い建物である。主軸方位は、N-28°-Wを示す。

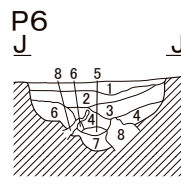
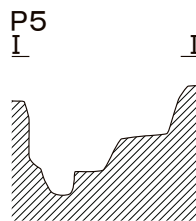
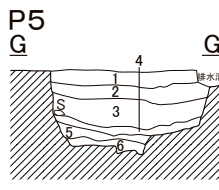
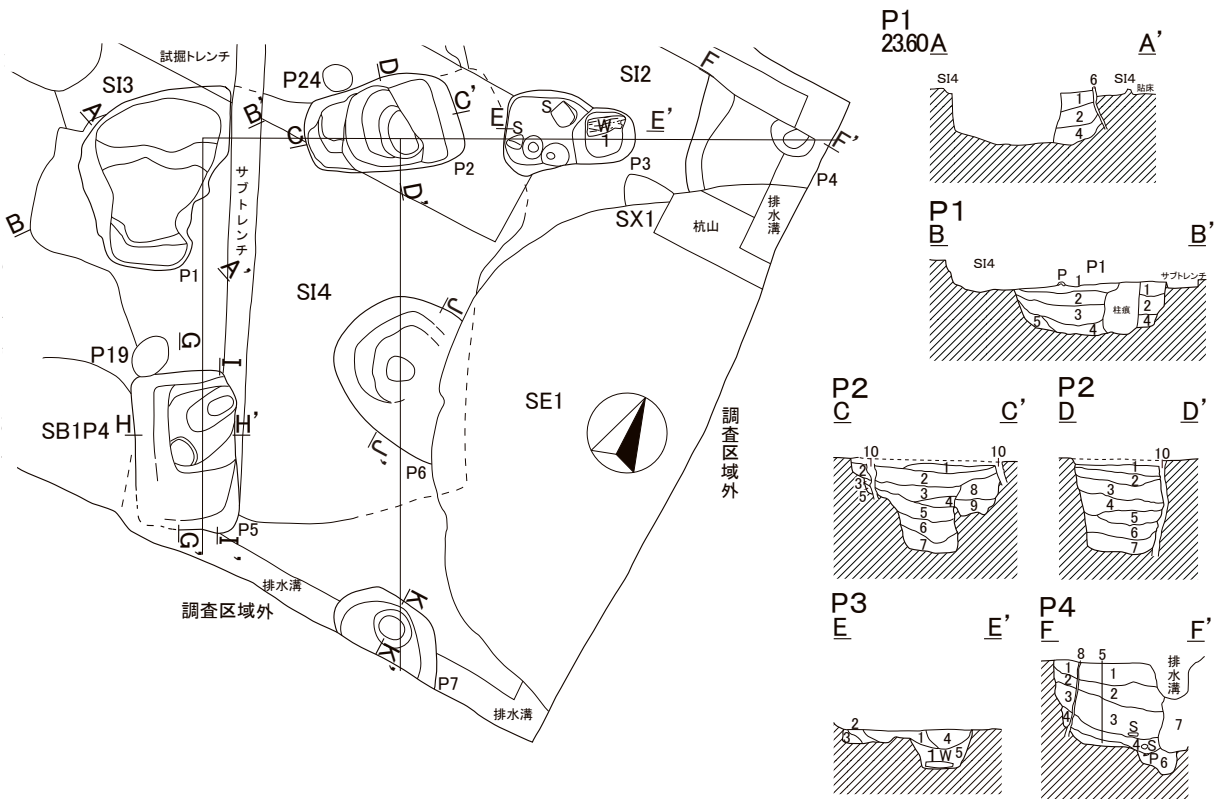
柱穴は、北西隅柱がややL字形を呈する以外は隅丸長方形の掘方である。また、東柱の掘方は楕円形を呈する。P 1は南北に長いL字形の掘方で、南北軸1.36m、東西軸1.22m、深さ0.43mを測る。P 2は東西に長い隅丸長方形の掘方で、東西が浅く中央部が深い逆凸型の断面形であり、長軸1.22m、短軸0.76m、深さ0.74mを測る。P 3も東西に長い隅丸長方形の掘方で、長軸0.95m、短軸は最大で0.65mを測り、深さは最下部のみの検出であったため詳細は不明であるが、東側が1段深くなる2段の断面形である。P 4は、南部を第1号井戸跡に切られ、北部は調査区域外であるため詳細は不明であり、検出残存東西長1.12m、深さは東寄りにある柱沈下の柱痕跡箇所で88cmを測る。P 5は南北に長い隅丸長方形の掘方で、南部がやや浅く中央部が柱沈下による柱痕跡により深い断面形であり、長軸1.26m、短軸0.82m、最深0.72mを測る。次に東柱の柱穴は、P 6が北西-南東方向に長い楕円形の掘方と推定され、東部が第1号井戸跡に切られていることから残存長軸が最大で0.96m、短軸は1.13m、深さは最深部で54cmを測る。P 7は南北に長い楕円形の掘方と推定され、南部が調査区域外となっていることから残存長



第37図 諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡出土遺物

第14表 諏訪木遺跡第1・2号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第37図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器 器台	—	残存高 2.10	—	AEGKMNO	B	灰黄褐色	坏部と台部の 接合部 破片	外面：縦位及び斜位のヘラミガキ。スカシ孔2か所残存（4方向か）。古墳前期。 SB1またはSB2のP3出土。
2	土師器 甕	—	—	—	ADEIJL	A	外面：褐色、褐灰色 内面：にぶい褐色、 褐灰色	胴部下半 破片か	台付甕か。 胴部外面：刷毛目。古墳前期。 SB1またはSB2のP2出土。
3	土師器 甕	—	—	—	ADEGN	B	にぶい褐色	把手部	胴部へ接続のための基部残存。 古墳後期。 SB1またはSB2のP2出土。



土層説明 (A-A', B-B')

SB3・P1

- | | |
|----------|---------------------|
| 1 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子少量含 |
| 2 黒褐色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土微粒子わずか含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子非常に多く含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子少量含 |
| 5 黒褐色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 6 噴砂 | |

土層説明 (C-C', D-D')

SB3・P2

- | | |
|----------|----------------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 2 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子・微粒子少量含 |
| 3 青灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子・微粒子若干含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、炭化物粒わずか含 |
| 5 黒色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土ブロック小わずか含 |
| 6 黒色粘土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 7 黒色粘土 | 灰白色粘質土ブロック大小多量含 |
| 8 灰白色粘質土 | 黄灰色粘質土ブロック大小若干含 |
| 9 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小わずか含 |
| 10 噴砂 | |

土層説明 (E-E')

SB3・P3

- | | |
|-------------|----------------------------------|
| 1 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干含 |
| 2 暗黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子少量含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 4 オリーブ黒色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干含 |
| 5 オリーブ黒色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、明青灰色粘土粒子若干、柱痕または礎板木片含 |

土層説明 (F-F')

SB3・P4

- | | |
|----------|---|
| 1 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小多量、焼土粒・炭化物粒若干含 |
| 2 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック・粒子少量、灰白色シルト粒子ごくわずか、炭化物粒若干含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小・粒子少量、焼土塊・粒、炭化物粒若干(下層付近に)、礫大含 |
| 4 黄灰色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土ブロック大小若干含 |
| 5 灰色粘土 | 灰白色粘質土ブロック大小多量含 |
| 6 黒褐色粘土 | 灰白色粘質土ブロック若干、土器含 |
| 7 攪乱 | |
| 8 噴砂 | |

土層説明 (G-G', H-H')

SB3・P5

- | | |
|-------------|---------------------------------|
| 1 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小・粒子若干、黒褐色粘質土ブロック小若干含 |
| 2 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子・微粒子多量含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小・粒子多量、灰色粘質土ブロック若干含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 粘性強い、灰白色粘質土粒子わずか含 |
| 5 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小若干含 |
| 6 黒褐色粘土 | 灰白色シルトブロック小・粒子わずか含 |
| 7 オリーブ黒色粘質土 | 若干シルト質 |

土層説明 (J-J')

SB3・P6

- | | |
|------------|--|
| 1 黒褐色粘質土 | 灰白色シルト粒子ごくわずか、灰白色粘質土粒子ごくわずか、マンガ粒・焼土粒わずか含 |
| 2 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小・粒子少量、酸化鉄若干含 |
| 3 黒褐色粘質土 | 粘性やや強い、灰白色粘質土ブロック大小少量含 |
| 4 黒褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小少量、灰白色シルトブロック大わずか含 |
| 5 灰白色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック |
| 6 暗灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子若干、灰白色シルト粒子わずか含 |
| 7 オリーブ黒色粘土 | 灰白色シルト粒子わずか含 |
| 8 噴砂 | |

土層説明 (K-K')

SB3・P7

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック多量含 |
| 2 黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック大小多量含 |
| 3 暗黄灰色粘質土 | 灰白色粘質土粒子少量含 |
| 4 褐灰色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小・粒子若干含 |



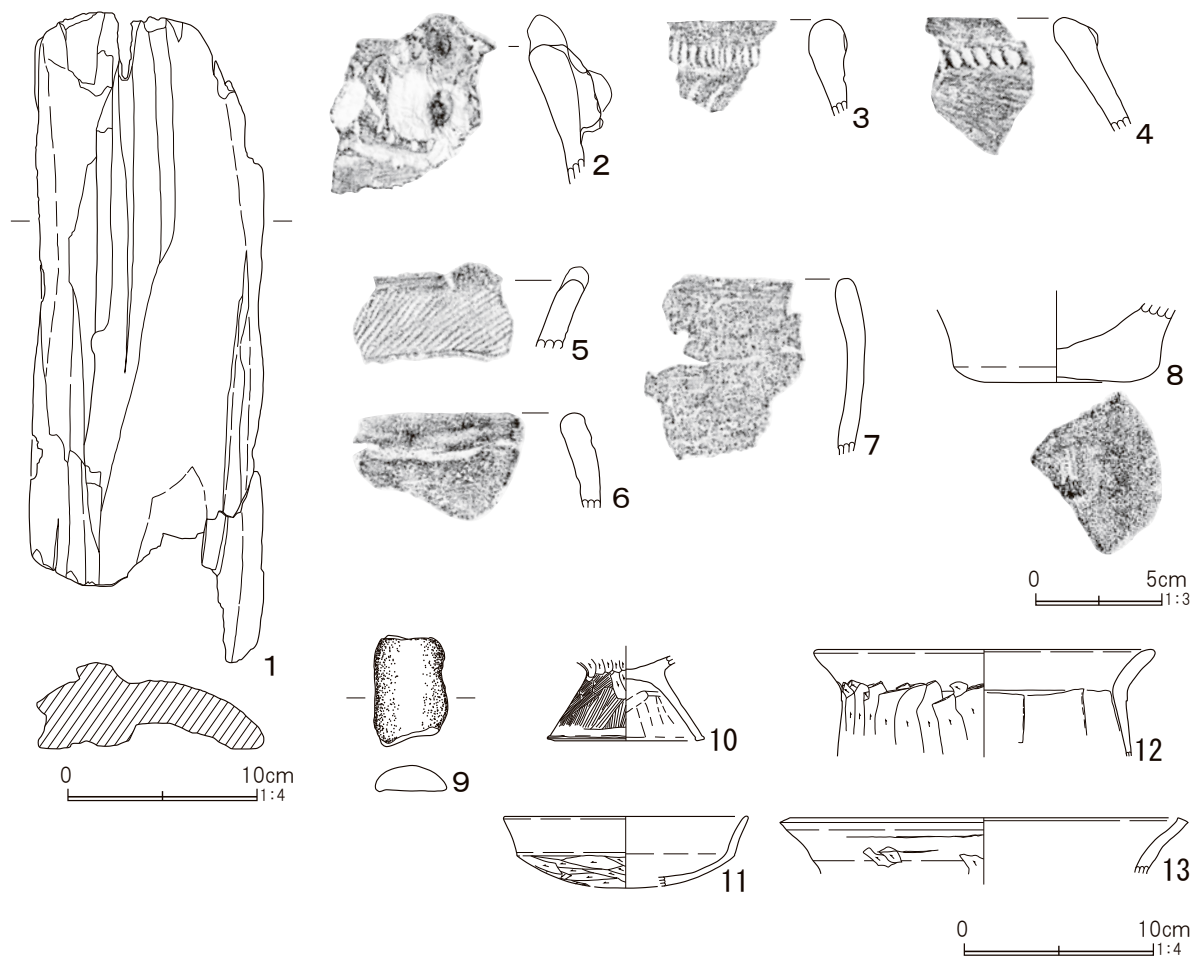
第38図 諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡

軸が最大で0.63m、短軸は0.74mを測り、深さは53cmを測る。

埋土は、いずれの柱穴においても概ねレンズ状または水平に堆積していた。柱痕跡は、P1の土層断面観察から、P2～5・7においては柱沈下による柱痕跡（柱のあたり）が確認されたが、柱穴P7では明瞭に確認できなかった。

出土遺物は、P1で土師器坏・甕・台付甕、P3で柱材と思われる板状材、P5で土師器坏・甕のほか縄文土器深鉢形土器、磨製石剣、P6・7で縄文土器深鉢形土器が検出できた。P1の土師器坏・甕は古墳時代後期、台付甕は古墳時代前期、P5の土師器坏・甕は古墳時代後期に所属するもので、いずれも重複する古墳時代前期の第2・3号竪穴建物跡及び古墳時代後期の第4号竪穴建物跡からの流れ込みと考えられる。また、縄文土器深鉢形土器、磨製石剣についても流れ込みの遺物と判断される。

時期は、いずれの柱穴からの出土遺物では判断に乏しく、重複する第4号竪穴建物跡との切り合い関係や主軸方位をほぼ同じにする第2号掘立柱建物跡から、第2号掘立柱建物跡と同じ9世紀代と考えられる。また、弘仁9年（818）の大地震によるものと考えられる墳砂が、土層断面観察から柱穴のP1・P2・P4・P6の床面及び埋土を貫く状況であったことから、その時点以降には建物として機能していなかったとも考えられる。



第39図 諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡出土遺物

第15表 諏訪木遺跡第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第39図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	木製品 用途不明製品	残存長34.50 最大幅12.10 最大厚4.40							湾曲した長方形の板状材。柱材か。木取：斜め。 P3出土。
2	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	ABDEGIM	B	外面：褐灰色 内面：にぶい橙色	口縁部破片	口縁部に隆帯の紐線文、端部に斜位及び縦位の刺突文。口縁部に縦長の突起が付く。安行2式か。P6出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
3	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	DEHJM	B	浅黄橙色	口縁部破片	口縁部の隆帯による紐線文に点刻。安行3a式か。 P6出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
4	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	AEJM	B	明赤褐色	口縁部破片	紐線文土器。 口縁部紐線文に刺突文。安行3a式。P7出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
5	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	AEGJLMN	B	橙色	口縁部破片	平縁。口縁部の横位の沈線文で区画された箇所はLR単節縄文。B突起の片方のみ残存。安行3b式。P6出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
6	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	ADHIJM	B	にぶい橙色	口縁部破片	平縁か(砲弾形)。沈線による杵状区画文か。安行3b式か。 P7出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
7	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	DEGKM	B	外面：にぶい赤褐色、 灰褐色 内面：にぶい褐色	口縁部破片	無文の粗製土器。安行3c式。 P6出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
8	縄文土器 深鉢形土器	—	残存高 2.90	(8.20)	ABEGHI	B	明赤褐色、 にぶい橙色	底部30%	P7出土。 縄文時代後・晩期遺物包含層から流れ込み。
9	磨製石剣?	最大長5.8 最大幅3.9 最大厚1.3 重量40g						上・下端、 下半欠損	花崗岩製。 P5出土。
10	土師器 台付甕	—	残存高 4.10	(8.30)	ABIN	B	橙色、黒褐色	台部60%	外面：胴部接続付近ヘラケズリ、 他は刷毛目、端部はヨコナデ。 内面：ナデ(横・斜・縦位)。 古墳前期。 P1出土。 SI2またはSI3から流れ込み。
11	土師器 坏	(12.80)	残存高 3.70	—	BEGKM	B	橙色	20%	口縁部外面～内面：ヨコナデ。 底部外面：ヘラケズリ。 古墳後期(6C後半)。 P1出土。 SI4から流れ込み。
12	土師器 甕	(17.60)	残存高 5.60	—	ABDJMO	A	にぶい黄橙色	口縁部～ 胴部上半 30%	口縁部内外面：ヨコナデ。 胴部外面：ヘラケズリ、内面 横位のヘラナデ。古墳後期。 P1出土。 SI4から流れ込み。
13	土師器 甕	(20.50)	残存高 2.80	—	AHJKM	A	明赤褐色	口縁部20%	口縁部内外面：ヨコナデ、一部 にヘラケズリ。粘土輪積痕あり。 古墳後期。 P1出土。 SI4から流れ込み。

(3) 土坑

第1号土坑 (第40図)

調査区の北西端に位置する。C-1グリッド内にある。第3号土坑と重複関係にあり、本遺構が第3号土坑を切っている。

規模は、北部及び西部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸0.76m、検出短軸0.50mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で72cmを測る。床面は、南寄りにピット状に落ち込む箇所がある。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、縄文土器深鉢形土器のほか土師器細片が検出できたが、図示できるものではなかった。

時期は、出土遺物からは時期が特定できず、詳細不明である。

第2号土坑 (第40図)

調査区の北西部に位置する。B-1グリッド内にある。第1号掘立柱建物跡、第6号土坑、第14号ピットと重複関係にあり、本遺構がいずれの遺構にも切られている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第1・2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、重複関係にある遺構に切られ詳細不明であるが、検出残存長軸0.40m、短軸0.38mを測る。平面プランは、隅丸方形を呈すると推定される。深さは、土層断面観察から14cmを測る。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は不明であるが、第6号土坑が弥生時代中期末以降から同後期以前までの時期以前を示すことから、それ以前と考えるのが妥当である。

第3号土坑 (第40図)

調査区の北西端に位置する。C-1グリッド内にある。第1号土坑と重複関係にあり、本遺構が第1号土坑に切られている。

規模は、北部及び西部が調査区域外となっており、また第1号土坑に切られていて詳細不明であるが、検出長軸1.20mを測り、短軸は不明である。平面プランは、プランが確認できた箇所不整形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で40cmを測る。床面は、南部が深く、北部が浅く平坦なものである。

埋土は、ややレンズ状の水平堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

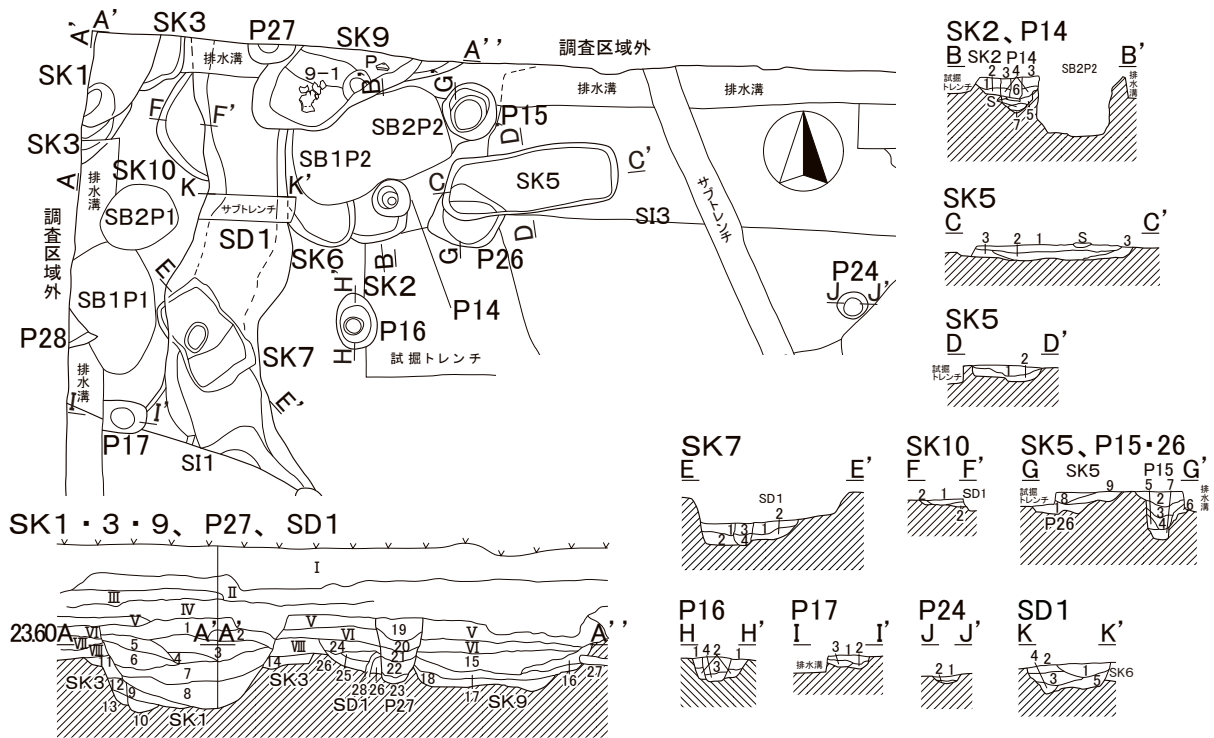
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、不明である。

第4号土坑 (第41・42図、第16表)

調査区の南西端に位置する。C-2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡と重複関係にあり、本遺構が第1号竪穴建物跡を切っている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第1・2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、南部及び西部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸0.86m、検出短軸0.49mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所やや不整形な隅丸長方形を呈する。深さは、土層



土層説明(A-A'-A'')

- I 表土【攪乱】
- II 暗灰色土
- III 黄灰色土
- IV 黄灰色土
- V 褐灰色粘質土
- VI 灰色土
- VII 灰色粘質土
- VIII 灰色粘質土

- SK1
 - 1 黄灰色粘質土
 - 2 黒褐色粘質土
 - 3 灰色粘質土
 - 4 灰色粘質土
 - 5 灰色粘質土
 - 6 黒褐色粘質土
 - 7 オリーブ黒色粘質土
 - 8 オリーブ黒色粘質土
 - 9 灰色粘土
 - 10 暗灰色粘土

- SK3
 - 11 灰色粘質土
 - 12 黒褐色粘質土
 - 13 黒褐色粘質土
 - 14 灰色粘質土

- SK9
 - 15 褐灰色粘質土
 - 16 黒褐色粘質土
 - 17 黒褐色粘質土
 - 18 黒褐色粘質土

- P27
 - 19 灰黄褐色粘質土
 - 20 褐灰色粘質土
 - 21 黒褐色粘質土
 - 22 暗褐色粘質土
 - 23 黒褐色粘質土

- SD1
 - 24 黒褐色粘質土
 - 25 灰色粘質土
 - 26 褐灰色粘質土

- 27 灰黄褐色粘質土
- 28 噴砂

土層説明(B-B')

- SK2
 - 1 褐灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土

- P14
 - 3 褐灰色粘質土
 - 4 黄灰色粘質土
 - 5 暗灰色粘質土
 - 6 黒褐色粘質土
 - 7 黒褐色粘質土

土層説明(C-C', D-D')

- SK5
 - 1 褐灰色粘質土
 - 2 灰黄色粘質土
 - 3 黒褐色粘質土

土層説明(E-E')

- SK7
 - 1 黒褐色粘質土
 - 2 オリーブ黒色粘質土
 - 3 オリーブ黒色粘質土
 - 4 黒色粘土

土層説明(F-F')

- SK10
 - 1 灰色粘質土
 - 2 褐灰色粘質土

土層説明(G-G')

- P26
 - 1 灰白色粘質土
- P15
 - 2 褐灰色粘質土
 - 3 黒褐色粘質土
 - 4 黒褐色粘質土
 - 5 黒褐色粘質土
 - 6 灰色粘質土
 - 7 黒色粘質土

SK5

- 8 褐灰色粘質土
- 9 黒褐色粘質土

土層説明(H-H')

- P16
 - 1 褐灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 褐灰色粘質土
 - 4 黒褐色粘質土

土層説明(I-I')

- P17
 - 1 灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 灰色粘質土

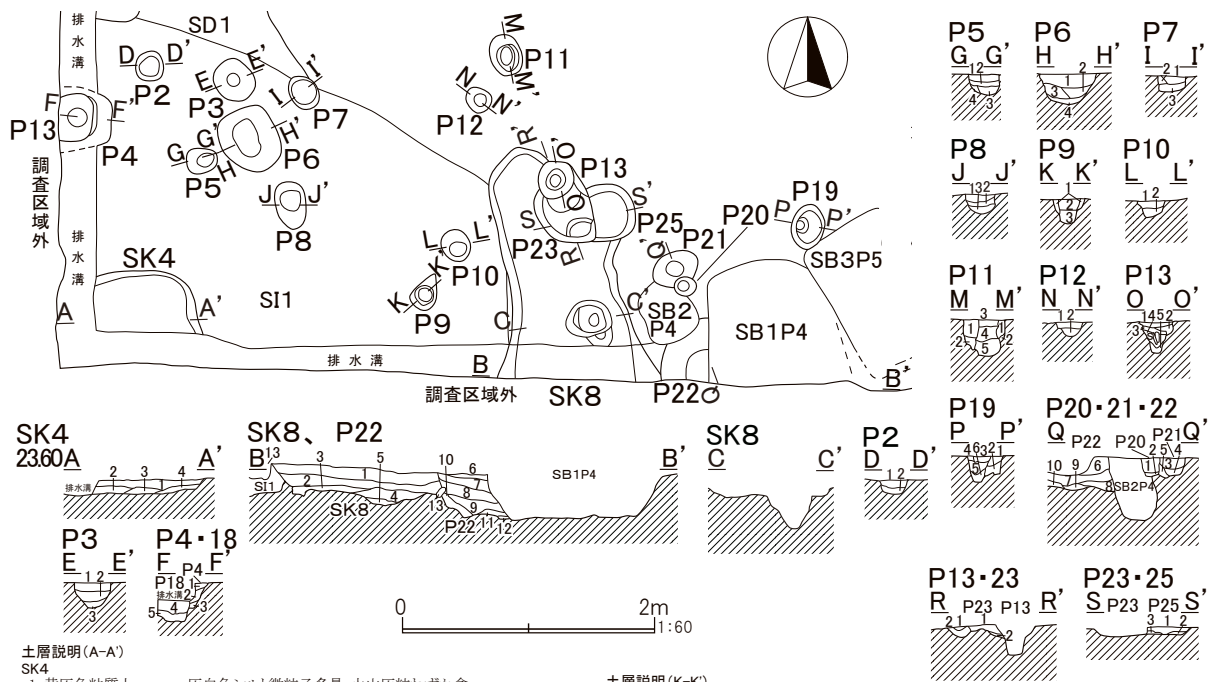
土層説明(J-J')

- P24
 - 1 黒褐色粘質土
 - 2 灰色粘質土

土層説明(K-K')

- SD1
 - 1 黄灰色粘質土
 - 2 灰色粘質土
 - 3 灰色粘質土
 - 4 褐灰色粘質土
 - 5 灰色粘質土

第40図 諏訪木遺跡第1～3・5～7・9・10号土坑、第14～17・24・26～28号ピット、第1号溝跡



<p>土層説明(A-A')</p> <p>SK4</p> <p>1 黄灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 灰色粘質土 4 灰色粘質土</p> <p>土層説明(B-B')</p> <p>SK8</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 褐灰色粘質土 3 黒褐色粘質土 4 黄灰色粘質土 5 灰色粘質土</p> <p>P22</p> <p>6 灰色粘質土 7 黒褐色粘質土 8 褐灰色粘質土 9 黄灰色粘質土 10 褐灰色粘質土 11 黄灰色粘質土 12 黄灰色粘質土 13 攪乱</p> <p>土層説明(D-D')</p> <p>P2</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土</p> <p>土層説明(E-E')</p> <p>P3</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 黒褐色粘土</p> <p>土層説明(F-F')</p> <p>P4</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 暗灰色粘質土 3 黒色粘質土</p> <p>P18</p> <p>4 オリーブ黒色粘質土 5 黒色粘質土</p> <p>土層説明(G-G')</p> <p>P5</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 黒褐色粘土 4 灰色粘土</p> <p>土層説明(H-H')</p> <p>P6</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 黄灰色粘質土 4 灰色粘質土</p> <p>土層説明(I-I')</p> <p>P7</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 黄灰色粘質土 3 灰色粘質土</p> <p>土層説明(J-J')</p> <p>P8</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 黒褐色粘土</p>	<p>灰白色シルト微粒子多量、火山灰粒わずか含 焼土粒わずか含 灰白色シルト微粒子若干含 若干シルト質、焼土粒わずか含</p> <p>灰白色粘質土ブロック大小わずか含 シルト質、灰白色シルト粒子わずか含 灰白色粘質土ブロック多量、灰白色シルトブロック少量含 若干シルト質、灰白色粘質土ブロック大小・粒子少量含 灰白色粘質土粒子若干含</p> <p>焼土粒ごくわずか含 灰白色粘質土微粒子わずか、土器含 若干シルト質、灰白色シルト微粒子多量含 灰白色粘質土粒子わずか、焼土粒わずか含 灰白色粘質土・微粒子多量、焼土粒・炭化物粒わずか含 粘性強い、灰白色粘質土粒子若干含 シルト質、灰白色粘質土粒子わずか含</p> <p>灰白色シルト粒子少量、焼土粒若干含 若干シルト質、褐灰色粘質土混</p> <p>灰白色シルトブロックわずか含 褐灰色粘質土混、焼土粒わずか含 若干シルト質、灰色粘質土粒子若干含</p> <p>灰白色シルト微粒子若干、焼土粒・炭化物粒わずか含 灰白色シルト粒子わずか含</p> <p>灰白色シルト微粒子わずか含 粘性強い、灰白色シルト粒子わずか含</p> <p>灰白色シルト粒子少量、焼土粒若干含 若干シルト質、褐灰色粘質土混 若干シルト質、灰色粘質土粒子若干含</p> <p>灰白色シルト粒子少量、焼土粒わずか含 若干シルト質、褐灰色粘質土混 若干シルト質、灰白色シルト微粒子わずか、焼土粒わずか含 灰白色シルト微粒子若干含</p> <p>灰白色シルト粒子少量、焼土粒わずか含 灰白色シルト微粒子わずか含 若干シルト質、灰白色シルト粒子わずか含</p> <p>灰白色シルト粒子少量、焼土粒若干含 褐灰色粘質土混 若干シルト質、灰色粘質土粒子若干含</p>	<p>土層説明(K-K')</p> <p>P9</p> <p>1 灰色粘質土 2 黒色粘質土 3 黒色粘土</p> <p>土層説明(L-L')</p> <p>P10</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土</p> <p>土層説明(M-M')</p> <p>P11</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 黄灰色粘質土 3 灰色粘質土 4 黄灰色粘質土 5 オリーブ黒色粘土</p> <p>土層説明(N-N')</p> <p>P12</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 黄灰色粘質土</p> <p>土層説明(O-O')</p> <p>P13</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 黄灰色粘質土 3 灰色粘質土 4 オリーブ黒色粘土 5 黒色粘質土</p> <p>土層説明(P-P')</p> <p>P19</p> <p>1 褐灰色粘質土 2 灰色粘質土 3 黒褐色粘質土 4 黒褐色粘質土 5 黒褐色粘質土 6 灰色粘質土</p> <p>土層説明(Q-Q')</p> <p>P20</p> <p>1 黄灰色粘質土 2 黄灰色粘質土</p> <p>P21</p> <p>3 褐灰色粘質土 4 灰色粘質土 5 黄灰色粘質土</p> <p>P22</p> <p>6 黄灰色粘質土 7 黄灰色粘質土 8 黄灰色粘質土 9 黄灰色粘質土 10 黄灰色粘質土</p> <p>土層説明(R-R')</p> <p>P23</p> <p>1 黒褐色粘質土 2 黄灰色粘質土</p> <p>土層説明(S-S')</p> <p>P25</p> <p>1 褐灰色シルト 2 黄灰色粘質土 3 黄灰色シルト</p> <p>灰白色シルト粒子多量含 灰白色シルト粒子わずか、炭化物含 灰色シルト微粒子わずか、炭化物含</p> <p>灰白色シルト粒子少量含 若干シルト質、褐灰色粘質土混</p> <p>シルト質、灰白色シルト粒子多量含 灰白色シルト粒子わずか含 灰白色粘質土微粒子わずか、焼土粒わずか含 灰白色粘質土粒子若干含</p> <p>灰白色粘質土ブロック大・粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含 灰白色シルト微粒子わずか、マンガン粒わずか、焼土粒わずか含</p> <p>灰白色粘質土ブロック大・粒子若干、焼土粒・炭化物粒若干含 灰白色シルト微粒子わずか、マンガン粒わずか含 灰白色シルトブロック・粒子多量含 円礫・角礫含 灰白色シルト粒子わずか含</p> <p>灰白色シルト粒子・微粒子若干含 若干シルト質、灰白色粘質土粒子若干含 灰白色シルトブロック・粒子多量含 灰白色シルト粒子わずか含 灰白色シルト粒子わずか含 灰白色粘質土粒子少量含</p> <p>灰白色シルト粒子若干、黒褐色粘質土粒子わずか、マンガン粒わずか、 焼土粒わずか含 灰白色粘質土粒子少量含</p> <p>酸化鉄含み灰黄褐色帯びる、灰白色粘質土粒子若干含 灰白色粘質土粒子わずか、酸化鉄わずか含 灰白色粘質土ブロック小・粒子少量、酸化鉄若干含</p> <p>若干シルト質、灰白色シルト微粒子多量含 灰白色粘質土粒子わずか、焼土粒わずか含 粘性強い、灰白色粘質土粒子わずか含 灰白色粘質土ブロック小・粒子多量含 粘性強い、灰白色粘質土粒子若干含</p> <p>灰白色シルト粒子わずか、焼土粒わずか含 シルト質、灰白色シルト粒子多量含</p> <p>灰白色シルト粒子多量、酸化鉄多量含 灰白色シルト粒子少量含 灰白色シルト微粒子多量含</p>
---	--	--

第41図 諏訪木遺跡第4・8号土坑、第2～13・18～23・25号ピット

断面観察から11cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

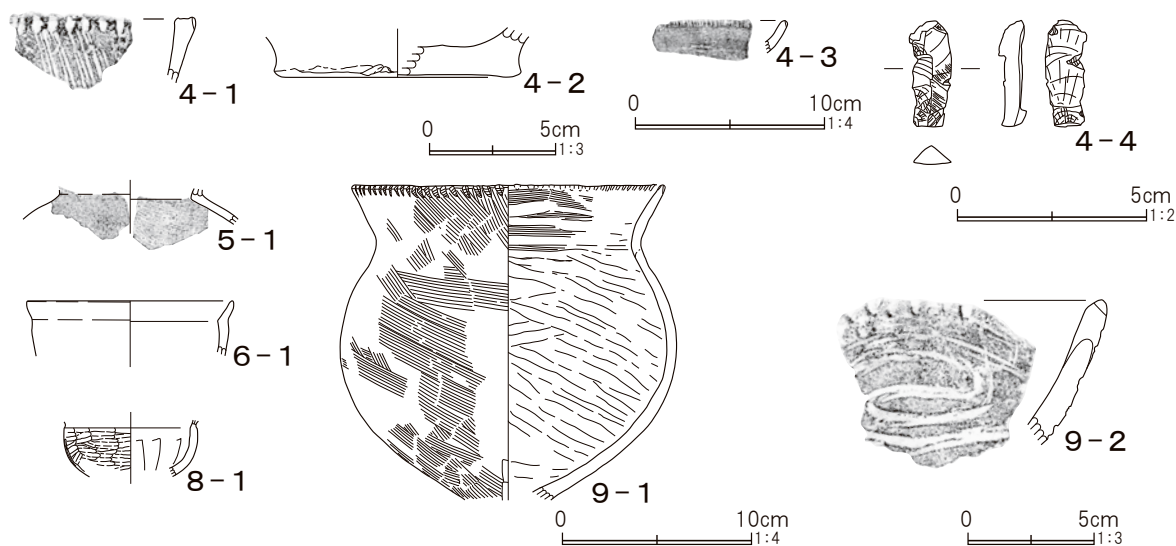
出土遺物は、縄文土器深鉢形土器、弥生土器甕・壺、土師器甕、黒耀石の剥片等が検出できた。

時期は、出土遺物からは時期が特定できず、詳細不明である。

第5号土坑（第40・42図、第16表）

調査区の北西部中央寄りに位置する。B-1グリッド内にある。第3号竪穴建物跡、第26号ピットと重複関係にあり、本遺構がいずれの遺構も切っている。

規模は、長軸1.41m、短軸0.50mを測る。平面プランは、隅丸長方形を呈する。深さは、確認面から



第42図 諏訪木遺跡第4～6・8・9号土坑出土遺物

第16表 諏訪木遺跡第4～6・8・9号土坑出土遺物観察表（第42図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
4-1	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	AEGHJ	B	黒褐色、灰褐色	口縁部破片	口唇部に刺突文。以下胴部に条線文。曾谷式か。
4-2	縄文土器 深鉢形土器	—	残存高 1.60	(9.80)	AEHJKN	B	橙色、にぶい褐色	底部20%	
4-3	土師器 甕	—	—	—	ACJ	A	黒色	口縁部破片	口唇部にキザミ。古墳前期。
4-4	石器剥片	最大長2.80 最大幅1.10 最大厚0.60 重量1.0							黒耀石製。
5-1	土師器 小型壺(柑)	—	残存高 1.60	頸部径 (7.60)	DHJM	B	にぶい黄橙色	頸部～胴部 上半破片	外面：ヘラミガキ。内面：胴部刷毛目、頸部ヨコナデ。古墳前期。
6-1	土師器 鉢	(10.80)	残存高 2.90	—	ADH	B	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	口縁部(10% 以下)～体 部破片	口縁部内外面：ヨコナデ。体部内面：ナデ、体部外面：磨滅のため調整不明。古墳前期。
8-1	土師器 壺	—	残存高 2.90	—	ADEJKM	B	明赤褐色	20%	体部外面：ヘラミガキ(横位・斜位)。体部内面：ヘラナデ(横位)。古墳前期。
9-1	弥生土器 台付甕	(16.40)	(16.60)	—	ADGLN	B	橙色、にぶい橙色、 灰黄褐色	40%	口唇部にキザミ。外面：刷毛目。内面：刷毛目後ミガキ状のヘラナデ。
9-2	縄文土器 浅鉢形土器	—	—	—	AGJLN	B	橙色、にぶい橙色	口縁部 破片	やや波状を呈する口縁。口縁波頂部に刻みをもつ横長の突起が付く。口縁部に沈線による入組文。安行3c式か。

13cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、土師器小型壺（埴）・高坏・甕・台付甕、須恵器坏等が検出できた。

時期については、土師器小型壺（埴）・高坏・甕・台付甕が古墳時代前期、土師器甕が古墳時代後期、須恵器坏が9世紀後半と判断され、また古墳時代前期と考えられる第3号竪穴建物跡を切っていることから、図示した土師器小型壺（埴）は第3号竪穴建物跡からの混入と判断され、土師器甕が示す古墳時代後期または須恵器坏が示す9世紀後半に所属すると考えられる。

第6号土坑（第40・42図、第16表）

調査区の北西部に位置する。B-1グリッド内にある。第1号掘立柱建物跡、第2・9号土坑、第1号溝跡と重複関係にあり、本遺構が第2号土坑を切り、その他の遺構に切られている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第1・2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、重複関係にある遺構に切られ詳細不明であるが、検出残存長軸0.96m以上、短軸0.34mを測る。平面プランは、楕円形を呈すると推定される。

出土遺物は、土師器鉢等が検出できた。

時期は、出土遺物が古墳時代前期であるが、第1号溝跡が示す弥生時代中期末以前と考えるのが妥当である。

第7号土坑（第40図）

調査区の北西部に位置する。C-2グリッド内にある。第1号溝跡と重複関係にあり、第1号溝跡に切られている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第1・2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、長軸0.84m、短軸0.55mを測る。平面プランは、長方形を呈する。深さは、確認面から39cmを測るが第1号溝跡に切られている箇所は深さ17cmのみ残存している。床面は、ほぼ平坦であるが、中央部西寄りにピット状の落ち込みがある。

埋土は、特に下層が灰白色粘質土ブロック・粒子を多量に含む水平堆積であることから、人工的に埋め戻された可能性が考えられる。また、土層断面観察から中央部に下層まで貫くピット状の落ち込みを確認したことから柱痕跡の可能性も考えられる。

出土遺物は、土師器坏・甕等が検出できたが、図示できるものではなかった。

時期は、出土遺物が古墳時代後期であるが、第6号土坑と同様に第1号溝跡が示す弥生時代中期末以前と考えるのが妥当である。

第8号土坑（第41・42図、第16表）

調査区の南西部中央寄りに位置する。B-2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第13・22・23・25号ピットと重複関係にあり、第1号竪穴建物跡を切り、第13・22・23・25号ピットに切られている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第1・2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、南部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸1.87m、短軸残存最大長1.30mを測る。平面プランは、やや不整形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で27cmを測る。床面は、土層断面観察からやや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。また、南部寄りにピット状の落ち込みがある。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕等が検出できた。

時期は、出土遺物から古墳時代前期の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

第9号土坑（第40・42図、第16表）

調査区の北西部に位置する。B-1グリッド内にある。第1・2号掘立柱建物跡、第1号溝跡、第27号ピットと重複関係にあり、本遺構が第1号溝跡を切り、第1・2号掘立柱建物跡及び第27号ピットに切られている。

規模は、北部が調査区域外となっており詳細不明であるが、検出長軸0.97m、検出短軸0.71mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所やや不整形な楕円形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で32cmを測る。床面は、南部がやや浅いがほぼ平坦である。また、東寄りにピット状に落ち込む箇所がある。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、縄文土器深鉢形土器、弥生土器台付甕、土師器坏・甕等が検出できた。

時期は、複数の時期の出土遺物が見られるが、台付甕が示す弥生時代後期に所属すると考えておきたい。

第10号土坑（第40図）

調査区の北西部に位置する。C-1グリッド内にある。第1号溝跡と重複関係にあり、第1号溝跡に本遺構が切られている。

規模は、重複関係にある第1号溝跡に切られ詳細不明であるが、残存長軸0.88m、残存短軸0.39mを測る。平面プランは、プランが確認できた箇所隅丸方形を呈する。深さは、土層断面観察から最深で7cmを測る。床面は、土層断面観察からやや凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、検出できなかった。

時期は不明であるが、第1号溝跡が示す弥生時代中期末以前と考えるのが妥当である。

(4) ピット

ピットは、28基検出された。ピットの多くは調査区の西半部において検出され、特にその南半部の第1号竪穴建物跡、第8号土坑が検出された箇所に集中して分布していた。つまり、東半部の第2～3号竪穴建物跡等が検出された箇所では希薄な状況であったことから、これらのピットが、弥生時代中期には所在しなく、古墳時代前期～後期に第2～3号竪穴建物跡と同時に所在していた可能性を示唆する。実際、出土遺物の多くは古墳時代前期・後期のもので、次に平安時代の9世紀後半のものであり、これ以外の時期のものは僅かである。

なお、これらのピットの位置には規則性がほとんどなく、一部には柱穴とも考えられるものが見られるものの、掘立柱建物跡の柱穴の可能性は希薄である。

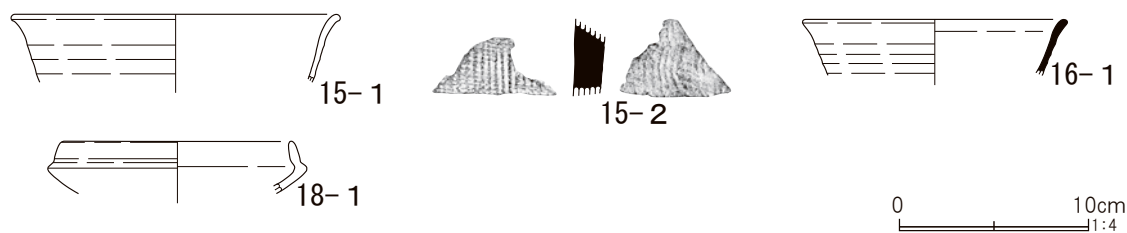
出土遺物については、検出できたピットは18基で、また検出された遺物は小破片で図示できたものはP15・16・18出土のものと僅かであった。よって、その僅かな出土遺物を頼りに、時期を特定せざるを

得ない。

以下、一覧表にて記述する（第40・41・43図、第17・18表）。

第17表 諏訪木遺跡ピット一覧表（第40・41図） ※ 〈 〉 残存値、() 復元値

番号	位置 (グリッド)	プラン	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	重複関係	備考
1	A-1	不明	—	—	—	なし	不明	SI3	
2	C-2	円形	25	23	11	土師器甕	古墳後期	SI1	
3	B・C-2	隅丸方形	34	29	20	土師器坏・甕・台付甕	古墳前期	SI1	
4	C-2	隅丸方形?	〈43〉	〈47〉	20	土師器甕	古墳後期	SI1、P18	
5	C-2	楕円形	27	19	16	土師器甕	古墳後期	SI1	
6	B・C-2	楕円形	55	46	23	縄文土器深鉢形土器、 弥生土器甕、 土師器甕・台付甕・壺・坏	不明	SI1	古墳前期・後期の出土遺物。
7	B-2	楕円形	29	21	13	土師器甕・壺	古墳前期	SI1	土師器壺に赤彩。
8	B-2	楕円形	39	25	15	土師器甕・壺	古墳前期	SI1	
9	B-2	三角形	30	18	19	縄文土器深鉢形土器、 土師器甕	不明	SI1	柱痕跡有り。
10	B-2	楕円形	26	21	13	土師器坏・甕	古墳後期	SI1	
11	B-2	楕円形	34	25	29	土師器壺・土師質土器坏	古墳前期	なし	柱痕跡有り。
12	B-2	楕円形	21	18	11	なし	不明	なし	
13	B-2	円形	30	30	24	縄文土器深鉢形土器、 土師器甕?	不明	SK8、P23	炭化材?出土。
14	B-1	円形	32	32	27	縄文土器深鉢形土器?、 土師器坏?・壺・台付甕・ 甕	古墳前期 または後期	SB1P2、SB2P2、 SK2	
15	B-1	円形	46	45	38	土師器台付甕・壺・甕、 須恵器坏・甕・壺	不明	なし	古墳前期・後期、9C後半の出土遺物。 土師器壺に赤彩。須恵器坏・甕は末 野産。
16	B-2	楕円形	46	32	20	土師器甕、須恵器坏	9C後半	なし	柱痕跡有り。須恵器坏は末野産。
17	C-2	隅丸方形?	〈35〉	〈25〉	11	土師器高坏?	古墳前期	SI1	土師器高坏に赤彩。
18	C-2	隅丸方形?	〈38〉	〈30〉	(30)	土師器坏	古墳後期	SI1、P4	
19	B-2	楕円形	38	25	20	なし	不明	SI4、SB3P5	柱痕跡有り。
20	B-2	円形	18	16	14	なし	不明	P21、SB2P4	
21	B-2	楕円形	40	30	16	なし	不明	P20、SB2P4	
22	B-2	円形?	〈51〉	〈39〉	28	なし	不明	SK8、SB1P4、 SB2P4	
23	B-2	楕円形	〈55〉	48	11	土師器坏	古墳後期	SK8・P13・P25	
24	B-1	円形	27	22	6	なし	不明	SI3	
25	B-2	隅丸方形?	〈32〉	46	6	なし	不明	SK8、P23	
26	B-1	隅丸方形	52	46	17	なし	不明	SI3、SK5	
27	B-1	楕円形?	〈38〉	〈17〉	51	なし	不明	SK9、SD1	
28	C-2	不明	〈32〉	〈22〉	36	土師器甕	古墳後期	SB1P1	



第43図 諏訪木遺跡第15・16・18号ピット出土遺物

第18表 諏訪木遺跡第15・16・18号ピット出土遺物観察表 (第43図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15-1	須恵器 壺	(17.00)	残存高 3.60	—	ABEL	A	暗青灰色	口縁部10%	末野産。 9C後半。
15-2	須恵器 甕	—	—	—	ABGL	A	外面：青灰色 内面：青灰色	胴部破片	外面：格子叩き。 内面：青海波文あて具痕。 末野産。
16-1	須恵器 坏	(13.90)	残存高 3.00	—	ABL	A	暗青灰色	口縁部10%	末野産。 9C後半。
18-1	土師器 坏	(12.00)	残存高 2.70	—	ABEJM	B	外面：にぶい黄橙色、 にぶい褐色 内面：にぶい褐色、 明赤褐色	10%	古墳後期(6C後半)。

(5) 溝跡

第1号溝跡 (第40・44図、第19表)

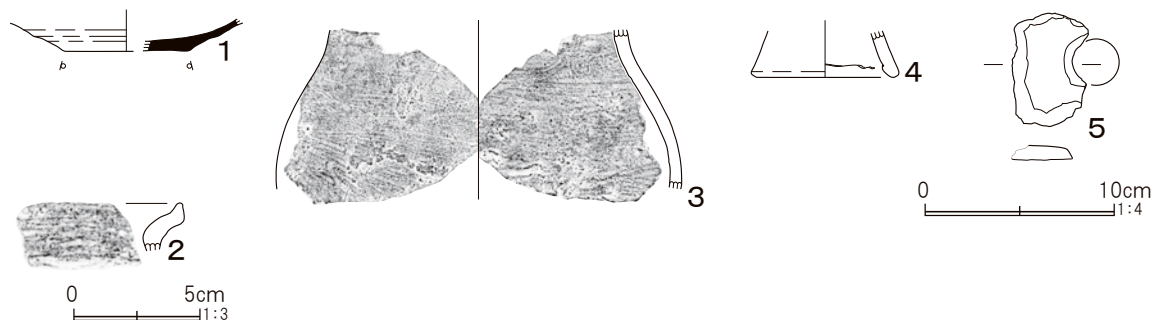
調査区の北西部を東西に走る。B・C-1・2グリッド内にある。第1号竪穴建物跡、第6・7・9・10号土坑、第17・27号ピットと重複関係にあり、本遺構が第6・7・10号土坑を切り、第9号土坑及び第17・27号ピットに切られている。

規模は、北部が調査区域外となり、南部が第1号竪穴建物跡に切られていることから、検出残存長3.52m、幅0.63~1.40mを測る。走行軸の方位は、ほぼ南北を示す。

断面形はやや崩れた逆台形状を呈し、深さは、確認面及び土層断面観察から20~23cmを測る。底面は、北部が最も深く、南に行くほどやや浅くなる。

埋土は、レンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。

出土遺物は、縄文土器注口土器、土師器甕・台付甕、須恵器皿、環状石斧等が出土した。



第44図 諏訪木遺跡第1号溝跡出土遺物

第19表 諏訪木遺跡第1号溝跡出土遺物観察表 (第44図)

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器 皿	—	残存高 1.50	(6.50)	ABDL	B	灰白色	底部25%	底部外面：回転糸切り。 末野産。 9C後半。
2	縄文土器 注口土器?	—	—	—	BEGMNO	B	にぶい褐色、橙色	口縁部破片	安行式か。
3	土師器 甕	—	残存高 8.40	—	BDHI	B	にぶい黄橙色	胴部上半 破片	外面上半：刷毛目(横位)、下 半：ミガキ(斜位)。内面上半： ヨコナデ、ミガキ状ナデ、下半： 刷毛目状ナデ及びナデ。 古墳前期。
4	土師器 台付甕	—	残存高 2.40	(7.80)	ADJ	A	にぶい橙色	台部破片	内外面：ヨコナデ。 古墳前期。
5	環状石斧	最大長6.00 最大幅3.90 最大厚0.80 重量10.0						穿孔部 約35%	粘板岩製。 欠損及び剥離が激しい。

時期は詳細不明であるが、重複関係から第1号竪穴建物跡が示す弥生時代中期末以前かつ第9号土坑が示すと考えられる弥生時代後期以前の時期と考えられることから、少なくとも弥生時代中期末以前と考えるのが妥当である。

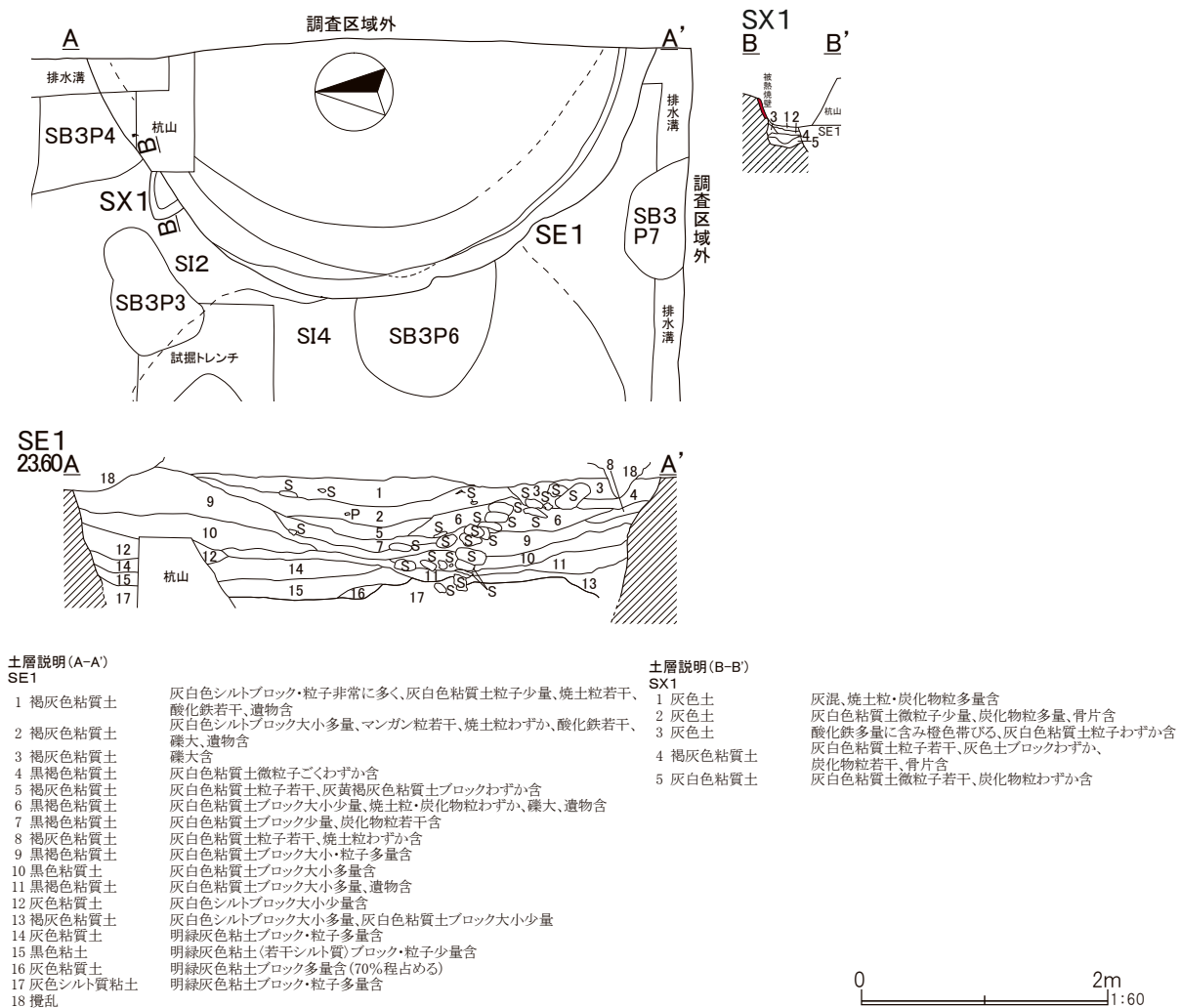
(6) 井戸跡

第1号井戸跡（第45・46図、第20表）

調査区の東半部東寄りに位置する。A-1・2グリッド内にある。第2・4号竪穴建物跡、第3号掘立柱建物跡、第1号火葬跡と重複関係にあり、本遺構がいずれの遺構も切っている。

規模は、東半部が調査区域外となっており、検出最大径4.65mを測る。平面プランは、ほぼ円形を呈すると考えられ、深さについては確認面から約1m掘り下げたが、湧水が激しく幾度となく壁面の崩落に見舞われ危険があったためそれ以上は掘り下げを行わなかった。

埋土は、レンズ状に堆積していることから、自然堆積であると考えられるが、大きく2時期（下層・中間層と上層）に亘って堆積した可能性が考えられる。また、堆積土等の状況は、確認した最も下層が



第45図 諏訪木遺跡第1号井戸跡、第1号火葬跡

概ね明緑灰色粘土ブロックを多量含む灰色粘質土・黒色粘土がほぼ水平に堆積していた。中間層は、概ね灰色粘質土ブロックを多量に含む黒褐色粘質土・褐灰色粘質土が南北掘方寄りでレンズ状に堆積し、その後中央部において、上層に概ね灰白色シルトブロックを含む褐灰色粘質土・黒褐色粘質土がレンズ状に堆積していた。

なお、中間層と上層の間、南寄り箇所では、長さ20～30cmを主体とする礫が石垣状に堆積していたのを確認した。これは、中間層が堆積した時点で壁の補強材で組まれた礫とも考えられ、その場合は中間層が堆積し埋まった時点以降も小規模な状態で井戸が機能していた可能性を示唆する。

断面形は、基本的には井筒状であるが、西端の一部ではややオーバーハングする箇所も見られた。

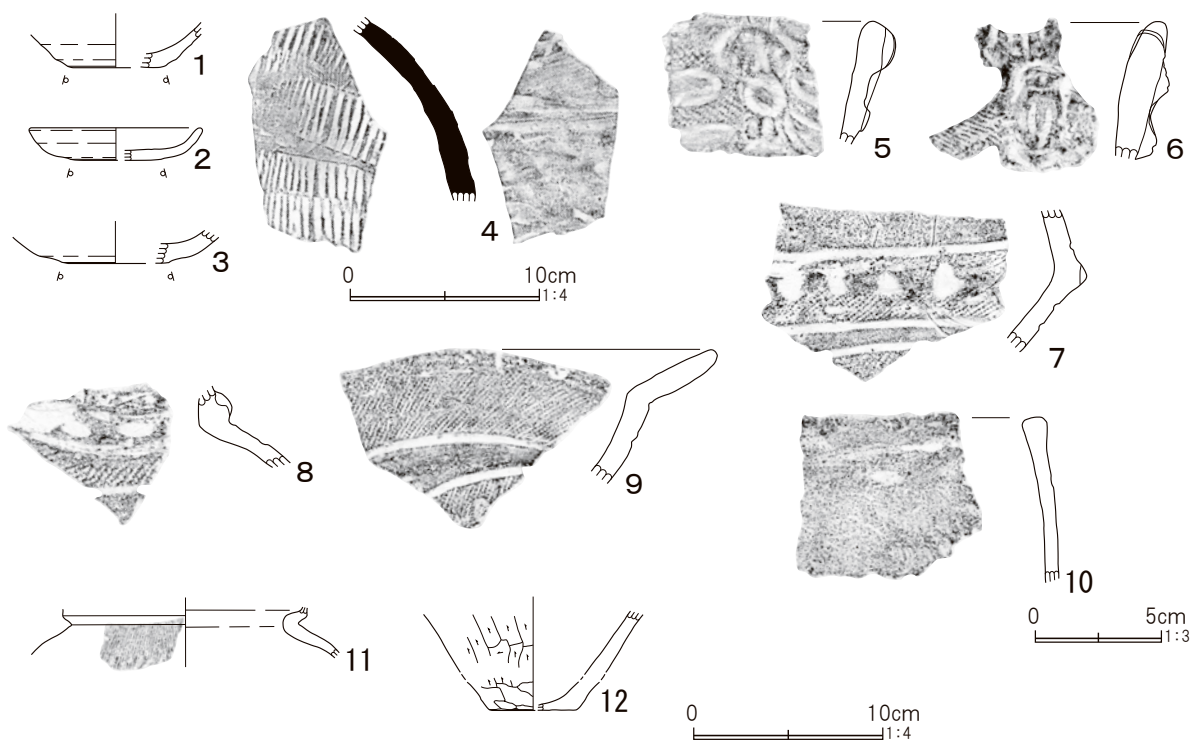
出土遺物は、土師質土器杯・皿、常滑産の陶器甕、須恵系土師質土器杯のほか、土師器台付甕・甕、縄文土器深鉢形土器等が検出できた。

時期は、重複する第3号掘立柱建物跡が示す9世紀前半以降であり、土師質土器杯・皿及び陶器甕が示す中世（15～16世紀）と考えられるが、10世紀前半と考えられる須恵系土師質土器杯が出土していることから、その時点では機能していたとも考えられる。なお、縄文時代後期・晩期の縄文土器深鉢形土器は、本遺構が当該期の遺物包含層を貫く形で形成されたことに起因して混入したものと、また土師器台付甕は古墳時代前期、土師器甕は古墳時代後期以降であることから、重複する第2・4号竪穴建物跡から混入したものと考えられる。

(7) 火葬跡

第1号火葬跡（第45図）

調査区の北東部に位置する。A-2グリッド内にある。第2号竪穴建物跡、第1号井戸跡と重複関係



第46図 諏訪木遺跡第1号井戸跡出土遺物

第20表 諏訪木遺跡第1号井戸跡出土遺物観察表（第46図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵系土師質土器 坏	—	残存高 1.80	(5.20)	ABCHM	B	橙色、浅黄橙色	底部20%	底部外面：回転糸切り。 10C前半。
2	土師質土器 皿	(9.00)	(1.70)	(4.80)	BDEI	A	橙色	25%	底部外面：左回転糸切り。 15～16C。
3	土師質土器 坏	—	残存高 1.40	(5.70)	ABCD	A	にぶい黄橙色	体部下半～ 底部破片	底部外面：回転糸切り。 15～16C。
4	陶器 甕	—	—	—	ABCN	A	外面：灰黄褐色、 黒褐色 内面：灰白色	胴部上半 破片か	外面に横位の平行叩き圧痕。 自然釉。 常滑産。中世。
5	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	BEGHIM	B	褐色、橙色	口縁部破片	平口縁。口縁部に帯縄文、磨消 手法で構成、RL単節縄文。突 起が付く。突起には縦長に刻み 4本。安行1式か。
6	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	EGJKM	B	黒褐色、橙色	口縁部破片	大波状口縁。波頂部に二頭状の 突起、刻みもつ。波頂部の口縁 の縦長の突起には頂部2か所に 横長の刻み、凹部には縦長の2 本の刻み。波頂部～波底部の口 縁にはRL単節縄文。安行3a式。
7	縄文土器 鉢形土器	—	—	—	ADEGIJ	B	外面：にぶい褐色、 橙色 内面：暗灰黄色	胴部破片	肩の張る部位に紐線文を配し刻 み施し、下端にはLR単節縄文。 他は入組文の磨消縄文。 安行3a式か。
8	縄文土器 注口土器？	—	—	—	AEHJKM	B	橙色、にぶい黄橙色	頸部～ 胴部上半 破片	頸部に凹みを伴う突起が付く。 胴部の横位沈線文間にLR単節 縄文。安行3a式か。
9	縄文土器 浅鉢形土器	(19.40)	残存高 5.30	—	ADGHJKL	B	にぶい黄橙色	口縁部～ 胴部上半 破片	口縁部にLR単節縄文。胴部は 磨消縄文を伴う入組文、LR単 節縄文。安行3b式。
10	縄文土器 深鉢形土器	—	—	—	ABD	B	外面：明赤褐色、橙色 内面：にぶい赤褐色、 灰褐色	口縁部破片	無紋の粗製土器。 安行3c式か。
11	土師器 台付甕 (S字状口縁)	頸部径 (12.00)	残存高 2.30	—	ADHJ	B	にぶい橙色、灰褐色	口縁部～ 胴部上半 破片	胴部外面に刷毛目。 古墳前期。
12	土師器 甕	—	残存高 5.00	(4.70)	ACDEGIN	A	灰褐色、橙色	胴部下半 ～底部 20%	胴部外面：ヘラケズリ、底部付 近：ヘラナデ、内面：ヨコナデ。 底部外面：指ナデ、内面：ナデ。 古墳後期～奈良・平安。

にあり、本遺構が第2号竪穴建物跡を切り、第1号井戸跡に切られている。また、直接の切り合いはないが、位置的には第3号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模は、東部の一部が未検出であり、南部が第1号井戸跡と重複しており、検出最大長軸0.40m、残存短軸0.25mを測る。平面プランは、残存部において隅丸の三角形状を呈する。深さは、土層断面観察から最深で40cmを測る。

埋土は、ほぼ水平堆積していることから、自然堆積であると考えられる。

本遺構は、西壁の一部に被熱して赤色化した焼壁を確認し、埋土に灰及び炭化物に混じり骨片を検出したことから火葬跡と判断した。

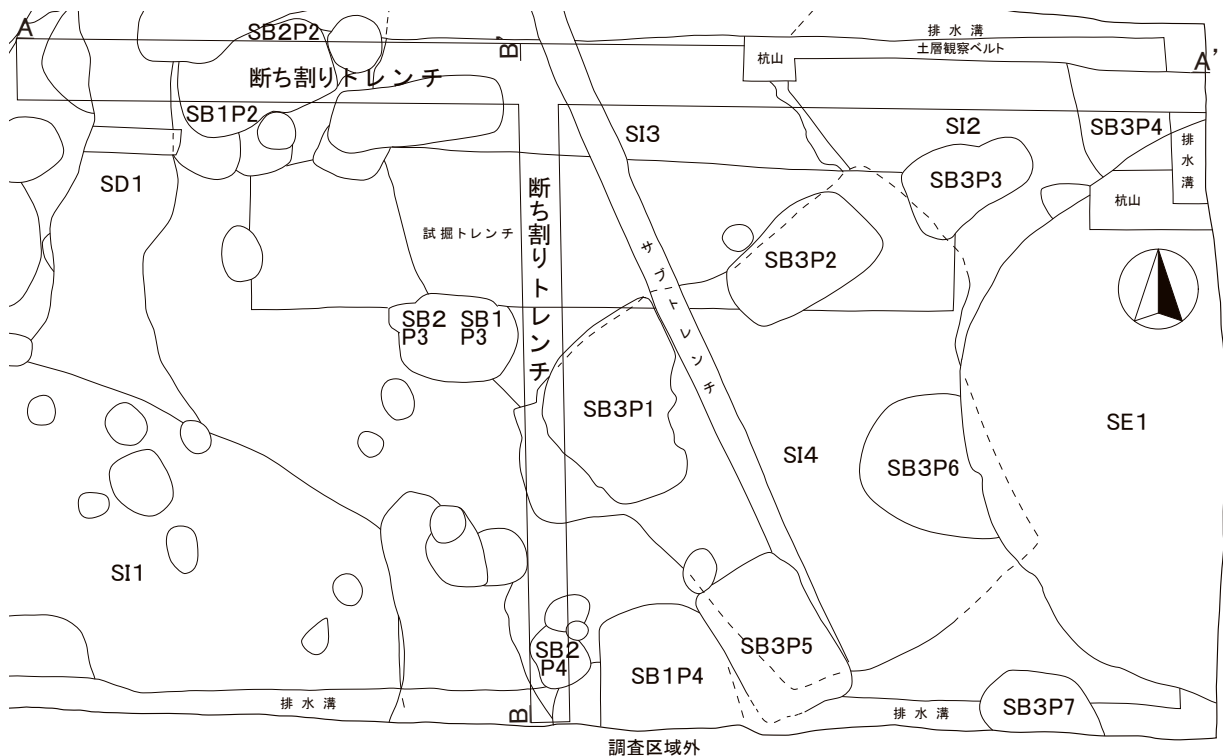
出土遺物は、検出できなかった。

時期は、第1号井戸跡を切っていることから概ね平安時代末～中世以前と考えられるが、第1号井戸跡の調査の際に、本遺構を認識せずに掘削してしまった可能性も否定できず、その場合は中世以降となる。

(8) 縄文時代後期・晩期遺物包含層

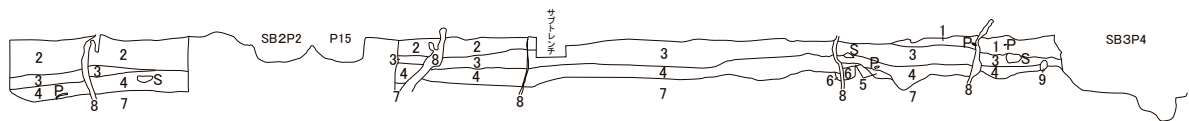
縄文時代遺物包含層は、第2号竪穴建物跡及び第1号井戸跡の調査の際に、縄文時代後期・晩期の土器片を多く検出したことから、A・B・C-1グリッドを東西に貫く形で断ち割りトレンチを、またこれに直交する形で、さらにB-1・2グリッドに断ち割りトレンチを掘削したところ、調査区全体に広がって存在することが判明した。なお、第2号竪穴建物跡検出箇所は、当初縄文土器が多数検出される性格不明遺構として捉えていたため、ほぼ全面を掘削して調査したが、その他は断ち割りトレンチ箇所でのみの調査である。

断ち割りトレンチは、東西が幅0.50m、長さ9.15m、南北が幅0.35m、長さ4.90mの僅かな面積の規模



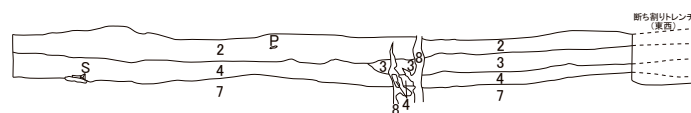
A2360

A'



B

B'



土層説明(A-A'・B-B')

縄文時代後・晩期遺物包含層断ち割り

- | | |
|----------|--|
| 1 灰色粘質土 | 褐色粘質土多量混、灰白色粘質土ブロック大小・粒子若干、土器含 |
| 2 灰黄色粘質土 | 酸化鉄多量、遺物含 |
| 3 灰色粘質土 | 酸化鉄多量に含みにぶい黄褐色帯びる、灰白色粘質土ブロック・粒子わずか、
焼土粒・炭化物粒若干、礫含 |
| 4 褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック小・粒子若干、灰色土ブロック若干、マンガン粒若干、遺物含 |
| 5 褐色粘質土 | 灰白色粘質土ブロック若干含 |
| 6 灰黄褐色粘土 | 酸化鉄多量に含みにぶい灰黄褐色帯びる |
| 7 灰黄色粘質土 | 若干シルト質、灰色粘土粒子少量、酸化鉄多量含 |
| 8 噴砂 | |
| 9 攪乱 | |

0 2m 1:60

第47図 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層

である。その土層は、上層から灰色粘質土、灰黄色粘質土、灰色粘質土、褐灰色粘質土の順に堆積し、その厚さは26～49cmで、西方向が厚みをもっていた。なお、これ以下の土層は、若干シルト質の酸化鉄を多量に含む灰黄色粘土であった（第47図）。

検出された縄文土器は、縄文時代後期中葉から晩期中葉まで、後期中葉の加曾利B式、後期後葉の高井東式、後期後葉～末の安行1・2式、晩期初頭～中葉の安行3a～安行3c式の精製・粗製深鉢形土器、鉢形土器、注口土器等であり、そのほか土製耳飾り、打製石斧、磨石兼敲石、石皿、砥石、石錘が見られる。

以下、土器は時期を追って、型式別、精製・粗製別、器種別に記述する。次に土製品、石器の順に記述し、石器については観察表を掲載する（第48～51図、第21表）。

1 高井東式精製土器

第48図1は、胴部が括れる大波状口縁深鉢形土器である。波頂部の突起部片であり、形態は容器（コップ）状を呈し、括れ部中央に貼瘤が付く。

第48図2は、口縁部が内傾し、胴部が括れる深鉢形土器である。口縁部片であり、口縁端部に沈線文、その直下に刺突列を巡らす。

2 後・晩期安行式精製土器

(1) 安行1式

第48図3～6は、平口縁深鉢形土器である。3～5はほぼ直立する口縁部片、6は胴部片である。いずれも縄文帯と沈線文が重畳し、3・5・6の縄文帯はRL単節縄文、4はLR単節縄文を施文する。

(2) 安行2式

第48図7・8は、大波状口縁深鉢形土器である。7は口縁部～胴部片、8は胴部片である。7は、縄文帯と横位の沈線文が重畳し、波頂部下に三角形区画の磨消縄文帯をもつ。波頂部下及び波底部口辺部に豚鼻状突起が付く。8は、磨消縄文帯を伴う弧線文と縄文帯をもち、弧線文と縄文帯の接線部及びその上部に3つの刻みをもつ横長の突起が付く。7・8とも縄文帯は、LR単節縄文を施文する。

9は、平口縁深鉢形土器である。口縁部にLR単節縄文の縄文帯、弧線文をもつ。また、口辺部に刻みをもつ横長の突起が付く。

10は、紐線文土器である。口縁部に紐線文が配され、縦長の突起が付く。

11は、帯縄文土器である。帯縄文は刻文帯である。

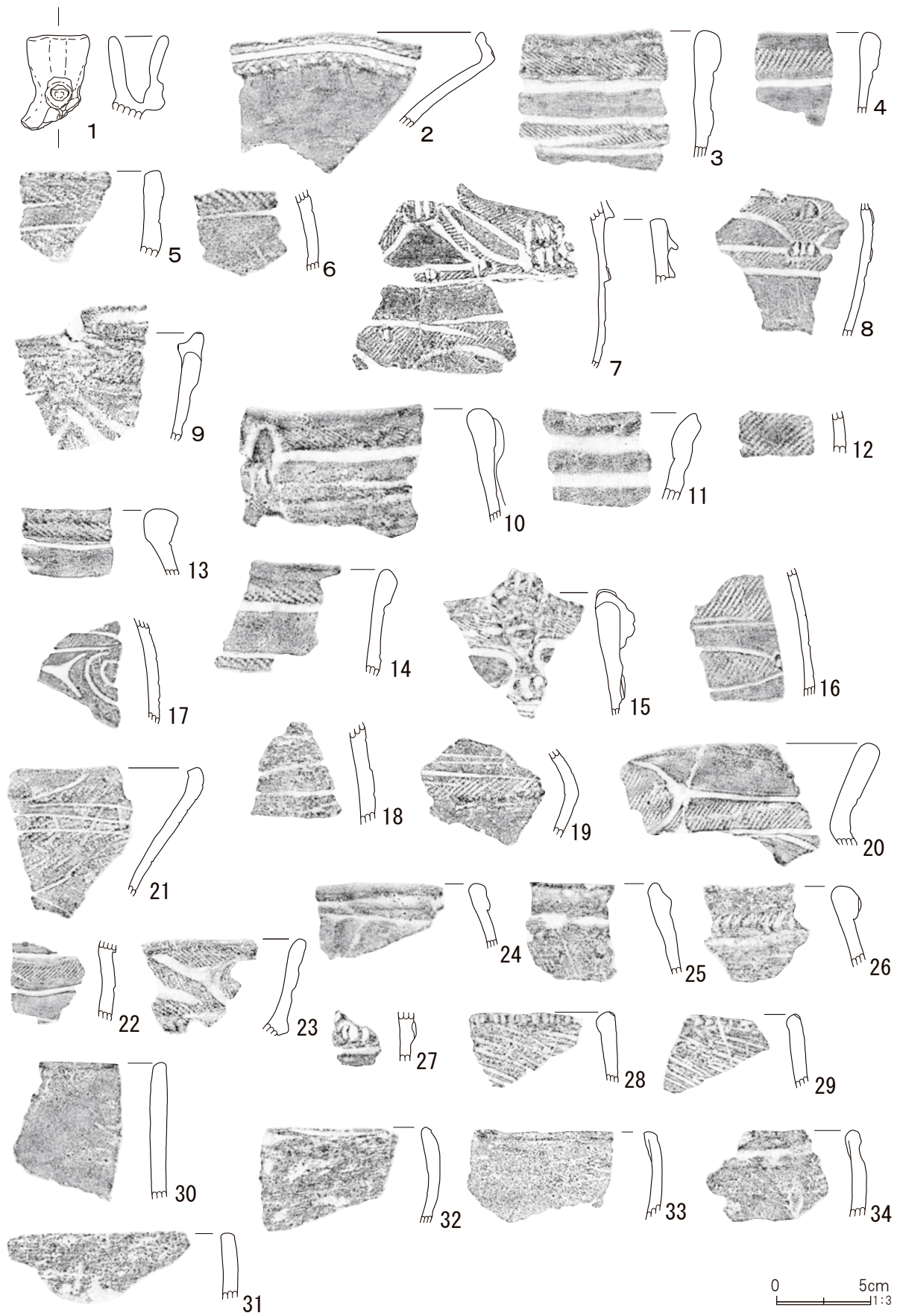
(3) 安行2～3a式

第48図12は、安行2～3a式と思われ、LR単節縄文を施文し、外面に赤彩が施されている。

(4) 安行3a式

第48図13・14は、紐線文土器である。沈線文と縄文を混じえた文様である。縄文は、RL単節縄文を施す。

第48図15～18は、平口縁深鉢形土器である。15は口縁部片であり、磨消縄文を伴うRL単節縄文を施す椀状区画文を施す。口唇部に刻みをもつ横長の突起が付く。また、口縁部には刻みをもつ縦長の突起が付く、その直下には豚鼻状の突起が付く。16～18は胴部片であり、16は頸部に帯縄文、胴部に磨消縄文を伴う入組文が施され、豚鼻状の突起が付く。17は、横位に入組文の磨消縄文、三叉文を施す。18は



第48図 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土器(1)

摩滅が激しく詳細は不明であるが、磨消縄文を伴う入組文を施しているか。

第48図19は、鉢形土器または注口土器である。胴部の最も張り出す箇所にL R単節縄文による縄文帯が施され、その上部は数条の横位の沈線文を施す。

(5) 安行3 b 式

第48図20～23は、平口縁深鉢形土器である。22の胴部片を除き口縁部片である。20は、磨消縄文を伴う入組文が施され、口唇部に突起が付くか。外面に赤彩を施す。21・22は、磨消縄文を伴う入組文を施す。縄文帯はいずれもL R単節縄文を施す。23は、磨消縄文を伴う入組文及び三叉文を施し、横長の突起が付くか。

3 後・晩期粗製土器

(1) 加曾利B式

第48図24・25は、口縁部に太い隆帯が巡る深鉢形土器である。いずれもやや内傾する口縁部片であり、隆帯が断面M字状になっていることから指頭圧痕が施されている。胴部は無文である。

(2) 安行2式

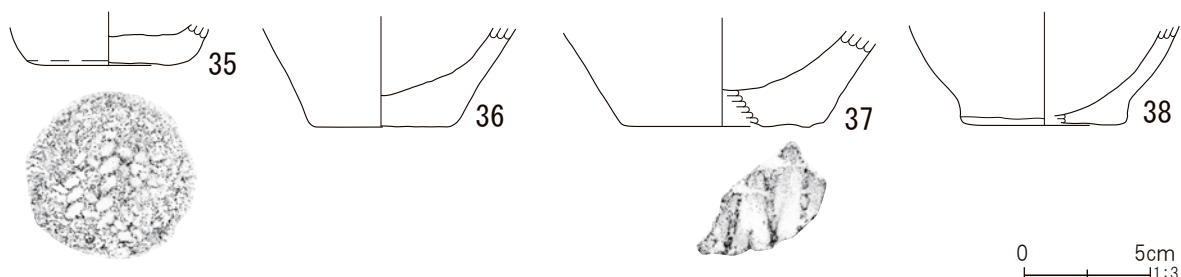
第48図26は、深鉢形の紐線文土器である。口縁部は肥厚で、点刻で構成される紐線文が配される。第48図27は、刻みをもつ横長の突起が付く胴部片である。

(3) 安行3 b 式

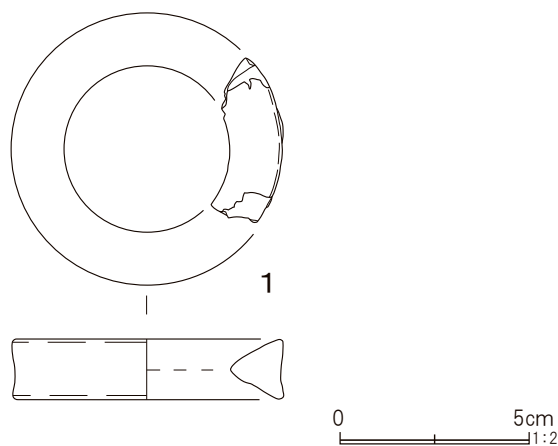
第48図28・29は、平口縁深鉢形土器である。口唇部に刻みが施され、胴部は条痕文を施す。

(4) 安行3 c 式

第48図30～34、平口縁深鉢形土器である。いずれも無文の口縁部片であり、33を除き横位のケズリを



第49図 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土器(2)



第50図 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土土製品

施す。30はほぼ直立、31～34はやや内傾する口縁である。また、33・34は端部を内側に折り返すものである。

4 底部

第49図35～38は、精製・粗製の深鉢形土器の底部片である。35は網代痕を残し、37は簀子状の平行する凹凸痕を残す。36・38は無文である。器形から形態を区別すると、35は円柱状を呈し、36・37は直線的であり、38は底部が出っ張るものである。

5 土製品

(1) 土製耳飾り

第50図1は、形状が滑車型で、無文の破片である。断面形は三角形を呈する。最大径7.2cm、内径4.4cmと推定され、高さは1.6cm、重量は10gを計る。

6 石器

第51図1・2は、打製石斧である。形状は、1が短冊形、2が分銅形である。石材は、1がホルンフェルス化した砂岩、2がホルンフェルス化または中間型の粘板岩である。1・2とも刃部を欠く。

第51図3は、磨石兼敲石である。片面、上端及び下端が平滑であり、擦痕と考えられる。また、石錘のように両側からの挟りが認められる。石材は、砂岩である。

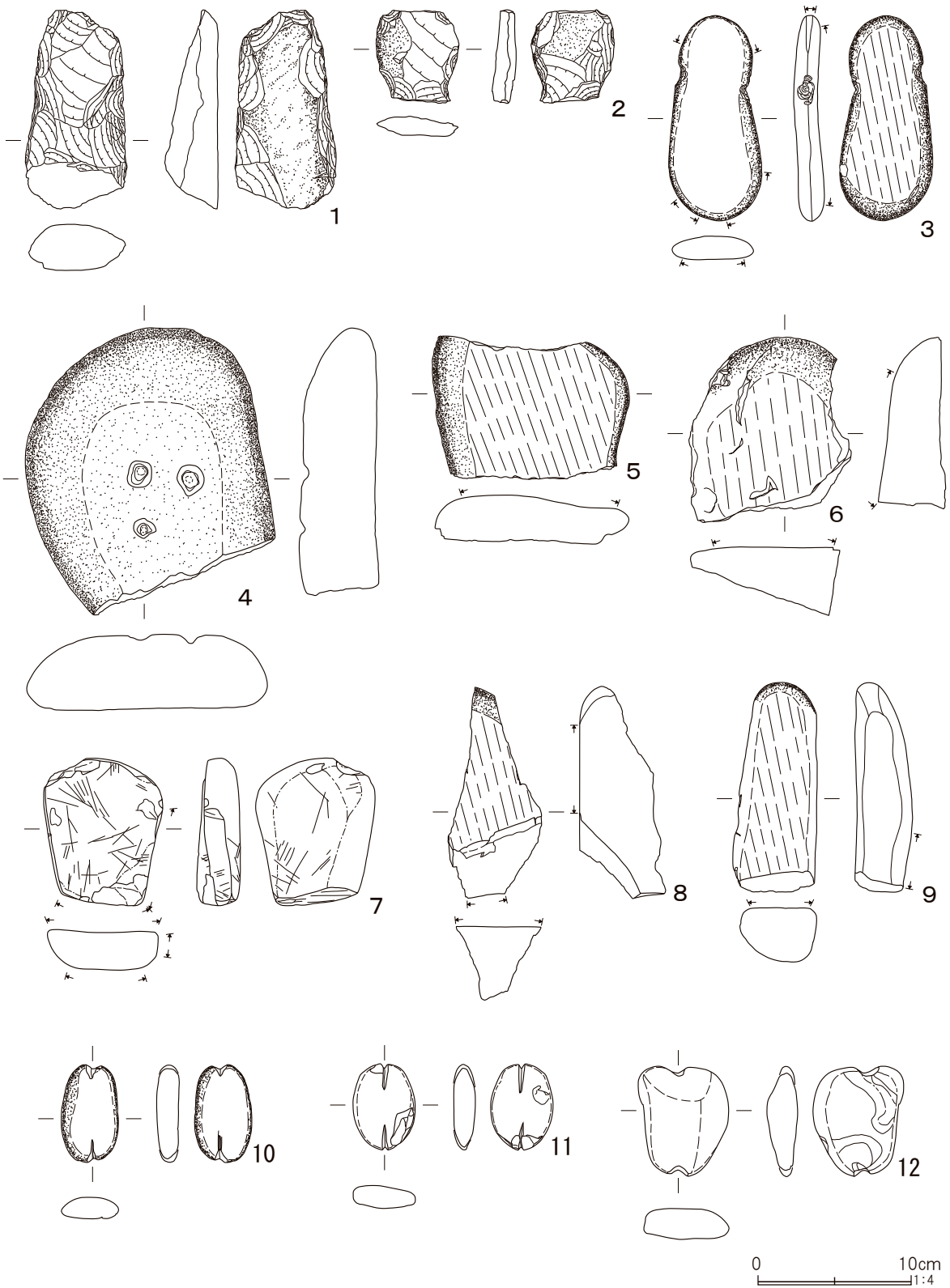
第51図4～6は、石皿である。4は凹みを3か所もつ。石材は、4・5が砂岩であり、6は火成岩の一種である。いずれも欠損するものである。

第51図7～9は、砥石である。形状は様々であり、7は権衡の権状、9は棒状である。石材は、7が凝灰質泥岩、9が泥岩、8がホルンフェルス化したものである。7は一部欠損するが、4面使用、擦痕が多数認められる。8は大きく欠損するもので、石皿と捉えることもできるか。9は一方端が欠損する。

第51図10～12は、石錘である。10・11は切目石錘で、両端を擦り切って縄掛け用の切込みをつくる。10には、一部縄による擦痕が残る。12は礫石錘で、縄掛け用に両端を欠く。石材は、10が砂岩、11が砂岩と泥岩の中間、12が泥岩である。いずれも完存またはほぼ完存である。

第21表 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土石器観察表 (第51図)

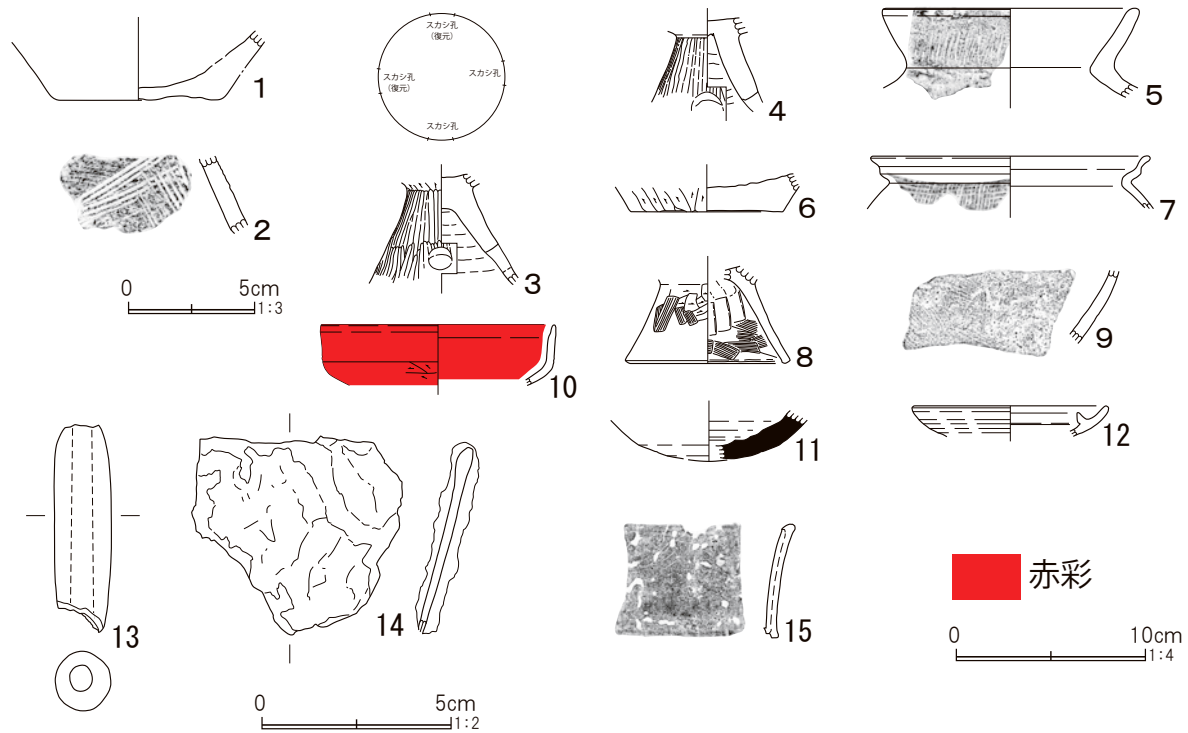
図版番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	出土地点
1	打製石斧	13.00	6.60	3.50	323.0	砂岩(ホルンフェルス化)	B-1・2グリッド
2	打製石斧	5.90	5.40	1.70	50.0	粘板岩(ホルンフェルス化または中間型)	B-1・2グリッド
3	磨石兼敲石	13.40	6.10	1.50	178.8	砂岩	B-1・2グリッド
4	石皿	18.70	15.60	5.10	2010.0	砂岩	B-1・2グリッド
5	石皿	9.20	12.70	3.00	612.0	砂岩	B-1・2グリッド
6	石皿	12.20	10.40	5.10	754.0	火成岩の一種か	B-1・2グリッド
7	砥石	9.40	7.80	2.50	182.0	凝灰質泥岩	B-1・2グリッド
8	砥石	13.80	6.10	5.30	292.5	ホルンフェルス	B-1・2グリッド
9	砥石	13.70	5.40	3.60	416.0	泥岩	B-1・2グリッド
10	石錘	6.30	3.70	1.40	53.0	砂岩	B-1・2グリッド
11	石錘	5.60	4.10	1.50	47.6	砂岩と泥岩の中間	B-1・2グリッド
12	石錘	7.10	5.70	2.00	111.3	泥岩	B-1・2グリッド



第51図 諏訪木遺跡縄文時代後期・晩期遺物包含層出土石器

(9) 遺構外出土遺物

表土除去の際に出土した遺物及び遺構に伴わないと判断した出土遺物を掲載する（第52図、第22表）。縄文時代から江戸時代までの、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器のほか、土錘、鏡と考えられる鉄製品、用途不明の木製品が出土した。



第52図 諏訪木遺跡遺構外出土遺物

第22表 諏訪木遺跡遺構外出土遺物観察表（第52図）

図版番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	縄文土器 深鉢形土器	—	残存高 2.30	(6.80)	ABDGN	B	外面：にぶい黄橙色 内面：オリブ黒色	底部50%	底部外面：やや篋状に平行する凹凸。
2	弥生土器 甕	—	—	—	ABIJ	B	黒褐色、橙色	胴部上半破片	横位の刷毛目後、櫛歯状工具(5本)による縦位の羽状条痕文。弥生中期後半か。
3	土師器 高坏	—	残存高 5.00	—	ABCGHK	B	明赤褐色、 にぶい橙色	脚部30%	外面：ヘラミガキ。内面：ヨコナデ。スカシ孔2か所残存(4方向)。古墳前期。
4	土師器 高坏	—	残存高 3.70	—	ABCDGKM	B	にぶい黄橙色、橙色	脚部30%	外面：ヘラミガキ(縦位)。内面：ヨコナデ。スカシ孔2か所残存(4方向か)。古墳前期。
5	土師器 壺	(13.20)	残存高 4.20	頸部径 (11.0)	ABCEHJ	A	にぶい黄橙色	口縁部～ 頸部20%	口縁部外面：刷毛目後、縦位の棒状ミガキ。古墳前期。
6	土師器 壺	—	(1.90)	(8.00)	ABEK	B	外面：橙色 内面：黄灰色、灰色	底部30%	外面：ヘラケズリ。古墳前期。
7	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(14.10)	残存高 2.80	頸部径 (12.8)	BDIJO	A	にぶい黄橙色	口縁部15%	胴部外面：刷毛目。古墳前期。
8	土師器 台付甕	—	残存高 4.40	(8.20)	ABEHIN	B	明赤褐色	台部25%	外面：上半がヘラケズリ後、一部刷毛目。内面：上半がヘラナデ(横位)、下半が刷毛目(横位)。古墳前期。
9	土師器 台付甕	—	—	—	ABDIJN	B	橙色、浅黄橙色	胴部下半破片	外面：刷毛目。古墳前期。
10	土師器 坏	(12.30)	残存高 3.20	—	ACDGJM	B	にぶい黄橙色 (赤彩以外の箇所)	口縁部 10%以下	内・外面に赤彩。比企型坏。古墳後期(6C後半)。
11	須恵器 長頸壺	—	残存高 (2.20)	—	BD	A	外面：灰白色 内面：青灰色	底部20%	外面に自然釉。古墳後期。
12	陶器 灯明皿	(10.10)	残存高 1.60	—		B	黒褐色	口縁部 20%	油受付皿。瀬戸・美濃産。江戸時代(18C後半～19C)。
13	土錘	長さ5.40 最大幅1.50 最大厚1.50 重量11.0					明赤褐色	両端の一部欠損	
14	鉄製品 鏡?	厚さ0.2～0.4						口縁部～ 体部破片	
15	木製品 用途不明製品	厚さ0.55						破片	両端部～外面が炭化。内面には一部酸化鉄が付着。2枚の板材の貼り合わせか。

4 調査のまとめ

諏訪木遺跡は、本章第2節第1項で記述したとおり、平成5～7年の発掘調査を端緒として、令和元年度までに、27次にも亘る多数次の調査が実施されてきた。その結果、縄文時代後期から江戸時代に至る多時期の複合遺跡であることが判明している。今回の調査では、近隣の調査結果と合致する縄文時代後期・晩期の遺物包含層のほか、弥生時代中期末の竪穴建物跡、古墳時代前期の竪穴建物跡、古墳時代後期の竪穴建物跡、奈良時代の掘立柱建物跡、平安時代の掘立柱建物跡、中世以降と考えられる井戸跡が検出された。特筆すべきは、弥生時代中期末の竪穴建物跡から出土した土偶形容器である。この土偶形容器は、共伴して出土した栗林式土器の特徴を示す鶏脚形の文様が施文された弥生土器壺と有機的な関係にあるものと考えられた。土偶形容器については、近隣遺跡の前中西遺跡及び池上遺跡において弥生時代中期中葉～後半の出土例があるが、本遺跡では初めての例であった。加えて、この土偶形容器はほぼ完形の状態で出土した埼玉県初の例であったことから、当時新聞各社の紙面を賑わした。それでは、本遺跡出土の土偶形容器について見ていきたいと思う。

土偶形容器の詳細については、器高前面18.0cm、同背面16.5cm、頭頂部最大幅4.6cm、同最小幅4.4cm、胴部（腹部）最大幅9.8cm、底径5.5～5.9cmを測る。遺存状態は、頭部・顔面の顎（もしくは髭）の一部が欠損しているだけで、容器のほぼ全体が把握できる。頭頂部は、後頭部が片口状になり、額から後頭部までの幅が頭頂部の最大幅である。また、その口唇部にはL R単節縄文が施文され、なお且つ赤彩が施されている。赤彩については、頭頂部から連続する顔面の眉上及び鼻の一部にも施され、また底部外面全面にも施されている。なお、図示できるほどではなかったが、頸部背面及び右腕部前面にも痕跡が僅かに見て取れることから、容器全面について施されていた可能性も示唆される。

顔面頬部には、黥面の表現と考えられるL R単節縄文が施文される。両耳は、上下に二つ穿孔がなされ、イヤリングのような耳飾りを付ける孔の表現と思われる。頸部前面には、頸飾りを表現したと思われる横位の櫛描簾状文が8単位施され、両耳下部から背面にかけては二条の線刻が2cm程の長さで施されている。両手は、4条の線刻により5本指が表現され、手首付近にも4条の線刻が施され、これは腕輪を表現しているものと考えられる。腹部の前面及び背面には一対の径3～4mmの刺突文が施され、背面の刺突文の周囲には、横5cm前後、縦4.5cm前後の範囲の黒斑がある。この刺突文については、何らかを意味すると考えられる。

本容器は、胸部には乳房の表現がないことから、男性を表現しているものと考えられる。

近隣遺跡の出土例は、本遺跡東の池上遺跡において1点、また本遺跡西の前中西遺跡において5点、計6点である。本遺跡例は、これらの時期に後出するものとなる。では、各遺跡例について若干記述する。まず、前中西遺跡例であるが、残存部位が肩部、腕部付近、顔面下位各1点、頸部以上を欠損するものが2点である。頸部以上を欠損するものには、中実形のものもあり、また容器形ものは乳房が表現されており女性を表現している。顔面下位のもの、本遺跡例と同様に頬部・鼻下にL R単節縄文が施文され、黥面であるとともに髭を表現していると考えられる。一方、池上遺跡例は、顔面及び左手部の部位であり、顔面は本遺跡例と同様に目鼻立ちがはっきりしており、髭の表現については前中西遺跡例の黥面の表現のものと類似する。また、左手部は、胸部にかけて沈線による三角文・円形文・コの字文が施文され、三角形文の両側及び円形文の内側部には連続する刺突文が施されている。さらに、頸部

～胸部にも頸飾りを表現したと思われる二条のやや大きめの刺突文が施されている。なお、黥面の表現について本遺跡例と比較すると、前中西遺跡及び池上遺跡例は鼻より下であるのに対し、本遺跡例は目元より下であり、相違する。

出土遺構については、前中西遺跡例が遺構外、中期後半の住居跡、中期中葉の住居跡からの流れ込み及び中期後半の溝跡であり、池上遺跡例が中期中葉の環濠からの出土である。

最後に、本遺跡出土の土偶形容器が示す意義について触れてみる。土偶形容器とは、頭頂部が開口し、体部は中空で脚はなく、底面が扁平な土製の立像容器である。また、再葬と深く係わる蔵骨器として用いられ、弥生時代前期末から表面に朱が塗布されていたと推定されている。このことから、本遺跡例も同様であったことが推定される。弥生時代の土偶形容器は、多産や誕生を願う女性を模った縄文時代の土偶とは異なり、蔵骨器という性格をもち、また、男女一対で出土する例があるのが特徴である。また、容器自体が祖先を表現したものとも捉えられ、強く生命の再生を願う意味が込められていると考えられる。したがって、本遺跡を含めて近隣で検出されている土偶形容器は、当地域の弥生人の死や埋葬に対する考え方等を知る上で貴重な情報を提供した。

さらに、本遺跡や前中西遺跡は、中部高地・長野県の栗林式土器を出土し、また、前中西遺跡で検出された礫床木棺墓は、栗林式土器文化圏における重要な墓制であり、同じく中部高地からもたらされたものと考えられることから、土偶形容器の主要分布域が長野県を中心とするという事実と合わせて、当地域に受け入れられた外来系文化について検討する材料を提供しているものと考えられる。

主な引用・参考文献

- 石川 日出志 1987 「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究 8 祭と墓と装い』編集 金関 恕、佐原 真
埼玉県立さきたま資料館 1984 『池守・池上』
- 櫻井 秀雄 2013 「弥生時代の人形土器」『金大考古』第73号
- 設楽 博己 1998 「下境沢遺跡出土の黥面付土器」『下境沢遺跡』長野県塩尻市教育委員会
- 設楽 博己 2005 「弥生時代の男女像－日本先史時代における男女の社会的関係とその変化」『考古學雑誌』第91巻第2号
- 熊谷市教育委員会 2002 『前中西遺跡Ⅱ』
- 熊谷市教育委員会 2009 『前中西遺跡Ⅳ』
- 熊谷市教育委員会 2010 『前中西遺跡Ⅴ』
- 熊谷市教育委員会 2011 『前中西遺跡Ⅵ』

瀬戸山古墳群第29号墳



V 瀬戸山古墳群第29号墳の調査

1 発掘調査の概要

(1) 調査にいたる経過

平成27年10月中旬、事業者（岩田範治氏）より所有地である熊谷市楊井6番2地内での開墾に際し、多数の大きい石などが埋まっている状況から古墳ではないかとの連絡が熊谷市教育委員会に入った。これを受け、当教育委員会が、現地へ赴き、聞き取り調査及び状況調査を行ったところ、石室の上面が一部露出した状況が確認され、掘り出された石は、まさしく当地域の古墳の石室に使用される凝灰質砂岩であった。この結果を受け、当教育委員会は、この古墳が未確認のものであったことから、ただちに周知の埋蔵文化財包蔵地「瀬戸山古墳群第29号墳 県遺跡番号59-027-34」として新規登録の変更増補を行った。

事業者は、翌年4月以降に古墳の所在する土地で耕作を行う予定にあり、現状では耕作に支障をきたすことから発掘調査実施の意向を示し、平成28年1月13日付けでその他の開発（個人による農地改良）の目的で埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これを受け、当教育委員会では、この古墳についてできる限り現状保存できるよう協議を行ったが、耕作に際して石室が支障をきたすことは明らかであることから現状保存は不可能であるとの結論に達し、石室部分のみ記録保存の措置を講ずることとなった。そして、発掘調査の日程については、事業者との協議の結果、平成28年3月に実施することとなった。

以上のことから、平成28年1月20日付け熊教社埋発第609号で埼玉県教育委員会あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付し、事業者あてに平成28年1月28日付け教生文第4-1465号で埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査実施の指示がなされた。

発掘調査は、発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、平成28年2月25日付け熊教社埋発第650号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

(2) 発掘調査、整理・報告書作成の経過

発掘調査は、平成28年3月1日から3月25日まで実施した。調査面積は、32.00㎡である。

今回調査する瀬戸山古墳群第29号墳は、江南台地東端南側の斜面に埋没しており、調査はまず石室の玄室東側壁と思われる石が露出している箇所からその規模を想定し、8×4mの範囲について表土を人力で掘削した。その後、土層断面観察用にセクションベルトを調査区中央の南北に1本、東西は石室部分を中心に計4本設定し、徐々に掘り下げていった。石室は、西側が攪乱された状況にあったが、玄室付近は概ね良好な残存状態にあり、玄室は棺床面まで、その他は地山まで掘り下げ、土層断面図の作成を行った。3月中旬以降は、玄室棺床面に礫が敷かれた状態で平面図の作成と写真撮影を行い、終了後に礫の除去、石室立面図の作成、写真撮影を行った。そして、最終日に人力による埋め戻しや器材撤収を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

整理・報告書作成作業は、令和2年4月から令和3年3月にかけて実施した。まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元などの作業を行い、併行して遺構の図面整理を行った。次に、遺物の実測・拓本、遺構

のデジタルトレースを行い、遺構・遺物の版組を作成した。その後、遺物の写真撮影、写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行い、最後に印刷業者選定の後、校正を経て本報告書を刊行した。

(3) 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

ア 発掘調査

平成27年度

教育長	野原 晃
教育次長	米澤ひろみ
社会教育課長	山崎 実
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	森田 安彦
社会教育課副課長兼文化財保護係長	吉野 健
主査	松田 哲
主査	小島 洋一
主査	藏持 俊輔
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主任	金子 正之
発掘調査員	長谷川一郎
事務嘱託	原野 真祐
事務嘱託	山崎 和子

イ 整理・報告書作成

令和2年度

教育長	野原 晃
教育次長	田島 斉
社会教育課長	三友 孝二
社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事	吉野 健
社会教育課主幹兼文化財保護係長	松田 哲
主査	星 祥子
主査	小島 洋一
主任	山下 祐樹
主任	腰塚 博隆
主事	山川愛希子
主事	山川 守男
主事	大野美知子
発掘調査員	磯崎 一

2 遺跡の概要

(1) 瀬戸山古墳群について

瀬戸山古墳群は、熊谷市南東部の平塚新田及び楊井に所在する古墳群である。本古墳群は、北西の平塚新田から南東の楊井まで約1.7kmの範囲内に広がっている（第53図）。地形的には、北を東へ流れる和田吉野川とその南を同じく東へ流れる和田川に挟まれた細長い江南台地の東端に立地しており、標高は平塚新田で44～46m、楊井で32～42mを測る。なお、本古墳群とほぼ同所には、瀬戸山遺跡も所在している。本遺跡は、古墳時代前期から奈良・平安時代、近世までの複合遺跡であり、縄文時代及び弥生時代については、現時点では遺構は確認されていないが、遺物が出土していることから今後遺構が確認される可能性が高い。

本古墳群では、現在までに計36基の古墳が確認されており、その分布状況から平塚新田と楊井地区に所在するものの2つのグループに分けられる（第23表）。本古墳群の築造年代については、6世紀後半から7世紀末ないしは8世紀初頭までと考えられている。

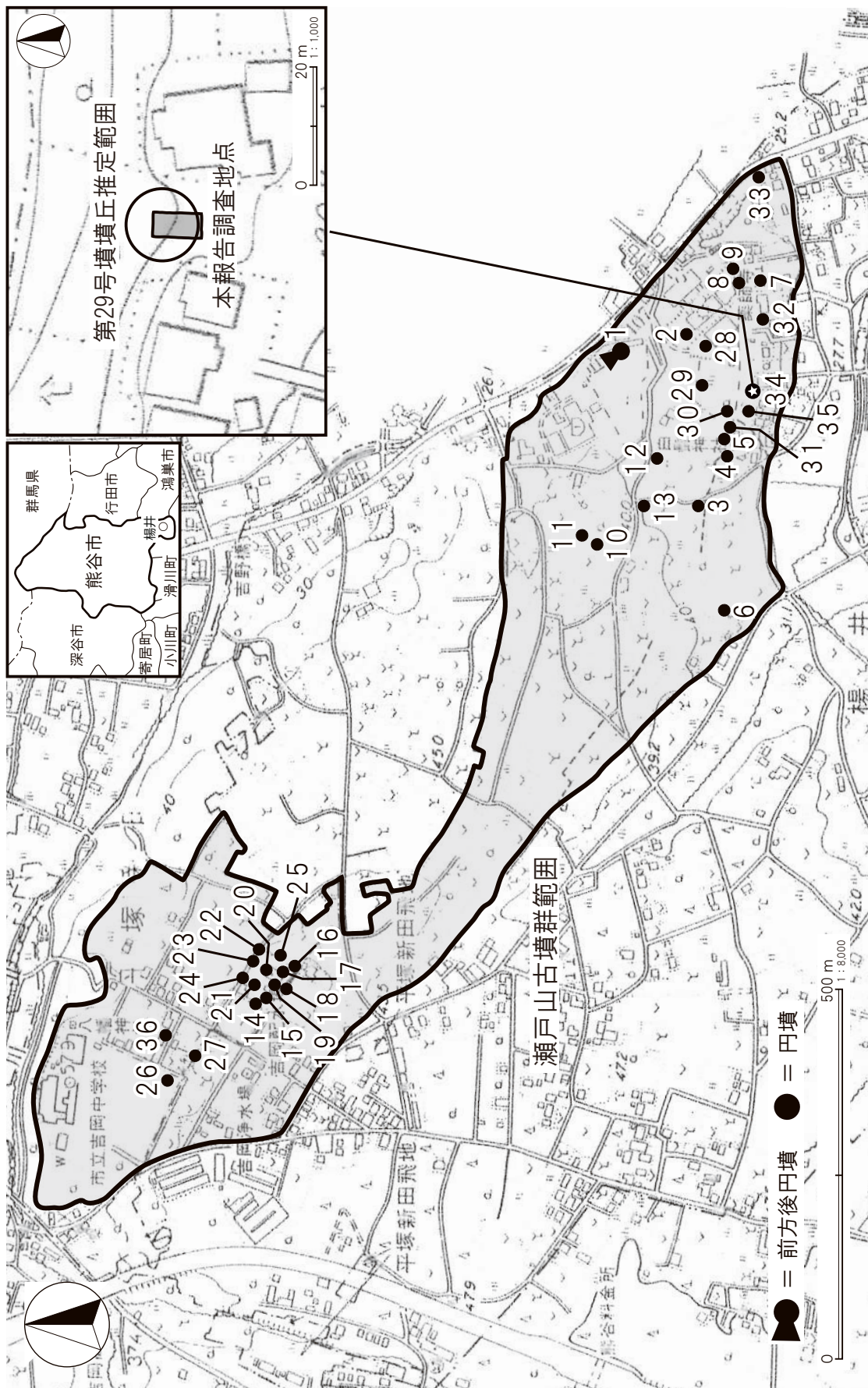
本古墳群における発掘調査は、これまでに計6回実施されており、調査が行われた古墳の総数は計19基である。発掘調査が実施された古墳は、履歴順に挙げると、楊井古墳（12）、伊勢山古墳（1）、第21・15号墳（2・28）、楊井薬師寺古墳第1・3号墳（7・9）、第13号墳（26）、第1～12号墳（14～25）である（括弧内の数字は第53図及び第23表に合致する）。以下、発掘調査が行われた古墳の概要について履歴順に述べる。

本古墳群において最初に発掘調査が行われたのは、楊井古墳（12）である。本古墳は、台風で欠損した道路の改修に伴い、畑地の土取りを行った際に石室が発見されたことから調査が行われた。調査時期は、1959年（昭和34年）2月27・28日、調査主体者は熊谷市教育委員会、担当者は小澤國平氏である（埼玉県教育委員会1973）。

本墳は、径15～16m、高さ2mを測る円墳であるが、現在墳丘は削平されている。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による両袖型横穴式石室であり、羨道部から玄室奥壁までは残存していたが、東側は羨道部と玄室の境以外欠損している。西側羨道部は根石のみ残存していた。規模は、玄室が長さ2.25m、幅1.95m、羨道部は長さ1.5m、幅は羨門部で0.5m、玄室との境で0.9mを測る。玄室棺床面には、拳大の川原石が敷かれていた。遺物は、玄室から大刀7点、鏢1点、小尻1点、須恵器片2点、土師器片1点、耳環（鉄環1点、銅環1点）、鉄釘22点が出土している。遺物の詳細は不明であるが、築造年代は石室の形態からみて7世紀前半の可能性が高い。

次に調査が行われたのは、伊勢山古墳（1）である。調査期間は、1961年（昭和36年）9月18日から27日までである。調査主体者は熊谷市教育委員会、担当者は小澤國平氏である（熊谷市1963）。調査原因は工場建設であり、本墳は現在消滅している。

本墳は、全長41mを測る本古墳群唯一の前方後円墳である。墳丘の高さは、前方部が3.5m、後円部が3.0mを測る。主体部は、後円部墳頂からやや南寄りに位置する。凝灰質砂岩の切石積による片袖型横穴式石室であり、玄室は長さ2.75m、幅1.45m、羨道部の長さは1.70mを測る。遺物は、玄室から大刀1点、刀子1点、鉄鏃片、鉄製轡1点、耳環（金環）1点、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片が出土しており、築造年代は6世紀後半と考えられている。



第53図 瀬戸山古墳群分布状況、瀬戸山古墳群第29号墳調査地点位置図

第23表 瀬戸山古墳群一覧表（第53区）

No	遺跡番号	名称	墳形	規模	遺構・出土遺物	備考
1	59-027-001	伊勢山古墳	前方後円墳	全長41m	片袖型横穴式石室、直刀、鉄鏃、耳環、円筒埴輪他	消滅。
2	59-027-002	第21号墳	円墳	径28m、高4m	横穴式石室	S42城西大調査(1号墳)、消滅。
3	59-027-003	第22号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
4	59-027-004	第23号墳	円墳	径7m、高0.5m	-	墳丘削平。
5	59-027-005	第24号墳	円墳	径10m、高2.5m	-	半壊。
6	59-027-006	第25号墳	円墳	径18m、高1m	-	ほぼ完存。
7	59-027-007	楊井薬師寺第1号墳	円墳	径32m	胴張型横穴式石室、直刀、土師器	消滅。
8	59-027-008	楊井薬師寺第2号墳	円墳	径27m、高2.4m	-	ほぼ完存。
9	59-027-009	楊井薬師寺第3号墳	円墳	径10m	横穴式石室	消滅。
10	59-027-010	第26号墳	円墳	径16m、高1.2m	-	半壊。
11	59-027-011	第27号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
12	59-027-012	楊井古墳	円墳	径15~16m、高2m	横穴式石室、太刀、鏝、鉄鏃、耳環、土師器他	墳丘削平。
13	59-027-013	第28号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
14	59-027-014	第1号墳	円墳	径13m	円筒・形象(馬)埴輪、土師器	墳丘削平。
15	59-027-015	第2号墳	円墳	径11m	土師器	墳丘削平。
16	59-027-016	第3号墳	円墳	径13m	土師器	墳丘削平。
17	59-027-017	第4号墳	円墳	径9m	-	消滅。
18	59-027-018	第5号墳	円墳	径6m	-	墳丘削平。
19	59-027-019	第6号墳	円墳	径13m	-	墳丘削平。
20	59-027-020	第7号墳	円墳	径10m	円筒埴輪	消滅。
21	59-027-021	第8号墳	円墳	径10m	円筒埴輪	墳丘削平。
22	59-027-022	第9号墳	円墳	径21m	円筒埴輪、土師器	二重周溝。墳丘削平。
23	59-027-023	第10号墳	円墳	径23m	円筒埴輪、土師器	二重周溝。墳丘削平。
24	59-027-024	第11号墳	円墳	径15m	円筒埴輪	墳丘削平。
25	59-027-025	第12号墳	円墳	径8m	円筒埴輪	墳丘削平。
26	59-027-026	第13号墳	円墳	径10m	土師器	墳丘削平。
27	59-027-027	第14号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
28	59-027-028	第15号墳	円墳	不明	-	S42城西大調査(2号墳)、消滅。
29	59-027-029	第16号墳	円墳	径8m、高2.5m	-	消滅。
30	59-027-030	第17号墳	円墳	径18m、高2.5m	横穴式石室	ほぼ完存。
31	59-027-031	第18号墳	円墳	径10m、高1m	-	半壊。
32	59-027-032	第19号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
33	59-027-033	第20号墳	円墳	不明	-	墳丘削平。
34	59-027-034	第29号墳	円墳	不明	横穴式石室、鉄鏃、耳環	石室半分欠。
35	59-027-035	第30号墳	円墳	不明	横穴式石室	石室一部露出。
36	59-027-036	第31号墳	円墳	径13.6m	円筒埴輪	墳丘削平。

次の第21・15号墳（2・28）の調査は、工場建設に伴い、1972年（昭和47年）7月22日から10月25日まで、城西大学考古学研究会が主体となって行われた。本報告がないため詳細は不明であるが、当時の遺跡発掘調査報告会の発表要旨によると、現在の名称である第21号墳は「第1号墳」、第15号墳は「第2号墳」に該当する。また、工場敷地内にはもう1基古墳（30：現在の第17号墳）が存在するが、この古墳については工場内での公園造成に伴い、現状保存されている（貞末1973）。これらの古墳の築造年代は、7世紀前半と考えられている。

第21号墳（2）は、径約28m、墳丘の高さは約4mを測る円墳である。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、規模は玄室が長さ約5.5m、幅2.5m、羨道部は長さ約2mを測る。遺物は、玄室から金箔が一部残る金具、馬具（杏葉、雲珠）、鉄鏃、小玉、切子玉、大刀の鞘口一部などが出土している。

第15号墳（28）は、墳丘の大半が既に削平された状態にあり、主体部の一部が残存するにとどまる。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室と思われ、玄室と羨道部の根石が確認されたのみである。規模は、玄室が長さ約3.0m、幅約1.5mを測り、第21号墳より小さい。遺物は、鉄鏃約40点、管玉1点、

切子玉2点が出土している。

次の楊井薬師寺第1・3号墳（7・9）の調査は、墓地造成に伴い、1977年（昭和52年）7月25日から9月1日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である。なお、寺院境内にはもう1基古墳（8：楊井薬師寺第2号墳）が存在するが、この古墳については現状保存されている（熊谷市教育委員会1978）。これらの古墳の築造年代は、7世紀末～8世紀初頭と考えられている。

楊井薬師寺第1号墳（7）は、径32m、墳丘の高さ約3mを測る円墳であり、幅約1.5～2.0mの周溝が巡る。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、玄室以外は破壊されていた。玄室は、長さ3.30m、幅3.15mを測る。玄室内には、長さ2.44m、幅2.00m、厚さ0.94mを測る大形の天井石が落下していたが、礫の敷かれた棺床面との間に約50cmの土砂が堆積しており、遺物は鉄製品の破片が1点出土したのみである。

楊井薬師寺第3号墳（9）は、既に墳丘が削平された状態にあり、周溝と主体部の一部が確認された。径約10mの規模の小さい円墳と思われ、周溝は幅約1.4mを測る。主体部は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、玄室の根石と棺床面が確認されたのみである。玄室は、長さ1.65m、幅1.20mを測る。本墳に伴う遺物は出土していない。

次の第13号墳（26）の調査は、市立吉岡中学校校庭拡張に伴い、1982年（昭和57年）6月2日から30日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である（熊谷市教育委員会2001）。

墳丘は既に削平された状態にあり、円形に巡る周溝のみ確認された。径約10mの円墳であり、周溝は幅約1.0m、深さは35cm前後を測り南東にブリッジを持つ。遺物は、周溝から完形の土師器壺が出土した。

最後に、第1～12号墳（14～25）の調査は、市立吉岡配水場建設に伴い、1982年（昭和57年）7月12日から9月11日まで行われた。調査主体者は、熊谷市教育委員会である。12基の古墳は、調査面積3,000㎡内に密集する形で所在しており、墳丘はすべて削平されていた（熊谷市教育委員会2001）。

第1号墳（14）は、東側の周溝が確認されただけであるが、径約13mの円墳と思われる。周溝は、幅3.0m、深さ0.5m前後を測る。遺物は、土師器高坏、円筒埴輪片、形象埴輪（馬形）片が出土している。

第2号墳（15）は、径約11mの円墳である。幅1.5m、深さが北・西側で0.8m、南・東側で0.4m前後を測る周溝が全周する。遺物は、土師器の模倣坏が出土している。

第3号墳（16）は、北側の周溝が確認されただけであるが、径約13mの円墳と思われる。周溝の幅は、東側が3.4mと広く、西側が1.3mと狭い。深さは12cmと浅い。遺物は、土師器甕の破片が出土している。

第4号墳（17）は、径約9mの円墳である。幅0.5～1.3m、深さ0.2m前後を測る周溝が全周する。本墳に伴う遺物は出土していない。

第5号墳（18）は、径約6mの小規模な円墳である。南側は調査区域外にあるが、周溝は、幅0.5m、深さ0.2m前後を測り、北西と北東にブリッジを持つ。出土遺物に、図示可能なものはみられなかった。

第6号墳（19）は、径約13mの円墳である。周溝は、幅1m、深さ0.2m前後を測り、南側にブリッジを持つ。本墳に伴う遺物は出土していない。

第7号墳（20）は、径約10mの円墳である。幅1.5m、深さ0.25m前後を測る周溝が全周する。遺物は、円筒埴輪片1点のみである。

第8号墳（21）は、径約10mの円墳である。周溝は、幅にややバラツキがみられるが概ね1.3m、深さ0.3

m前後を測り、全周する。遺物は、円筒埴輪片が少量出土している。

第9号墳(22)は、南西部約1/4の検出であるが、周溝が二重に巡る円墳と思われる。周溝の規模は、内側の幅が0.2~0.9mと狭いが、外側は2.5~3.8mと広く、深さは内側が30cmと浅く、外側が55cm前後とやや深い。周溝の内側と外側の距離は、約2.0mを測る。全体の規模は、外側の周溝を含めて径約21mと大きい。遺物は、外側の周溝から多量の円筒埴輪が出土しており、土師器模倣坏も若干出土している。一方、内側の周溝からは、円筒埴輪片が少量出土している。

第10号墳(22)は、南側半分の検出であるが、第9号墳同様、周溝が二重に巡る円墳と思われる。周溝の規模は、内側の幅が1.0~1.4mと狭いが、外側は2.6~3.8mと広い。深さは、内側が40~50cm、外側が30~100cm前後を測る。周溝の内側と外側の距離は、約1.2mである。全体規模は、外側の周溝を含めて径約23mと第9号墳よりさらに大きい。遺物は、内外の周溝とも少ないが、土師器坏、円筒埴輪が少量出土している。特に外側周溝の東側では、赤彩された土師器坏が3個体まとまって出土している。

第11号墳(23)は、東側の周溝が確認されただけであるが、径約15mの円墳と思われる。周溝の規模は、幅1.4~3.8mとバラツキがみられ、深さは70cmを測る。遺物は、円筒埴輪片が少量出土している。

第12号墳(24)は、西側周溝の外側立ち上がりのみの検出であるため詳細は不明であるが、径約8mの円墳と思われる。遺物は、円筒埴輪片が1点出土しているのみである。

第1~13号墳の築造年代については、埴輪を持つものと持たないものがあることから本古墳群全体の築造年代である6世紀後半から7世紀末ないしは8世紀初頭までと考えられている。

以上、瀬戸山古墳群で発掘調査が行われた古墳について概要を述べた。調査は、昭和30年代を皮切りにほぼ10年周期で実施されてきたが、これらの調査以前にも本古墳群には次のとおり古い記録が残っている。

『新編武蔵國風土記稿』「卷之二百二十一 大里郡之三 御正領」の「平塚新田」の項には、付近にある古墳の存在から村の名前に「塚」が付けられたとの記述があり、また村内にある「薬師堂」の項には、古墳から出土した鉄鎌が納められているとの記述も見られる(塩野2004)。また、1915年(大正4年)には、楊井字瀬戸山地内で開墾中に耳環(金環3点、銀環2点)、大刀5点、鏝4点、鉄鎌・刀子各1点が発見されたとの記録も残っている(本村1991、塩野2004)。

以上のことから、本古墳群の所在する平塚新田及び楊井地区には、古くからこの地に古墳が多数所在することが伝わっており、現在確認されている36基以上の古墳が存在していたことは間違いない。なお、ここで本古墳群とほぼ同所に所在する瀬戸山遺跡についても若干触れておきたい。

瀬戸山遺跡における発掘調査は、これまでに計3回実施されている。このうちの2回は、上記の1972年(昭和47年)に城西大学考古学研究会が実施した調査及び1982年(昭和57年)に熊谷市教育委員会が市立吉岡配水場建設に伴い実施した調査が該当する。そして、3回目は、2011年(平成21年)、携帯電話用電波塔建設に伴い、熊谷市遺跡調査会により実施されたものである(熊谷市遺跡調査会2011)。

各調査の成果については、紙面の都合上、詳細は割愛するが、冒頭でも述べたとおり、本遺跡は古墳時代前期から奈良・平安時代、近世まで続く複合遺跡であることが判明しており、縄文時代・弥生時代については遺物のみ確認されている。このうち最も多く検出されているのは、古墳時代前期であり、本古墳群とほぼ同所に集落が広がっていることが考えられる。また、3回目に実施した調査については、

調査地点が古墳群の遺跡範囲ほぼ中央の南側に位置し、平安時代の竪穴建物跡が2棟検出されていることから、当該時代の集落も広がっていることが考えられる。

(2) 調査の方法

調査の方法は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第Ⅸ系）による基準点測量を委託して行い、石室検出箇所全体が網羅できるように一辺5mのグリッドを設定して行った。

実測作業にあたっては、交点を基準に水系で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。

(3) 検出された遺構と遺物

調査地点は、遺跡範囲の南東部南東端付近の箇所で、前述のとおり瀬戸山古墳群楊井支群のほぼ中央部南寄りの古墳が集中して確認されている地区である。また、近接する薬師寺の墓地造成に伴い調査された楊井薬師寺第1・3号墳の約100m西に当たる。薬師寺第1・3号墳はともに凝灰質砂岩の切石積の横穴式石室を持つ古墳であり、本支群の他の古墳主体部にも見られる特徴であり、本報告調査の第29号墳も同様の石室構造であった。時期としては、薬師寺第1・3号墳が7世紀末～8世紀初頭の築造と考えられ、本墳は7世紀後半の築造と考えられることから、本墳がやや先行するものである。

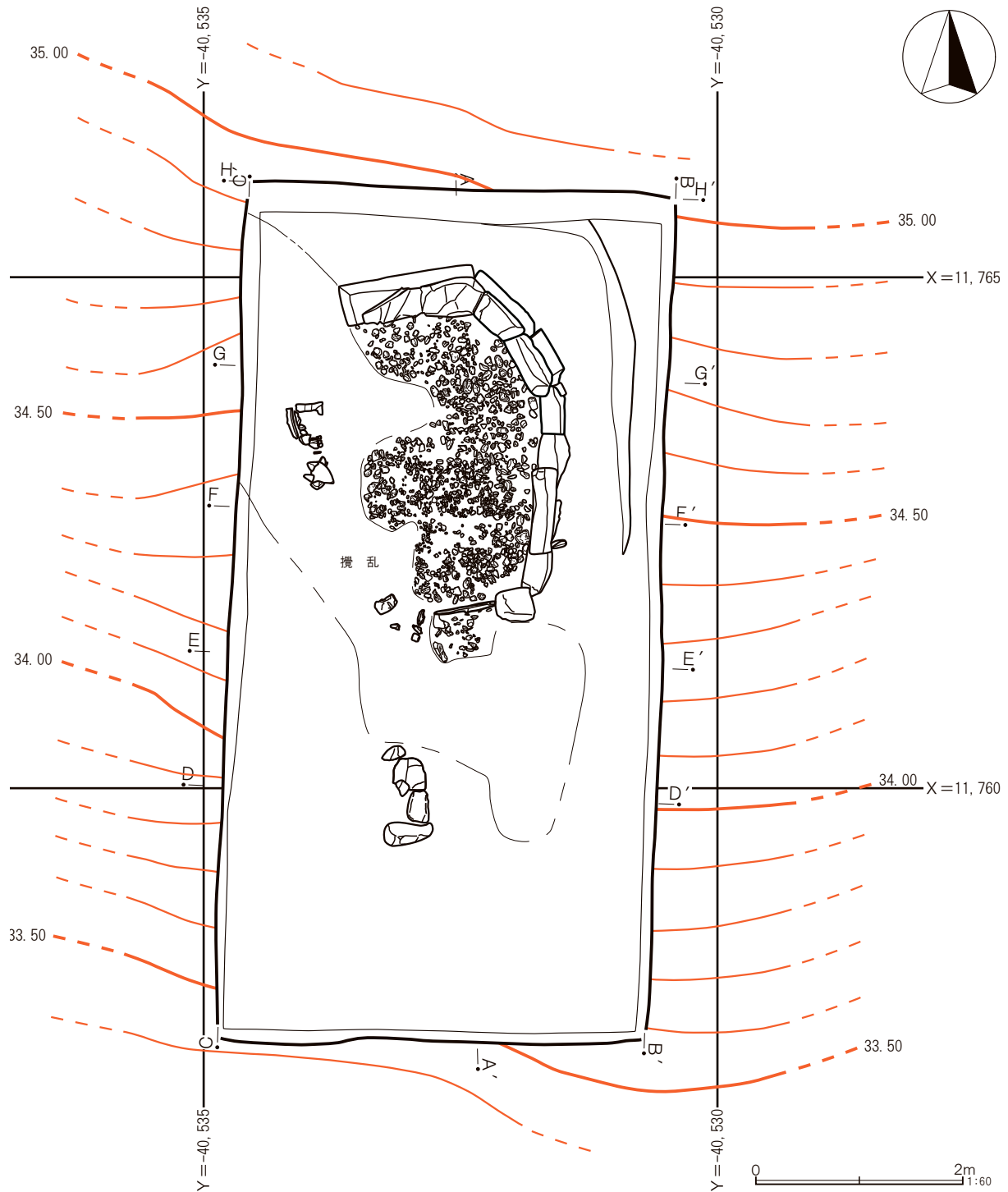
検出された遺構・遺物は、遺構が横穴式石室及び墳丘の一部である。遺物は、石室から鉄鏃、耳環が、また石室及び墳丘、攪乱箇所から縄文土器深鉢形土器、打製石斧、弥生土器甕、土師器高坏・器台・壺・台付甕・羽釜、須恵器瓶、陶器播鉢・反り皿等が出土し、その量はコンテナ1箱であった。

3 遺構と遺物

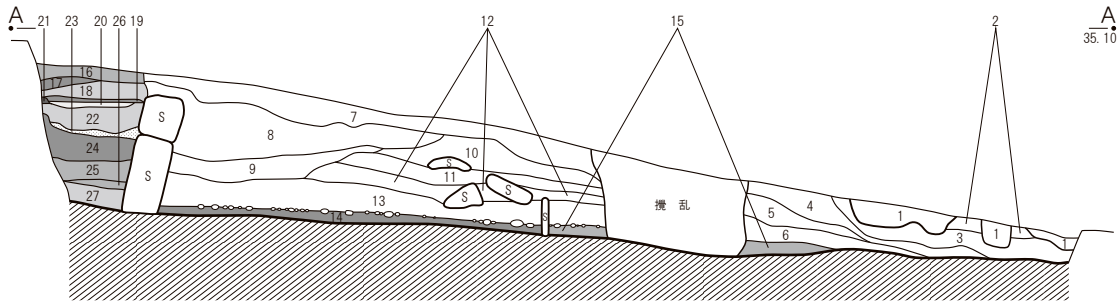
(1) 古墳

第29号墳 (第54～63図、第24・25表)

瀬戸山古墳群南東端の楊井に位置する (第53図34)。今回調査の対象となったのは、主体部である横穴式石室と周囲の墳丘である (第54図)。本墳は、和田川に面した江南台地東端南側のやや急な斜面に立地し、調査箇所の高さは、33.5m～35.0mを測る。主体部と墳丘は、斜面に埋没しており、石室は攪

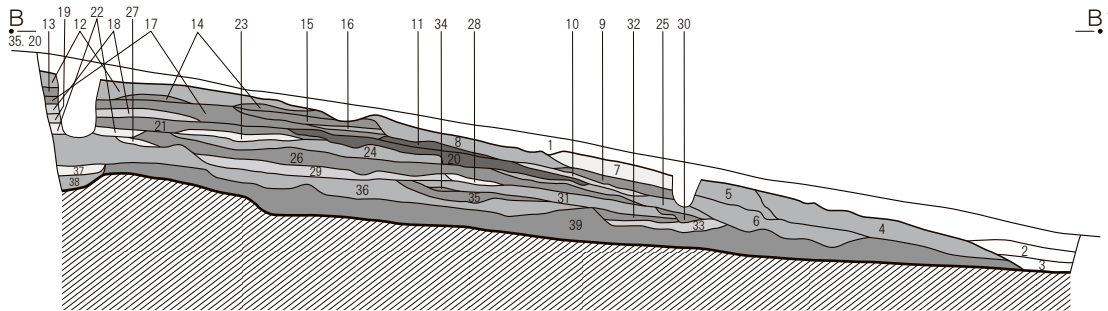


第54図 瀬戸山古墳群第29号墳調査区全測図



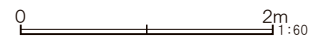
土層説明 (A A')

- | | |
|-------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色土：しまり弱。後世の掘り込み。 | 15 暗褐色土：しまりやや強。 |
| 2 暗褐色土：しまり弱。 | 16 暗褐色土：しまり強。黒褐色土多量、ロームブロック少量含む。 |
| 3 黄褐色土：しまり弱。白色粒少量含む。 | 17 黒褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒少量含む。 |
| 4 黒褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片少量含む。 | 18 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。 |
| 5 暗褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片少量含む。 | 19 黒褐色土：しまり強。 |
| 6 暗褐色土：しまり弱。ローム粒・ブロック少量含む。 | 20 黄褐色土：しまり極強。ロームブロック主体。 |
| 7 暗褐色土：しまり弱。黒褐色土、白色粒少量含む。 | 21 黒色土：しまり強。暗褐色土、ロームブロック少量含む。 |
| 8 黒褐色土：しまり弱。ローム粒少量含む。 | 22 褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒・ブロック少量含む。 |
| 9 暗褐色土：しまり弱。白色粒、白色粘土少量含む。 | 23 白色粘土 |
| 10 暗褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片、白色粘土少量含む。 | 24 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。 |
| 11 黒褐色土：しまり弱。白色粘土少量含む。 | 25 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。 |
| 12 黒褐色土：しまり弱。白色粘土、ローム粒少量含む。 | 26 暗褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。 |
| 13 黒褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片、白色粘土多量含む。 | 27 褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒・ブロック少量含む。 |
| 14 黒褐色土：しまり強。 | |

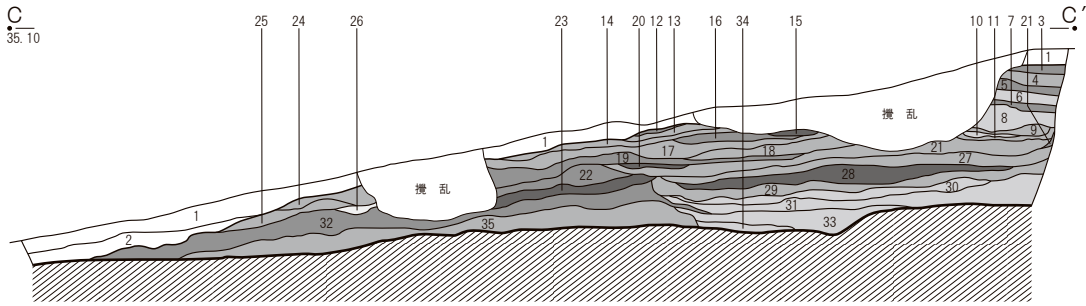


土層説明 (B B')

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| 1 耕作土 | 21 黒褐色土：しまりやや強。暗褐色土多量含む。 |
| 2 暗褐色土：しまり弱。 | 22 黄褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック主体。 |
| 3 黒褐色土：しまり弱。 | 23 黄褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック主体。 |
| 4 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。 | 24 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。 |
| 5 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。 | 25 暗褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。 |
| 6 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ローム粒・ブロック多量含む。 | 26 黒褐色土：しまり強。褐色土、ロームブロック少量含む。 |
| 7 黄褐色土：しまりやや強。 | 27 黄褐色土：しまり強。ロームブロック主体。黒褐色土少量含む。 |
| 8 暗褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック、礫少量含む。 | 28 黄褐色土：しまり強。ロームブロック主体。暗褐色土少量含む。 |
| 9 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック少量含む。 | 29 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量、黒褐色土少量含む。 |
| 10 褐色土：しまりやや強。黒褐色土、白色粘土、ローム粒少量含む。 | 30 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。 |
| 11 黒色土：しまりやや強。ローム粒少量含む。 | 31 暗褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。 |
| 12 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。 | 32 黒褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量含む。 |
| 13 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。 | 33 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量含む。 |
| 14 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック少量含む。 | 34 黒褐色土：しまり極強。白色粘土、ロームブロック多量含む。 |
| 15 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック少量含む。 | 35 黒褐色土：しまり極強。ロームブロック少量含む。 |
| 16 暗褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。 | 36 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。 |
| 17 黒褐色土：しまりやや強。 | 37 黄褐色土：しまりやや強。ロームブロック主体。 |
| 18 褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。 | 38 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。 |
| 19 褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。 | 39 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。 |
| 20 黒色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック少量含む。 | |

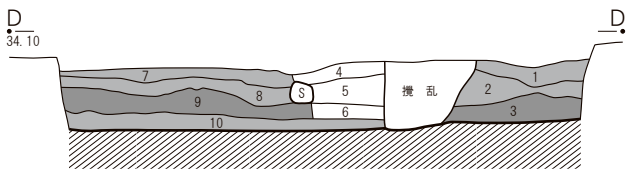


第55図 瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(1)



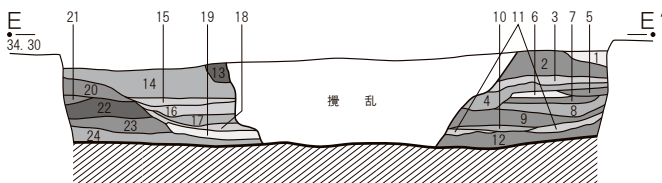
土層説明 (C C')

- | | |
|--|---|
| <p>1 耕作土</p> <p>2 暗褐色土：しまり弱。</p> <p>3 黒褐色土：しまり弱。ローム粒少量含む。</p> <p>4 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。</p> <p>5 黒褐色土：しまりやや強。暗褐色土多量、ロームブロック少量含む。</p> <p>6 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。</p> <p>7 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒多量含む。</p> <p>8 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量、礫少量含む。</p> <p>9 暗褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。</p> <p>10 褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。</p> <p>11 暗褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。</p> <p>12 黒色土：しまり強。ロームブロック多量含む。</p> <p>13 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>14 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ローム粒多量含む。</p> <p>15 黒色土：しまりやや強。ローム粒少量含む。</p> <p>16 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。</p> <p>17 暗褐色土：しまり強。白色粘土、ローム粒多量含む。</p> <p>18 暗褐色土：しまり強。白色粘土多量、ローム粒少量含む。</p> | <p>19 黒褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。</p> <p>20 黒色土：しまり強。</p> <p>21 暗褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。</p> <p>22 暗褐色土：しまりやや強。</p> <p>23 黒色土：しまり強。</p> <p>24 暗褐色土：しまりやや強。白色粘土少量含む。</p> <p>25 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土少量含む。</p> <p>26 黒褐色土：しまり強。</p> <p>27 暗褐色土：しまり強。ロームブロック少量含む。21層より暗い。</p> <p>28 黒色土：しまり強。ロームブロック少量含む。</p> <p>29 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。</p> <p>30 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、暗褐色土少量含む。</p> <p>31 褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒・ブロック少量含む。</p> <p>32 黒褐色土：しまり強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。</p> <p>33 褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。</p> <p>34 褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。</p> <p>35 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土多量含む。</p> |
|--|---|



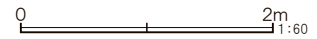
土層説明 (D D')

- | |
|--|
| <p>1 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。</p> <p>2 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>3 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>4 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土多量含む。</p> <p>5 黒褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片少量含む。</p> <p>6 暗褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片少量含む。</p> <p>7 暗褐色土：しまりやや強。白色粘土少量含む。</p> <p>8 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土少量含む。</p> <p>9 黒褐色土：しまり強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。</p> <p>10 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土多量含む。</p> |
|--|

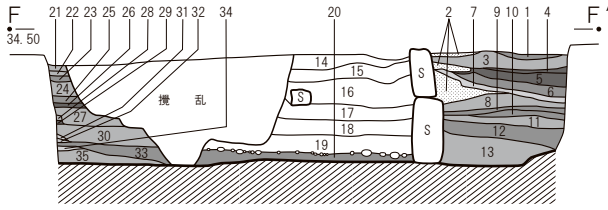


土層説明 (E E')

- | | |
|---|---|
| <p>1 黄褐色土：しまりやや強。</p> <p>2 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック少量含む。</p> <p>3 褐色土：しまりやや強。黒褐色土、白色粘土、ローム粒少量含む。</p> <p>4 暗褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。</p> <p>5 黒褐色土：しまり強。褐色土、ロームブロック少量含む。</p> <p>6 黄褐色土：しまり強。ロームブロック主体。暗褐色土少量含む。</p> <p>7 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。</p> <p>8 暗褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。</p> <p>9 黒褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>10 暗褐色土：しまり強。白色粘土少量含む。</p> <p>11 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>12 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。</p> | <p>13 黒色土：しまりやや強。</p> <p>14 暗褐色土：しまり強。白色粘土、ローム粒多量含む。</p> <p>15 褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック多量含む。</p> <p>16 褐色土：しまりやや強。黒褐色土少量含む。</p> <p>17 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。</p> <p>18 褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。</p> <p>19 黄褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック主体。黒褐色土少量含む。</p> <p>20 黒褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。</p> <p>21 黒褐色土：しまりやや強。20層より明るい。</p> <p>22 黒色土：しまり強。</p> <p>23 黒褐色土：しまり強。黒褐色土、白色粘土、ロームブロック少量含む。</p> <p>24 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土多量含む。</p> |
|---|---|



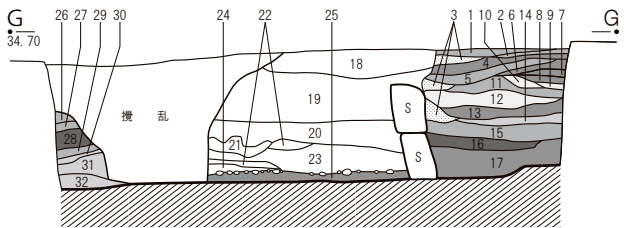
第56図 瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(2)



土層説明 (F F')

- 1 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒少量含む。
- 2 白色粘土
- 3 暗褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック、礫少量含む。
- 4 黒色土：しまりやや強。ローム粒少量含む。
- 5 黒色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック少量含む。
- 6 黒褐色土：しまり強。褐色土、ロームブロック少量含む。
- 7 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。
- 8 暗褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。
- 9 黒褐色土：しまり極強。白色粘土、ロームブロック多量含む。
- 10 黒褐色土：しまり極強。ロームブロック少量含む。
- 11 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。
- 12 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。
- 13 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒・ブロック多量含む。
- 14 暗褐色土：しまり弱。黒褐色土、白色粒少量含む。

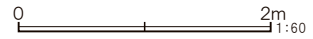
- 15 黒褐色土：しまり弱。ローム粒少量含む。
- 16 暗褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片、白色粘土少量含む。
- 17 黒褐色土：しまり弱。白色粘土少量含む。
- 18 黒褐色土：しまり弱。白色粘土、ローム粒少量含む。
- 19 黒褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片、白色粘土多量含む。
- 20 黒褐色土：しまり強。
- 21 暗褐色土：
- 22 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ローム粒多量含む。
- 23 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。
- 24 暗褐色土：しまり強。白色粘土、ローム粒多量含む。
- 25 黒褐色土：しまり強。白色粘土多量含む。
- 26 黒色土：しまり強。
- 27 暗褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。
- 28 暗褐色土：しまり強。ロームブロック少量含む。
- 29 黒色土：しまり強。ロームブロック少量含む。
- 30 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。
- 31 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、暗褐色土少量含む。
- 32 褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒・ブロック少量含む。
- 33 黒褐色土：しまり強。黒褐色土、白色粘土、ロームブロック少量含む。
- 34 褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。
- 35 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土多量含む。



土層説明 (G G')

- 1 暗褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。
- 2 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。
- 3 白色粘土
- 4 黒褐色土：しまり強。暗褐色土、ロームブロック少量含む。
- 5 暗褐色土：しまり強。黒褐色土少量含む。
- 6 黒褐色土：しまりやや強。ロームブロック少量含む。
- 7 黒褐色土：しまりやや強。
- 8 黒褐色土：しまりやや強。暗褐色土多量含む。
- 9 黄褐色土：しまり強。ローム粒・ロームブロック主体。
- 10 黄褐色土：しまり強。ロームブロック主体。黒褐色土多量含む。
- 11 暗褐色土：しまり強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。
- 12 黄褐色土：しまり極強。ロームブロック主体。黒褐色土少量含む。
- 13 黒褐色土：しまり強。褐色土、ロームブロック少量含む。
- 14 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量、黒褐色土少量含む。

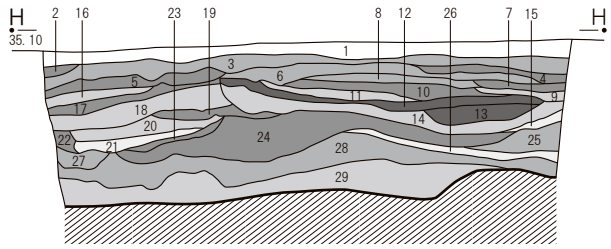
- 15 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。上位に凝灰質砂岩片薄く堆積。
- 16 黒色土：しまり極強。暗褐色土多量含む。上位に凝灰質砂岩片薄く堆積。
- 17 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒・ブロック多量含む。
- 18 暗褐色土：しまり弱。黒褐色土、白色粒少量含む。
- 19 黒褐色土：しまり弱。ローム粒少量含む。
- 20 暗褐色土：しまり弱。白色粒、白色粘土少量含む。
- 21 暗褐色土：しまり弱。黒褐色土、ローム粒・ブロック多量、白色粘土少量含む。
- 22 白色粘土
- 23 黒褐色土：しまり弱。凝灰質砂岩片、白色粘土多量含む。
- 24 黄褐色土：しまり弱。
- 25 黒褐色土：しまり強。
- 26 暗褐色土：しまり強。ロームブロック多量含む。
- 27 暗褐色土：しまり強。ロームブロック少量含む。
- 28 黒色土：しまり強。ロームブロック少量含む。
- 29 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。
- 30 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、暗褐色土少量含む。
- 31 褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒・ブロック少量含む。
- 32 褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。



第57図 瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(3)

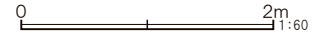
乱を受けていたが、総合的に遺存状況は概ね良好であった。

墳丘は、石室周囲のみの確認であるが、版築工法によるものであり、石室の裏込め土も含め、異なる色調の土を積み重ねて構築されていた。葺石及び周溝は、未確認である。横穴式石室は、凝灰質砂岩による切石積である。平面形は、馬蹄形を呈し、胴がやや張る。天井部は無く、玄室西側と羨道部の大半を攪乱により欠く。残存する玄室と側壁は、ともに大形の切石が最大二段内側に傾けて積まれており、玄室棺床面には川原石が敷かれ、玄門部では梱石が確認された。なお、石室でも玄室のある部分は、石室の構築にあたって切土が行われており、掘り方を持つことも確認された。



土層説明 (H H')

- | | |
|--|---|
| <p>1 耕作土</p> <p>2 黒褐色土：しまり弱。ローム粒少量含む。</p> <p>3 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。</p> <p>4 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。</p> <p>5 黒褐色土：しまりやや強。暗褐色土多量、ロームブロック少量含む。</p> <p>6 暗褐色土：しまり強。黒褐色土多量、ロームブロック少量含む。</p> <p>7 黒褐色土：しまり強。</p> <p>8 暗褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。</p> <p>9 褐色土：しまり極強。黒褐色土、ロームブロック多量含む。</p> <p>10 黒褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒少量含む。</p> <p>11 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。</p> | <p>12 黒色土：しまり強。暗褐色土、ロームブロック少量含む。</p> <p>13 黒色土：しまり強。ロームブロック少量含む。</p> <p>14 褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ローム粒少量含む。</p> <p>15 黄褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック主体。</p> <p>16 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量含む。</p> <p>17 黒褐色土：しまりやや強。ローム粒多量含む。</p> <p>18 褐色土：しまり極強。ローム粒・ブロック多量、礫少量含む。</p> <p>19 黒褐色土：しまりやや強。暗褐色土多量含む。</p> <p>20 褐色土：しまり極強。ロームブロック多量、礫少量含む。</p> <p>21 黄褐色土：しまり極強。ロームブロック主体。</p> <p>22 黒褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック少量含む。</p> <p>23 黒褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒。ブロック少量含む。</p> <p>24 黒褐色土：しまり強。ローム粒少量含む。</p> <p>25 暗褐色土：しまりやや強。黒褐色土、ロームブロック少量含む。</p> <p>26 黄褐色土：しまりやや強。ロームブロック主体。</p> <p>27 暗褐色土：しまり強。ロームブロック少量含む。</p> <p>28 暗褐色土：しまり強。ローム粒・ブロック多量、黒褐色土少量含む。</p> <p>29 褐色土：しまり強。暗褐色土多量、ローム粒・ブロック少量含む。</p> |
|--|---|



第58図 瀬戸山古墳群第29号墳土層断面図(4)

本墳に伴う遺物は、鉄鏃及び耳環である。埴輪は出土していない。鉄鏃は、玄室の棺床面、玄室埋土から出土した。耳環は、玄室西側の攪乱箇所から出土した。この他にも他の時代の遺物が、墳丘及び石室埋土、攪乱箇所等から少量出土している。出土したのは、縄文時代早・中期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代、近世の遺物である。これらは、本古墳群とほぼ同所に所在する瀬戸山遺跡のものである。以下、詳細について述べる。

ア 墳丘 (第54～58図)

今回の調査は、石室を主体とするものであったことから、墳丘を確認したのは石室の周囲のみである。墳丘は、攪乱を受けていた箇所も見られたが、おおむね良好な状態にあり、表土を浅い所で0.05m、深い所で0.20m掘り下げた面で検出された。墳丘の正確な規模は不明であるが、玄室中央からやや北寄り本墳の中心として調査区南側の土層断面で確認された裾部までの距離を基に推測すると、径約12mの円墳になると思われる。確認された墳丘の高さは、最も高い玄室付近で1.10mを測るが、石室の天井石がなく、側壁が露出していた状況からみて墳頂部が削平されていることは明らかである。墳丘は、版築工法で構築されており、ローム粒子・ブロック等の混入物やしまり具合に違いがあるが、褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黒色土の4つの異なる色調の土で構築されていた。特に墳丘の裾部付近に比べて中心部は5～10 cm程の厚さで薄く積み重ねられていた。また、玄室東側壁外側に接する上位では、裏込め土に白色粘土が使用されていたことも確認された。葺石及び周溝は、未確認である。

イ 主体部 (第59図)

主体部は、凝灰質砂岩の切石組積による胴張型横穴式石室である。天井石はなく、玄室は西側壁ほぼ中央の根元がごく一部が残るのみであり、そのほとんどを欠く。また、羨道部は、西側の羨門部付近が残存するのみで、そのほとんどを欠く。石室の主軸方位は、N-10°-Wを示し、ほぼ南に開口する。

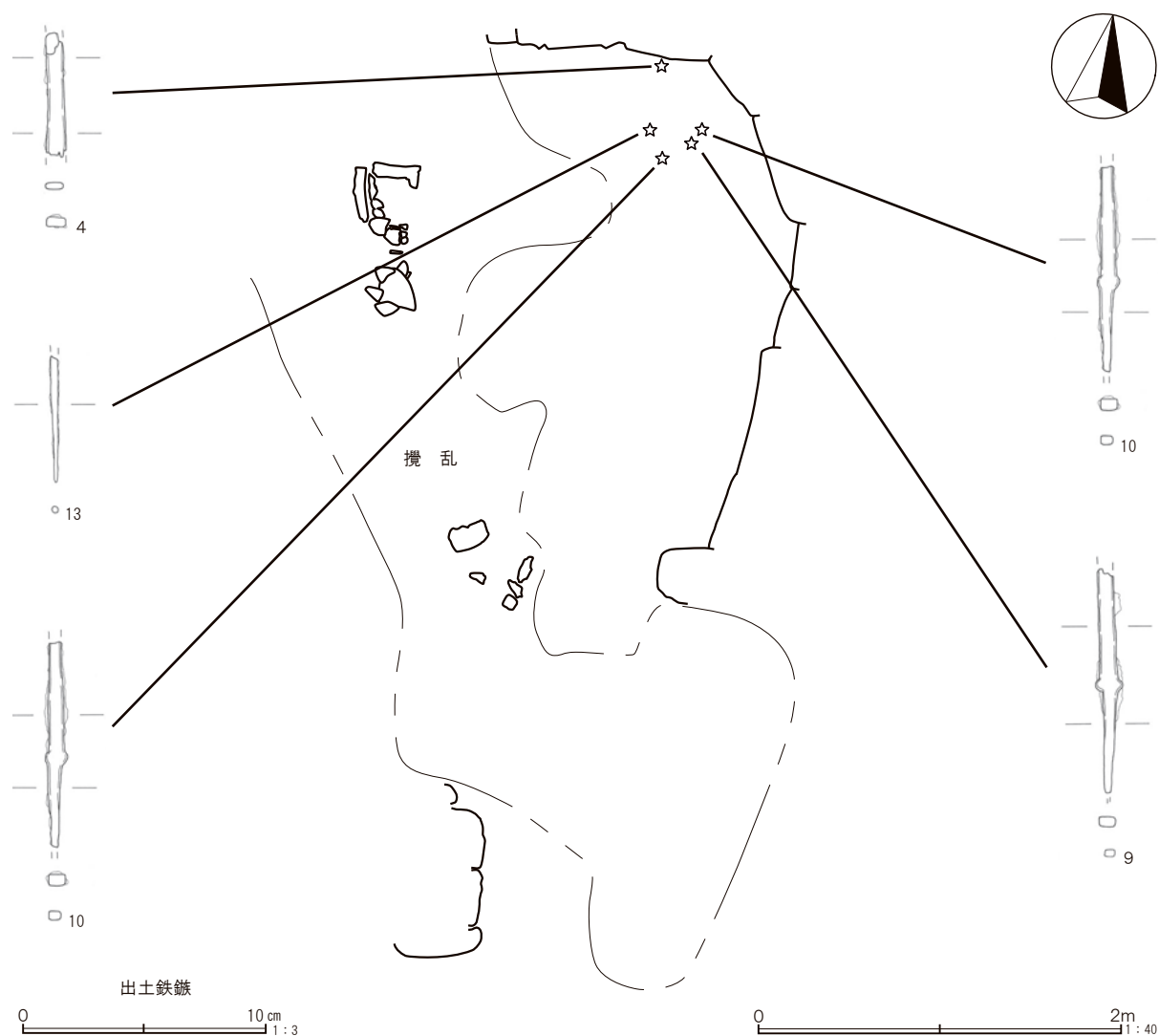
石室の規模は、玄室の長さが2.84m、幅は最大2.14m程、玄門部の幅は0.60m程と思われる。羨道部も推定になるが、長さ2.10m、羨門部の幅は1.10m程と思われる。平面形は、玄室が馬蹄形状を呈し、羨



第59図 瀬戸山古墳群第29号墳石室全測図

道部は羨門部から玄門部までほぼ直線的に伸びると思われる。

石室に使用された凝灰質砂岩の切石は、すべて鑿による加工痕が顕著に残るが、内側は外側に比べてやや丁寧加工されていた。残存する玄室の奥壁及び東側壁は二段確認されたが、東側壁中央と玄門部付近は一段のみ確認された。奥壁は、上段の石が上半分を欠いていたため規模は不明であるが、下段は長軸1.30m、短軸0.55m程の長方形を呈する大形のものが横長に据えられていた。東側壁は、下段に約0.50m四方を測る正方形の切石が据えられており、上段に長軸0.70m、短軸0.40m前後を測る長方形の切石を部分的にL字状に加工して組み合わせていた。なお、図面上では示せなかったが、側壁下段に並べた切石で外側に生じる隙間には、凝灰質砂岩の破片が多数埋め込まれていた。奥壁と側壁は、ともに下段から内傾するように積まれており、その角度は11°前後を示す。玄室棺床面には、基石程度から拳大までの大きさの川原石がほぼ一面に敷かれていた。玄門部には、長軸0.60m、短軸0.30m、厚さ0.06m程を測る片岩製の梱石が横長に立てられていた。羨道部は、西側の羨門部付近のみの残存であるが、一段のみ直線的に並んでいるのが確認された。なお、本墳は、やや急な斜面に立地することから石室の構築にあたって切土が行われており、掘り方を持つことも確認された。掘り方は、玄室東側のみ確認され、



第60図 瀬戸山古墳群第29号墳石室鉄鏝出土状況

東から西に掘り込まれていた。その高低差は、最も深い北側の調査区との境で0.20mを測り、玄門部手前で途切れる。

ウ 出土遺物（第60～63図、第24・25表）

本墳に伴う遺物は、鉄鏃（第61図1～14）及び耳環（第61図15～17）である。鉄鏃4・9・10・12・13・14は、玄室北側の棺床面から、その他は玄室の埋土から出土した。耳環は、すべて玄室西側の攪乱箇所から出土した。

（ア） 鉄・銅製品（第61図1～17、第24表）

1～14は、鉄鏃である。完形品はなく、すべて破片での出土である。接合関係は認められなかったが、同一個体になるものもあるかもしれない。1・2は片刃の鏃身部であり、頸部に関を持たない。3～7は篋被部である。断面形は上位が扁平、下位が方形を呈する。8～12は篋被部から茎部までの部位である。いずれも境に関を持つ。13・14は茎部である。断面形は、円形を呈する。

15～17は、耳環である。すべて完形品であるが、15は内側以外、金張りがほぼ剥離しており、外側は劣化が著しい。16は、遺存状態が良好であり、金張りの大半が残る。17は、劣化が激しく、金張りをほぼ欠く。

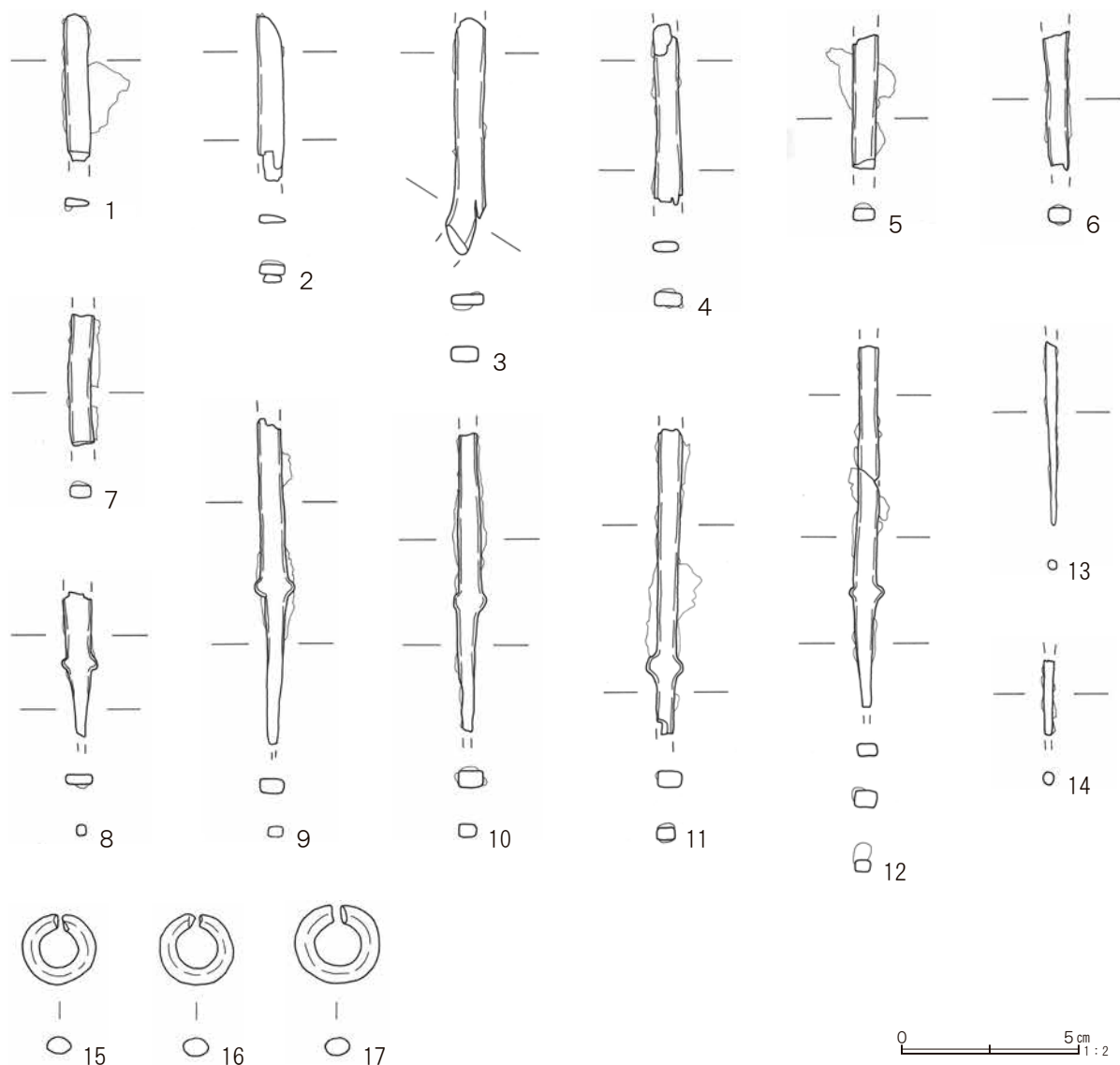
（イ） その他の時代の出土遺物（第62・63図18～63、第25表）

本墳では、古墳に伴わない遺物も墳丘及び石室埋土、攪乱箇所等から出土している。出土したのは、縄文時代早・中期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代、近世の遺物であり、このうち最も多く出土したのは古墳時代前期の遺物である。これらは、本古墳群とほぼ同所に所在する瀬戸山遺跡からの流れ込みである。また、玄室付近の攪乱箇所からは、馬の歯等も出土した。

18～28は、縄文時代の遺物である。18～22は、縄文時代早期の稲荷台式土器である。すべて深鉢形土器であり、18は口縁部片、19～21は胴部中段の破片、22は胴下部片である。すべて外面に撚糸Rが施文されている。胎土は、いずれもやや粗い。18は、内面に種子圧痕のような円形の孔が1か所認められた。23～27は、縄文時代中期後半の加曾利E式土器である。すべて深鉢形土器の胴部片である。23～26は、粒の大きいRL単節縄文、27は細かいLR単節縄文が施文されている。胎土は、いずれもやや密であるが、同一個体の23～25は、内外表面が橙色、間が黒色であり、サンドイッチ状を呈する。28は、打製石斧である。上半分を欠くが、形態は短冊形、もしくは抉りの浅い分銅形を呈すると思われる。石材は、ホルンフェルスである。

29は、弥生時代後期後半の吉ヶ谷式土器の甕である。口縁部から頸部にかけての破片である。器壁が薄く、外面に細かいRL単節縄文が施文されている。内面は、縦位のヘラミガキ調整が施されている。

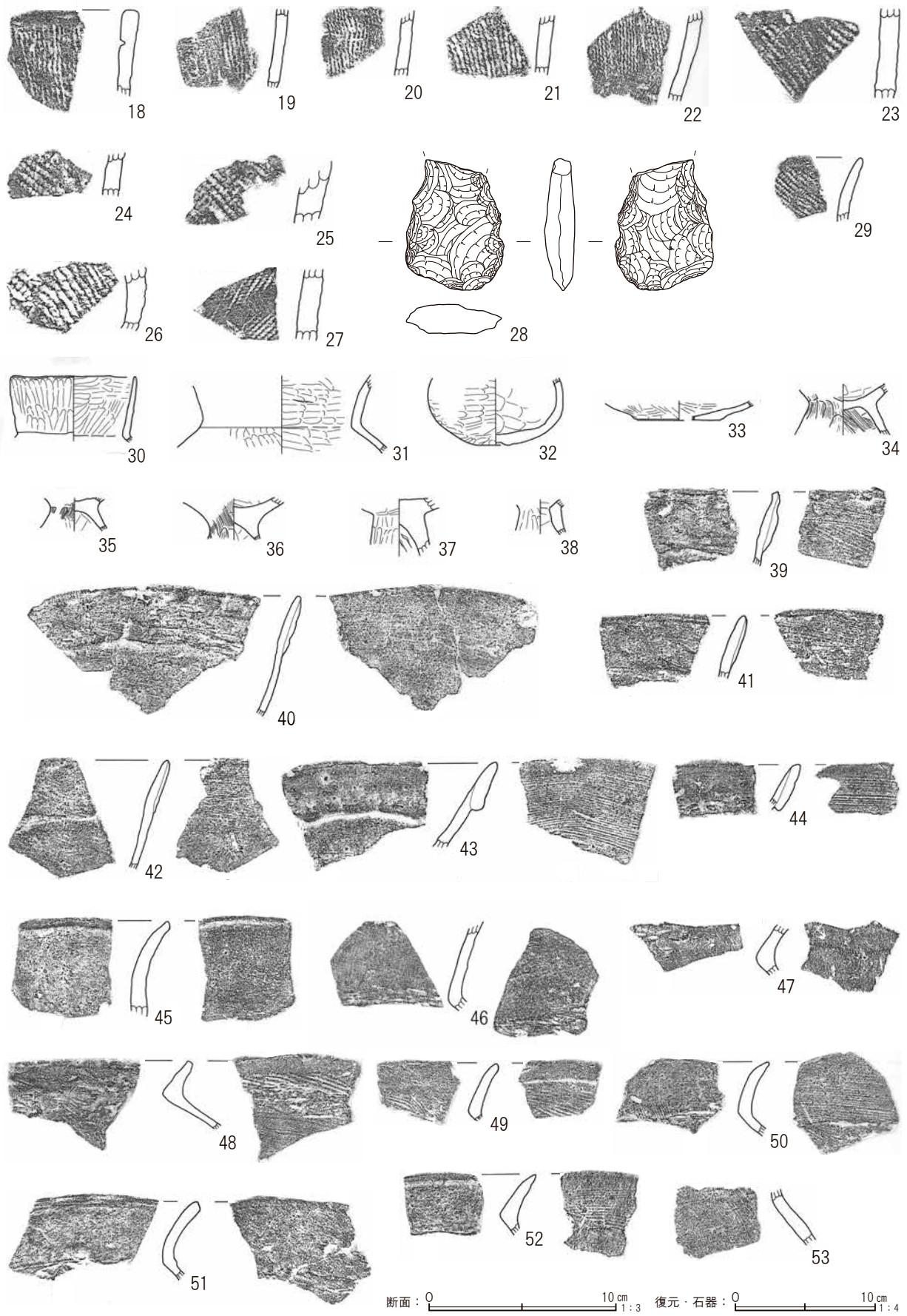
30～59は、古墳時代前期の土師器である。33・39～45・47は、壺である。33は、底部である。器壁が薄い。内外面ともに粗いヘラミガキ調整が施されている。39～45は、口縁部片である。39～44は複合口縁、45のみ単口縁である。39～42は同一個体である。口縁部は、やや鋭角に開く。調整は、口縁部外面が横・斜位の粗いヘラナデ、内面は上位が斜・横位のハケメ、下位は横位のヘラナデである。43は、口縁部がやや鋭角に開く。調整は、口縁部外面の上位が横ナデ、下位は縦・斜位のヘラナデ、内面は横位のハケメである。44は、43と同じく口縁部外面が横ナデ、内面は横位のハケメ調整が施されている。45は、口縁部が外反する。調整は、口唇部が横ナデ、口縁部外面は縦・斜位、内面は横・斜位のヘラミガ



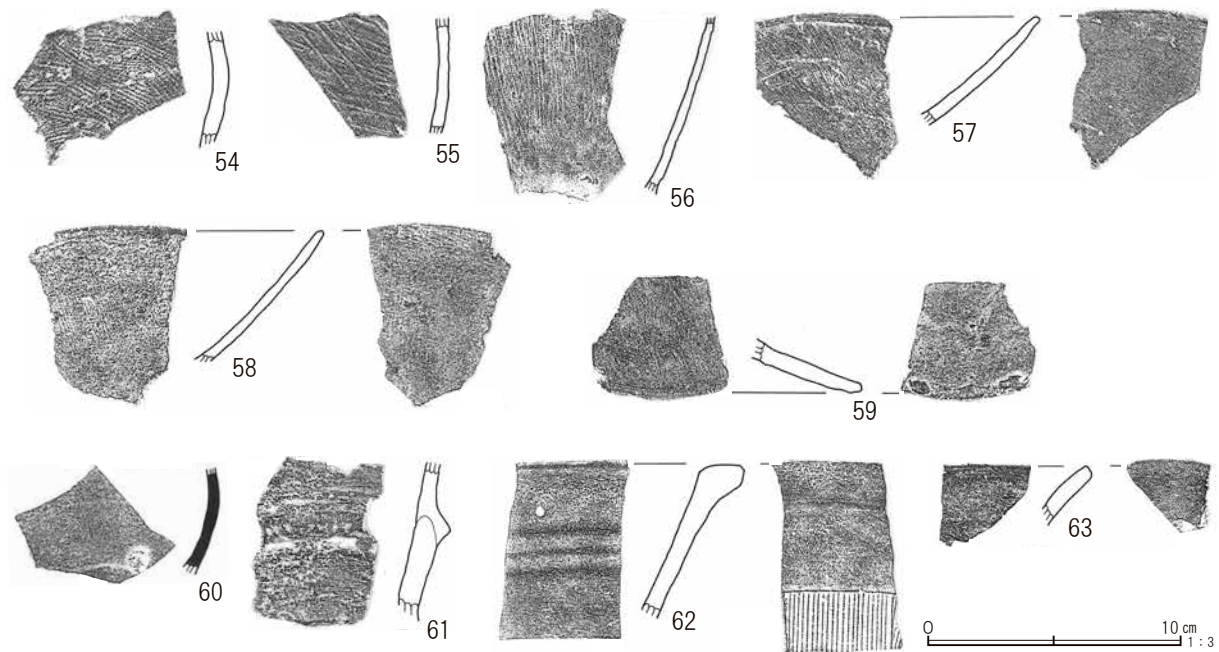
第61図 瀬戸山古墳群第29号墳出土鉄・銅製品（鉄鏃・耳環）

第24表 瀬戸山古墳群第29号墳出土鉄・銅製品観察表（第61図）

番号	出土位置	器種	法量・重量・残存状態・備考
1	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈4.15〉 最大幅〈0.70〉 最大厚〈0.30〉 重量〈4.20〉。鏃身部。
2	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈4.65〉 最大幅〈0.75〉 最大厚〈0.30〉 重量〈2.70〉。鏃身部。
3	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈6.70〉 最大幅〈9.00〉 最大厚〈0.40〉 重量〈6.40〉。篋被部。
4	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈5.10〉 最大幅〈0.80〉 最大厚〈0.40〉 重量〈3.30〉。篋被部。
5	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈3.80〉 最大幅〈0.70〉 最大厚〈0.30〉 重量〈4.00〉。篋被部。
6	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈3.90〉 最大幅〈0.70〉 最大厚〈0.40〉 重量〈2.50〉。篋被部。
7	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈3.70〉 最大幅〈0.65〉 最大厚〈0.30〉 重量〈3.20〉。篋被部。
8	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈4.10〉 最大幅1.00 最大厚0.30 重量〈2.30〉。篋被～茎部。
9	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈9.20〉 最大幅1.10 最大厚0.30 重量〈6.70〉。篋被～茎部。
10	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈8.45〉 最大幅0.95 最大厚0.50 重量〈6.40〉。篋被～茎部。
11	玄室埋土	鉄鏃	最大長〈8.60〉 最大幅1.05 最大厚0.45 重量〈9.70〉。篋被～茎部。
12	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈10.20〉 最大幅1.00 最大厚0.50 重量〈8.10〉。篋被～茎部。
13	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈5.20〉 最大幅〈0.35〉 最大厚〈0.25〉 重量〈0.80〉。茎部。
14	玄室棺床面	鉄鏃	最大長〈2.10〉 最大幅〈0.30〉 最大厚〈0.35〉 重量〈0.55〉。茎部。
15	攪乱箇所	耳環	長径2.10 短径2.00 最大厚0.70 重量6.70。完形。銅芯金張。内面以外金剥離。外側劣化顕著。
16	攪乱箇所	耳環	長径2.05 短径2.00 最大厚0.65～0.70 重量7.90。完形。銅芯金張。金大半残。
17	攪乱箇所	耳環	長径2.40 短径2.20 最大厚0.70 重量11.00。完形。銅芯金張。金ほとんど剥離。劣化顕著。



第62図 瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）(1)



第63図 瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）(2)

キである。47は、「く」の字を呈する頸部片である。調整は、外面が縦・斜位の細かいハケメ、内面は、横位のヘラナデ後、上位のみ一部に縦位のヘラミガキが施されている。

30～32・46は、小型壺である。30は、口縁部から頸部までの部位である。口縁部は、ほぼ直立する。調整は、内外面ともにヘラミガキが施されている。31は、口縁部から胴部上部にかけての部位である。口縁部は、やや外反しており、胴部は下位に膨らむ。調整は、口縁部外面が横ナデ、胴部上部はヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキ、胴部上部はヘラナデである。頸部内面には、輪積痕が一部残る。32は、胴部上部から底部までの部位である。胴部は球形状を呈し、小さい底部は上げ底になっている。調整は、外面がヘラミガキ、内面はヘラナデである。46は、口縁部から頸部までの破片である。調整は、外面が縦・斜位のハケメ後、縦位のヘラミガキ、内面は上位が横・斜位のハケメ後、斜位のヘラミガキ、下位は横位のヘラナデが施されている。

34・48～56は、甕ないし台付甕である。34以外、甕か台付甕か定かではない。34は、台付甕の接合部である。調整は、外面がハケメ、内面は胴部がヘラナデ、台部はハケメが施されている。48～52は、口縁部から胴部上部までに収まる破片である。48は、短い口縁部から胴部上部までが「く」の字状を呈し、胴部が大きく膨らむ。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、頸部外面は上位が斜位のハケメ、下位は横位のヘラナデ、胴部上部は斜・縦位のヘラナデ、頸部内面は横・斜位のハケメ、胴部上部は横位のヘラナデが施されている。49は、やや緩やかに外反する。調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、頸部は外面が斜位のハケメ、内面は上位が斜位のハケメ、下位が横位のヘラナデである。50・51は、口縁部がやや外反しながら立ち上がり、胴部はおそらく大きく膨らむと思われる。50の調整は、口縁部及び胴部上部の外面が横位のヘラナデ、頸部は縦位のハケメ、内面は口縁部が横位のハケメ、以下は横位のヘラナデである。51の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデであるが、外面のみ横ナデ前に施された斜位のハケメが一部残る。頸部から胴部上部にかけては、外面が縦位、内面は斜・横位のヘラナデが施されて

第25表 瀬戸山古墳群第29号墳出土遺物（その他の時代）観察表（第62・63図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
18	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABDIKN	明赤褐色	B	口縁部破片	縄文時代早期。
19	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABHIN	にぶい黄褐色	B	胴部中段破片	縄文時代早期。
20	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	AHIN	明赤褐色	B	胴部中段破片	縄文時代早期。
21	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABIN	橙色	B	胴部中段破片	縄文時代早期。
22	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABHKMN	橙色	B	胴下部破片	縄文時代早期。
23	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABEHKN	橙色	B	口縁部破片	縄文時代中期。 No.24・25と同一個体。
24	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABDHN	橙色	B	口縁部破片	縄文時代中期。 No.23・25と同一個体。
25	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABDHN	橙色	B	口縁部破片	縄文時代中期。 No.23・24と同一個体。
26	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ADHIN	黒褐色	B	口縁部破片	縄文時代中期。
27	縄文土器 深鉢形土器	-	-	-	ABEHIN	明黄褐色	B	口縁部破片	縄文時代中期。
28	打製石斧	最大長(9.40) 最大幅6.90 最大厚2.10 重量169.0						半分欠	ホルンフェルス製。
29	弥生土器 甕	-	-	-	ABHKN	橙色	B	口縁部～ 頸部破片	弥生時代後期後半。
30	土師器 小型壺	(9.00)	(4.70)	-	ABDGHN	明赤褐色	B	口縁部～ 頸部20%	古墳時代前期。
31	土師器 小型壺	-	(5.70)	-	ABCI	外面:黄褐色 内面:黒色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
32	土師器 小型壺	-	(4.80)	2.20	ABEIKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
33	土師器 壺	-	(1.40)	(6.40)	ABDHIKN	にぶい黄褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
34	土師器 台付甕	-	(3.70)	-	ABEN	にぶい橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
35	土師器 高坏	-	(2.45)	-	ABCDEKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
36	土師器 高坏	-	(3.00)	-	ABDGHN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
37	土師器 高坏	-	(4.15)	-	ABCHKN	明黄褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
38	土師器 器台	-	(3.00)	-	ABCIKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
39	土師器 壺	-	-	-	ABGHIJKN	明褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。 No.40～42と同一個体。
40	土師器 壺	-	-	-	ABGHIJKN	明赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。 No.39・41・42と同一個体。
41	土師器 壺	-	-	-	ABEGHIJKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。 No.39・40・42と同一個体。
42	土師器 壺	-	-	-	ABGHIKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。 No.39～41と同一個体。
43	土師器 壺	-	-	-	ABDEHIJN	明赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
44	土師器 壺	-	-	-	ABCHKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
45	土師器 壺	-	-	-	ABHK	橙色	B	口縁部破片	内面摩耗顕著。 古墳時代前期。
46	土師器 小型壺	-	-	-	ABHIKN	暗褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
47	土師器 壺	-	-	-	ABEIKN	明黄褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
48	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABCHN	外面:黒色 内面:橙色	B	口縁部破片	胴部外面輪積痕有。 古墳時代前期。
49	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABDHN	明褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
50	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABDHN	にぶい橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
51	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABDHIKN	赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
52	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABCHI	赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
53	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABGHKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
54	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABCHIN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
55	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABCHN	黄橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
56	土師器 甕(台付甕)	-	-	-	ABHIK	赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
57	土師器 高坏	-	-	-	ABDIJN	橙色、明赤褐色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
58	土師器 高坏	-	-	-	ABHIKN	橙色	B	口縁部破片	古墳時代前期。
59	土師器 高坏	-	-	-	ABHIN	明赤褐色、橙色	B	口縁部破片	外面赤彩。 古墳時代前期。
60	須恵器 瓶	-	-	-	AB	浅黄褐色	B	口縁部破片	外面一部自然釉付着。 産地不明。平安時代。
61	土師器 羽釜	-	-	-	ABHKN	明黄褐色	B	口縁部破片	外面摩擦顕著。 平安時代。
62	陶器 播鉢	-	-	-	-	赤褐色	A	口縁部破片	外面鉄釉。 堺・明石産。江戸時代。
63	陶器 反り皿	-	-	-	-	灰白色	A	口縁部破片	内外面透明釉。 瀬戸・美濃産。江戸時代。

いる。52もやや外反しながら立ち上がる。調整は、口縁部外面が横位、頸部は縦位のヘラナデ、内面は口縁部が横位のハケメ、頸部は横位のヘラナデである。53は、胴部上部片である。外面は斜・縦位の細かいハケメ、内面は横位のヘラナデが施されている。54・55は、胴部中段の破片である。54の調整は、外面が横・斜位のやや粗いハケメ、内面は横・斜位のヘラナデである。55の調整は、外面が横・斜位の粗いハケメ、内面は横位のヘラナデである。56は、器壁の薄い胴下部片である。調整は、外面大半が縦位のハケメ、下位のみ横位のヘラナデ、内面は斜位のヘラナデである。

35～37・57～59は、高坏である。35～37は、接合部である。35・36の調整は、ともに外面の調整は細かいハケメ、坏部内面はやや粗いヘラミガキ、脚部内面はヘラナデである。37の調整は、外面及び坏部内面がヘラミガキであり、脚部内面は無調整で絞り目が残る。57・58は、口縁部から坏部までの破片である。いずれもやや内湾気味に大きく開く。57の調整は、口縁部が内外面ともに横ナデ、坏部は内外面ともに横位のヘラミガキが施されており、外面はヘラミガキ前に施された斜位のハケメが所々に残る。58は、口縁部外面が横位のヘラナデ、坏部は縦・斜位のハケメ、内面は横・斜位のハケメ後、縦位のヘラミガキが施されている。59は、脚部の裾部片である。下位に大きく開く。調整は、外面が横位、内面は横・斜位のヘラミガキであり、外面は赤彩が施されている。

38は、器台の接合部である。中心に径1.4cmの孔が設けられている。調整は、外面及び器受部内面がヘラミガキ、台部内面はヘラナデが施されている。

60・61は、平安時代の土器である。60は、須恵器瓶の胴部中段の破片である。内外面ともにロクロナデが施されており、外面一部に自然釉が付着している。産地は、不明である。61は、土師器羽釜の鐳付近の破片である。外面は摩擦が著しいが、内外面ともに回転ナデが施されている。

62・63は、江戸時代の陶器である。62は、播鉢の口縁部片である。口縁部内外面に鉄釉がかかる。堺・明石産である。63は、反り皿の口縁部片である。内外面に透明釉がかかる。瀬戸・美濃産である。

4 調査のまとめ

瀬戸山古墳群は、その分布状況から平塚新田及び楊井地区の2つに大きく分けられる。標高の高い平塚新田地区に所在する古墳は、墳丘がすべて削平されており、石室が検出されたものはない。築造年代については、埴輪を持つものと持たないものがあることから、時期差があると考えられている。一方、楊井地区に所在する古墳は、高台に所在するものは墳丘が削平されているものもあるが、台地の斜面に所在するものは、今回報告の第29号墳も含め、墳丘と石室が残存しているものが多い。石室は、凝灰質砂岩の切石積による横穴式石室であり、6世紀後半の前方後円墳である伊勢山古墳を頂点として周辺に埴輪を持たない7世紀代の円墳が多数築造されている。第29号墳は、正確な規模は不明であるが、約12mを測る円墳と思われる、本古墳群の中では小規模な部類に入る。埴輪を持たず、時期を特定し得る土器も出土しなかったことから築造年代については、石室と鉄鏃から求めるしかないが、石室は奥壁の幅が広く、胴が張る両袖型と思われる。鉄鏃は、鏃身部が残存するものは2点しかないが、その形状は頸部に関を持たない片刃のものである。以上の内容からすると、第29号墳の築造年代は7世紀後半と考えられる。

本墳に伴わない他時代の遺物についても簡単に触れておきたい。縄文時代は、過去の調査でも石器等が出土していたが、今回の調査では新たに早期の撚糸文土器が出土した。早期の撚糸文土器は、本古墳群西側に所在する荒神脇遺跡をはじめ、いくつかの遺跡で確認されていることから、江南台地東端には集落跡が点々と存在することが窺える。弥生時代は、後期後半の吉ヶ谷式土器の甕が1点のみ出土しており、これも新知見となる。当地域の弥生時代は、中期は沖積地に立地する遺跡が多いが、後期になると台地や丘陵へ移ることが明らかとなっており、近辺に集落跡が存在したとしても不思議ではない。古墳時代前期について、遺物の出土量が最も多い点は過去の調査と同じである。特に今回の報告地点は、過去に城西大学が調査し、集落跡が確認された地点の南側に位置することから、ここからの流れ込みと考えられる。奈良・平安時代及び江戸時代についても、今回は少量のみの出土であったが、過去の調査で遺物が出土しており、近辺に集落跡が所在する蓋然性が高い。

今回の調査は、過去の調査成果をほぼトレースする内容となっているが、古墳以外にも細部において新知見を得ることが出来た点は、貴重な成果と言える。

引用・参考文献

- 熊谷市 1963 『熊谷市史 前篇』
- 熊谷市遺跡調査会 2011 『瀬戸山遺跡・山ヶ谷戸遺跡』
- 熊谷市教育委員会 1978 『楊井薬師寺古墳発掘調査報告書』
- 熊谷市教育委員会 2001 『瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群』
- 埼玉県教育委員会 1973 『埼玉県埋蔵文化財発掘調査要覧（昭和26～40年）』 埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告第2集
- 貞末堯司 1973 「熊谷市瀬戸山遺跡の調査」『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県遺跡調査会・埼玉県考古学会・埼玉県教育委員会
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳 大里』さきたま出版会
- 本村豪章 1991 「古墳時代の基礎研究稿－資料篇（Ⅱ）－」『東京国立博物館紀要』第26号

写真図版



北島遺跡 調査区・A区全景（東から）



北島遺跡 調査区・B区全景（北から、左右合成写真）

図版 2



北島遺跡 第1・2号掘立柱建物跡（南東から）



北島遺跡 第1号掘立柱列（北東から）

北島遺跡 第1号土坑（南から）



北島遺跡
第2・3号土坑（北東から）



北島遺跡
第1号溝跡、
第1～4号ピット（南から）



図版 4



北島遺跡
第2号溝跡、第7～11号ピット
(北西から)



北島遺跡
第3号溝跡、第5号ピット (北から)



北島遺跡
第1号井戸跡 (東から)



北島遺跡 第1号性格不明遺構（北西から）



北島遺跡 第2号溝跡 第11図1、遺構外 第14図1

図版 6



石原古墳群第4号墳 調査区全景（北から）



石原古墳群第4号墳 古墳全景（手前に周溝、東から）



石原古墳群第4号墳 周溝（東から）



石原古墳群第4号墳 周溝（北から）



石原古墳群第4号墳
周溝埴輪出土状況（B・C-2グリッド内）

図版 8



石原古墳群第4号墳
第1号土坑、第1号ピット（左）
（南から）



石原古墳群第4号墳
第2号土坑（北から）



石原古墳群第4号墳
第3号土坑、第3号ピット（下）
（南から）



石原古墳群第4号墳
第4号土坑（南東から）



石原古墳群第4号墳
第5号土坑（北西から）



石原古墳群第4号墳
第6号土坑
（右上は第5号土坑、北西から）

図版10



石原古墳群第4号墳
周溝 第18図1～4



石原古墳群第4号墳
周溝 第18図5



石原古墳群第4号墳
第6号土坑 第20図1・2



石原古墳群第4号墳 遺構外 第22図1～5



石原古墳群第4号墳
遺構外 第22図6 (左:表、右:裏)



諏訪木遺跡 調査区全景（南から）



諏訪木遺跡 調査区全景（東から）

図版12



諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡（北から）



諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡弥生土器壺・土偶形容器出土状況（南から）



諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡土偶形容器出土状況1 (南から)



諏訪木遺跡 第1号竪穴建物跡土偶形容器出土状況2 (左上:南から、右上:北から、左下:西から、右下:東から)

図版14



諏訪木遺跡 第2・3号竪穴建物跡（中央：第2号竪穴建物跡、右：第3号竪穴建物跡、北から）



諏訪木遺跡 第4号竪穴建物跡（東から）



諏訪木遺跡
第1・2号掘立柱建物跡（南から）



諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡（東から）

図版16



諏訪木遺跡
第3号掘立柱建物跡
柱穴P3検出状況



諏訪木遺跡
第3号掘立柱建物跡
柱穴P3板状木製品出土状況



諏訪木遺跡
第9号土坑
弥生土器台付壺出土状況

諏訪木遺跡
第14号ピット
礫・緑泥石片岩出土状況



諏訪木遺跡 第1号溝跡（中央に第7号土坑、南から）



諏訪木遺跡
第1号井戸跡、第1号火葬跡
（中央：第1号井戸跡、
左：第1号火葬跡、西から）





諏訪木遺跡
第1号竖穴建物跡 第26图1



諏訪木遺跡
第1号竖穴建物跡 第26図2
(左上：正面、右上：背面、
下：鳥脚文部分)



諏訪木遺跡 第1号竖穴建物跡 第27図12



諏訪木遺跡 第4号竖穴建物跡 第32図1



諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 第39図10

図版20



諏訪木遺跡 第3号掘立柱建物跡 第39図11



諏訪木遺跡 遺構外 第52図 3



諏訪木遺跡 遺構外 第52図 4



諏訪木遺跡 遺構外 第52図 8



諏訪木遺跡
第1号竖穴建物跡
第26図 3、第27図 4～11



諏訪木遺跡
第2号竖穴建物跡
第29図 1・2
第3号竖穴建物跡
第30図 1～11

諏訪木遺跡
第4号竪穴建物跡
第32図2・4



諏訪木遺跡
第1号掘立柱建物跡
第35図1～5
第2号掘立柱建物跡
第36図1～3
第1・2号掘立柱建物跡
第37図1～3



諏訪木遺跡
第3号掘立柱建物跡
第39図2～8・12・13



図版22



諏訪木遺跡
第4号土坑
第42図4-1~3
第5号土坑
第42図5-1
第6号土坑
第42図6-1
第8号土坑
第42図8-1
第9号土坑
第42図9-1・2



諏訪木遺跡
第15号ピット
第43図15-1・2
第16号ピット
第43図16-1
第18号ピット
第43図18-1



諏訪木遺跡
第1号溝跡
第44図1~4



諏訪木遺跡
第1号井戸跡
第46図 1～12



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期
遺物包含層
第48図 1・2



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期
遺物包含層
第48図 3～12

図版24



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期
遺物包含層
第48図13～23



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期
遺物包含層
第48図24・25



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期
遺物包含層
第48図26～34



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期遺物包含層 第49図35~38



諏訪木遺跡 遺構外 第52図1~12



諏訪木遺跡
縄文時代後期・晩期遺物包含層
第50図1



諏訪木遺跡 遺構外 第52図13・15

図版26



諏訪木遺跡

第3号掘立柱建物跡 第39図1



諏訪木遺跡

第4号竪穴建物跡 第32図3、第2号掘立柱建物跡 第36図4
第1号井戸跡 鉄滓、遺構外 第52図14



諏訪木遺跡

第1号竪穴建物跡 第27図13、第3号竪穴建物跡 第30図12、第4号土坑 第42図4-4
第3号掘立柱建物跡 第39図9、第1号溝跡 第44図5



諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図1～3



諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図 4～6



諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図 7～9



諏訪木遺跡 縄文時代後期・晩期遺物包含層 第51図10～12



瀬戸山古墳群第29号墳 調査区表土除去状況（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 調査区全景（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 石室全景（南から）

図版30



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（北から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（西から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室（東から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室 棺床面礫除去後1（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室 棺床面礫除去後 2 (南から)



瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部 床面礫除去後 (南から)

図版34



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室奥壁内側石積状況（南から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁内側石積状況（西から）



瀬戸山古墳群第29号墳 羨道部西側壁内側石積状況（東から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室奥壁付近内側石積状況（西から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁内側石積状況（西から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄門部付近内側石積状況（西から）



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁外側石積状況 1 (東から)



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室東側壁外側石積状況 2 (東から)



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室棺床面鉄鍬出土状況 1



瀬戸山古墳群第29号墳 玄室棺床面鉄鍬出土状況 2



瀬戸山古墳群第29号墳 墳丘西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 墳丘東側土層断面

図版40



瀬戸山古墳群第29号墳 SPBB'土層断面 1



瀬戸山古墳群第29号墳 SPCC'土層断面 1



瀬戸山古墳群第29号墳 SPBB'土層断面 2



瀬戸山古墳群第29号墳 SPCC'土層断面 2



瀬戸山古墳群第29号墳 SPBB'土層断面 3



瀬戸山古墳群第29号墳 SPCC'土層断面 3



瀬戸山古墳群第29号墳 SPBB'土層断面 4



瀬戸山古墳群第29号墳 SPCC'土層断面 4



瀬戸山古墳群第29号墳 SPBB'土層断面 5



瀬戸山古墳群第29号墳 SPCC'土層断面 5



瀬戸山古墳群第29号墳 SPDD'西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPDD'東側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPEE'西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPEE'東側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPFF'西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPFF'東側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPGG'西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPGG'東側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPHH'西側土層断面



瀬戸山古墳群第29号墳 SPHH'東側土層断面

図版42



瀬戸山古墳群第29号墳 奥壁内側加工痕 1



瀬戸山古墳群第29号墳 東側壁内側加工痕 4



瀬戸山古墳群第29号墳 奥壁内側加工痕 2



瀬戸山古墳群第29号墳 作業風景 1



瀬戸山古墳群第29号墳 東側壁内側加工痕 1



瀬戸山古墳群第29号墳 作業風景 2



瀬戸山古墳群第29号墳 東側壁内側加工痕 2



瀬戸山古墳群第29号墳 作業風景 3



瀬戸山古墳群第29号墳 東側壁内側加工痕 3



瀬戸山古墳群第29号墳 作業風景 4



瀬戸山古墳群第29号墳 第61図1～14



瀬戸山古墳群第29号墳 第61図15：左 16：中央 17：右



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図32



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図34



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図35・36・37・38（左から）

図版44



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図18~29



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図30・31・39~47



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第62図48～53、第63図54～59



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第63図60・61



瀬戸山古墳群第29号墳 その他の時代 第63図62・63



瀬戸山古墳群第29号墳 石室攪乱箇所出土馬骨

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたじまいせき いしはらこふんぐんだい ごうふん すわのきいせき せとやまこふんぐんだい ごうふん							
書名	北島遺跡Ⅱ 石原古墳群第4号墳		諏訪木遺跡Ⅵ		瀬戸山古墳群第29号墳			
副書名	市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ							
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	吉野 健 松田 哲							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2021（令和3）年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたじまいせき 北島遺跡	くまがやし かみがわかみあぎまえ 熊谷市上川上字前 567番144・145・46・126	11202	59-050	36° 9' 46"	139° 24' 20"	20140104 ～ 20140120	143.75	記録保存 調査
いしはらこふんぐん 石原古墳群 だいごうふん 第4号墳	くまがやし いしはらあぎはぐろ 熊谷市石原字羽黒 1146番2・3	11202	59-025-4	36° 9' 10"	139° 21' 55"	20140530 ～ 20140626	73.50	
すわのきいせき 諏訪木遺跡	くまがやし かみのあぎじんくわ 熊谷市上之字陣鋤 2768番3の一部	11202	59-016	36° 8' 54"	139° 24' 39"	20140703 ～ 20140823	78.66	
せとやまこふんぐん 瀬戸山古墳群 だいごうふん 第29号墳	くまがやし やぎいあぎせとやま 熊谷市楊井字瀬戸山 6番2	11202	59-027-34	36° 6' 18"	139° 22' 59"	20160301 ～ 20160325	32.00	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
北島遺跡	集落跡	奈良・平安時代	溝跡 3 掘立柱建物跡 2 掘立柱列 1 土坑 3 井戸跡 1	土師器 灰釉陶器 土師質土器				
石原古墳群 第4号墳	古墳群	古墳時代	古墳周溝 1 土坑 6	円筒埴輪 形象埴輪 土師器 銭貨			第4号墳の周溝を含む規模が推定できた。	
諏訪木遺跡	集落跡 墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代 平安～中世	遺物包含層 竪穴建物跡 1 土坑 4 竪穴建物跡 3 土坑 6 掘立柱建物跡 3 溝跡 1 井戸跡 1	縄文土器 土製耳飾り 石器 弥生土器 土偶形容器 石器 土師器 須恵器 鉄鏃 土師器 須恵器 刀子 柱材? 須恵系土師質土器 土師質土器 陶器			弥生時代中期末の竪穴建物跡から弥生土器壺（栗林式土器）と共伴して土偶形容器が出土し、ほぼ完形品としては埼玉県初の事例となった。	
瀬戸山古墳群 第29号墳	古墳群	古墳時代	古墳石室 1	鉄鏃 耳環 縄文土器 弥生土器 土師器 石器			偶然の発見による調査契機ではあるが、当該古墳群における古墳石室調査事例の1つとなった。	

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第41集

北 島 遺 跡 II
石原古墳群第4号墳
諏訪木遺跡 VI
瀬戸山古墳群第29号墳

－市内遺跡発掘調査報告書VII－

令和3年3月26日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／大屋印刷株式会社